

目次

〔研究論文〕 公共文化ホールの大規模改修における増築と耐震補強の設計手法 —旧清瀬市民センターを事例として—……………1 奥村 誠一、角田 誠、青木 茂	大学生と読書 —読書環境の変化3—…………… 59 吉田 昭子
インド中世主義 —アーナンダ・ケンティッシュ・クーマラスワミと 芸術思想—……………9 シェイク愛仁香	「不死鳥」におけるリアリズム (2) —「海行く人」の「Ne＋主語」成句との比較— …… 66 白井 菜穂子
東京オリンピックにおけるトライアスロンミックスリレーの レース展開とリレーオーダー戦略について …… 23 森谷 直樹	光の芸術家マリアノ・フォルチュニ —1911年の「女性の仕事の博覧会」を ブルーストは見たか？—…………… 71 勝山 祐子
3次元行動からの増減符号解析による 個人識別手法の検討…………… 31 高橋 大介、平野 晃昭、立野 玲子、中村 納	第二言語としての日本語習得における コグトレのケーススタディー —支援を必要とする生徒への取り組み—…………… 85 梶原 朱里
〔研究ノート〕 太平洋の両岸で —ハロルド・ライト作品と戦後日本における他者化— … 39 久保田文、John J. Han	〔書評〕 今、北京を語ることの意義 —劉一達著、李濱声イラスト、日中翻訳学院本書翻訳チーム訳 『悠久の都 北京——中国文化の真髄を知る』— …… 95 米井 由美
定冠詞と不定冠詞の機能と用法の考察 …… 46 ジョン・D・オーエン	〔文献・資料紹介〕 文化学園所蔵「着物図案」 およびその関連資料群について …… 98 近藤 尚子、田中 直人、関口 光子、中村 弥生

Contents

〔Research Papers〕 <i>OKUMURA Seiichi,</i> <i>TSUNODA Makoto and AOKI Shigeru</i> Design Methodology of Extension of Renovation and Seismic Reinforcement of Public Cultural Halls —A Case Study of Former Kiyose Civic Center— 1	<i>YOSHIDA Akiko</i> University Students and Reading —Changes in Reading Environment Part3— 59
<i>SHAIKH Anika</i> Indian Medievalism —Ananda Kentish Coomaraswamy’s Vision of Arts and Crafts— 9	<i>SHIRAI Naoko</i> An Analysis of Realism in The Phoenix (Part 2) —A Comparative Study of the ‘Ne’ + ‘Subject’ Formula in The Seafarer— 66
<i>MORIYA Naoki</i> Race Development and Relay Ordering Strategy for Triathlon Mixed Relay at Tokyo Olympic Games 23	<i>KATSUYAMA Yuko</i> Mariano Fortuny, Artist of Light —Did Proust Visit “The Exhibition of Women’s Work” in 1911 ?— 71
<i>TAKAHASHI Daisuke, HIRANO Teruaki,</i> <i>MINAMIKAWA-TACHINO Reiko and NAKAMURA Osamu</i> A Study on Personal Identification Method by Increase/Decrease Code Analysis from 3D Behavior 31	<i>KAJIHARA Akari</i> A Case Study of Cognitive Enhancement Training in Japanese as a Second Language —A Trial on a Student with Special Needs— 85
〔Research Notes〕 <i>KUBOTA Aya and John J. Han</i> Otherization on Both Sides of the Pacific —The Ozarks in Harold Bell Wright’s Fiction and Japan After World War II— 39	〔Book Reviews〕 <i>YONEI Yumi</i> In-depth Descriptive Analysis of Modern-day Beijing —Liu Yida, <i>Dao Beijing (On Beijing)</i> — 95
<i>OWEN, John D.</i> Consideration of the Function and Usage of Definite and Indefinite Articles 46	〔Research Sources〕 <i>KONDO Takako, TANAKA Naoto, SEKIGUCHI Mitsuko</i> <i>and NAKAMURA Yayoi</i> Kimono Design Resources Accessible at Bunka Gakuen 98

公共文化ホールの大規模改修における増築と耐震補強の設計手法

—旧清瀬市民センターを事例として—

Design Methodology of Extension of Renovation and Seismic Reinforcement of Public Cultural Halls

—A Case Study of Former Kiyose Civic Center—

奥村 誠一* 角田 誠** 青木 茂***

OKUMURA Seiichi, TSUNODA Makoto and AOKI Shigeru

要旨

高度経済成長期に整備された公共文化ホールの多くは築30から40年が経過しており、一斉に更新時期を迎えている。人口減少や人口構成の変化にともない、住民のニーズと公有資産の供給量のバランスが保てなくなっており、持続可能な財政運営による対応が不可欠である。他方、公共施設の機能改善の需要と安全に対する意識は高まり、耐久性能や耐震性能の確保は喫緊の課題となっている。特に、ホールを使用する際の機能上の問題点は致命的であり、これを改善するためには個々の施設の問題だけではなく、周辺環境を踏まえた法規上の問題などを解決しなければならない。本研究では、老朽化し公共文化ホールの大規模改修における個別手法と、それぞれ手法間で考慮すべき内容の相互関係について、増築による機能改善計画と増築による法的な対応と合わせて、耐震補強計画の3点を整理することにより、トレードオフの関係にある事業者の要望を満たすといった、他の公共文化ホールへの応用の有用性を明らかにしている。

●キーワード：公共文化ホール（cultural hall）／増築（extension）／耐震補強（seismic reinforcement）

I. はじめに

I-1. 研究の背景と目的

高度経済成長期に整備された公共施設の老朽化は進んでおり、その多くは一斉に更新時期を迎えている^{注1)}。特に、人口減少や人口構成の変化にともない、住民のニーズと公有資産の供給量のバランスが保てなくなっており、国や地方自治体の財政制約下において、持続可能な財政運営による対応が不可欠である。

現存する公共施設を建て替えて更新しつづけた場合、50年後には、財政制約を受けて更新できなくなる公有資産量は約30兆円分になると推測されている^{注2)}。このままでは、必要性の高い公共施設までも、良好な状態で保つための維持管理すら十分にされない恐れがある。

他方、公共施設の機能改善の需要と安全に対する意識は高まり、耐震性能の確保は喫緊の課題となっているが、その対象のひとつが、公共文化ホールである。公共文化ホールの多くは図書館や集会機能を併設した施設として各市町村にほぼ同時期に建設され、現在、築30年から40年を迎えている。そのため、劣化による美観上の問題、耐震性の問題、機能上の問題が生じている。特に、ホールを使用する際の機能上の問題点は致命的であり、これ

を改善するためには個々の施設の問題だけではなく、周辺環境を踏まえた法規上の問題を解決しなければならない。

本研究では、利便性の向上と耐震性、および、安全性の確保とを目的とした、公共文化ホールの大規模改修の設計手法における個別設計手法と、それぞれの手法間で考慮すべき内容の相互関係について、増築による機能改善計画と増築による法的な対応と、耐震補強計画との3点から、トレードオフの関係にある事業者の要望を満たすといった、他の公共文化ホールへの応用の有用性を明らかにする。

I-2. 既往研究の整理

公共文化ホールの既往研究としては内装や空間構成の更新を目的としたものや、設備機能の老朽化に伴う改修を目的としたものが挙げられる。

また、公共文化ホールにおいて、増築を行った改修事例はあるが、1つの建物に対して複数の増築を同時に行い、複合的に公共文化ホールとしての機能改善が図られた事例はみられない。

I-3. 研究の対象

本研究の対象は、東京都清瀬市の旧清瀬市民センター

(以下、Kセンター)である。清瀬駅前から市役所に続く沿道を300メートル進んだ敷地にKセンターはある。Kセンターは1976年に建設された、地上4階地下1階の公共文化ホールである。既存建物の用途は、市民センターと公会堂、図書館、子育て支援施設の複合用途であり、様々な文化活動に使用されていた。

Kセンターは、市内で唯一のプロセニウム形式のホールを有しているが、築34年が経過し、建物各所に老朽化による不具合が見られ、文化ホールとしての役割を十分に果たすことのできない状況となっていた。そのため、市民からの再整備の要望が提出され、市は財政状況や環境問題等を踏まえ、また、場所性や市民の愛着等も考慮し、建て替えではなく、既存建物を再生して利活用することを選択した。

市から提示された要求条件は、既存建物を残しながら安全性を確保することと、文化ホールを中心とした施設の利便性を向上することであった。これらの要求条件に対して、2006年1月に施行された改正耐震改修促進法に基づく耐震補強工事と、増築による文化ホールの機能改善を図った。Kセンターの構造は鉄筋コンクリート造一部鉄骨造であり、新耐震設計法が施行された1981年6月以前に設計された建物であるため、耐震診断の結果に基づき耐震改修を行った。改修設計の期間は2008年4月から2009年9月までであり、新たな増築に対して、2009年9月に確認済証が発行されている。施工期間は2009年10月から2010年11月の13ヶ月であり、2010年7月に検査済証が発行された。

Ⅱ. 増築による機能改善計画

Ⅱ-1. 発注者からの要求事項と改善方法

対象箇所における主要要望に対して、どの増築部分によって機能が改善されたかを表1に示す。改善にあたって対象箇所とそれぞれの主要要望が発注者から挙げられた。それに対し、設計者との議論により要望の採否を決定した。解決するための条件は、設備や空間構成の更新により改善できるものと、増築による改善が図られる内容とに分けられた。対象機能である児童図書館は4階に位置しており、設備と空間構成の更新のみにより、機能改善が行われた。

増築により改善された機能は、ホールと周辺諸室との動線に関する機能（外部増築による改善）と、ホール内の鑑賞環境に関する機能（内部増築による改善）の2点に大別できる。具体的には、既存建物の外部側の南側の

表1 要望事項と改善方法

対象箇所	増築箇所	要望の採否	増築による機能改善項目				備考
			外部増築	内部増築	バルコニー	客席	
ホール・客席	搬入口の整備	○	○				段差の解消、庇の設置
	舞台倉庫の確保	○			○		増築により対応
	客席数の増加	○				○	481席から508席に増加
	二重階の設置	○	○				音響性能向上
	車椅子対応の客席	○		○			客席スペースと動線の確保
	音響性能向上	○	○			○	平土間席から勾配のある客席の設置
	視覚環境向上	○			○	○	平土間席から勾配のある客席の設置
	設備機能向上	○	○				音響、空調、舞台機構の刷新
	照明設備の充実	○	○				一般照明、舞台照明の刷新
	プロセニウム型の拡充	○	○				プロセニウム開口の変更
	観客室の設置	×					他機能を優先
	クロークの設置	×					他機能を優先
	舞台の拡大	×					構造上不可
	ロビーとホワイエの分離	○	○				1Fにロビー、2Fにホワイエを設置
	交流スペースの設置	○	○				1Fロビー拡充により交流スペースを整備
ロビー・ホワイエ	ロビーの拡充	○	○				1Fにあったホワイエを2Fに設置
	ギャラリースペースの設置	○	○				多目的室にて対応
	コンシェルジュの設置	○	○				1Fエントランスに面して設置
	ロッカー設置	○			○		倉庫とロッカー室を兼用
	階段を直線状に	○	○				ゆとりのあるメイン階段を設置
	喫茶店の設置	×					運営上の市の判断
	専用トイレの設置	×					構造上不可
	専用倉庫の設置	○	○				会議室を取り込み面積を拡大
	面積の拡大	○	○				会議室を取り込み面積を拡大
	図書館の存続	○	○				児童図書館として存続
児童図書館	お話コーナーの設置	○	○				会議室を取り込み面積を拡大
	遊具空間と分離	○	○				遊具空間スペースを設置
	蔵書数を増やす	○	○				面積拡大により増加
	読書スペースの設置、上足対応	×					運営上の市の判断
会議室・楽屋	楽屋数の増加	○			○		増築により対応
	楽屋面積の増加	○			○		増築により対応
	楽屋機能の充実	○	○		○		演者へのヒアリングに基づき整備
	多目的スペース	○	○				複数用とに対応可能な室の整備
	練習室	○	○				児童図書館に設置
	防音機能の充実	○	○				内装仕様の調整
	OA機器の充実	○	○				設備機器の刷新

注：内部増築とは、既存建物の屋内の吹き抜け部分に新たに床を増設し、法定床面積が増加した増築のことをいう。また、外部増築とは、既存建物の外部側に隣接する位置に行った増築のことをいう。

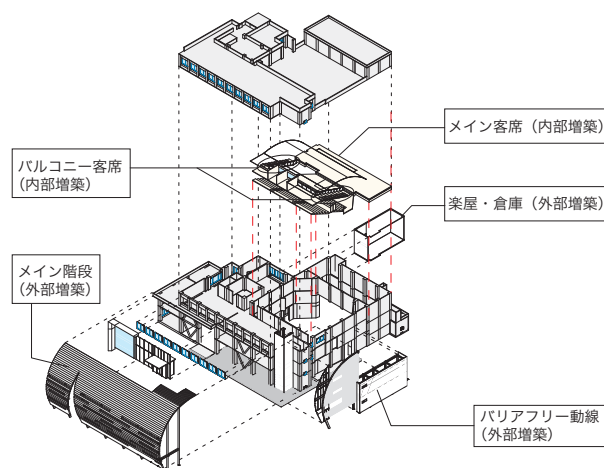


図1 既存部分と増築部分の関係

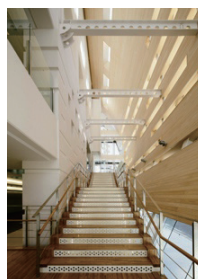


写真1 外部増築（メイン階段）



写真2 外部増築の接道状況

メイン階段、東側のバリアフリー通路棟、北側の楽屋・倉庫棟の3つの増築と、建物の内部の大ホールにメイン客席とバルコニー客席の2つの増築の、計5カ所である。この5カ所の増築部分との既存部分との関係性を図1、および、表2に示す。

Ⅱ-2. ホールと周辺諸室との動線に関する整備手法 (外部増築)

南側のメイン階段の増築(写真1)により、既存建物の使用時に兼用されていたエントランスホールとホワイエを分離して動線を確保し、「ロビーとホワイエの区切り」「交流スペースの確保」「ロビーの拡張」の要求に対し、ロビーとホワイエの機能改善を図った(図2、3、5)。この外部増築部分は前面の主要道路に面していることから、外壁面を曲面として歩行空間部分の確保をするなどの工夫を行った(写真2)。メイン階段は4層吹抜けの空間とし、曲面形状の壁面の仕上げは全面ヒノキ張りとした。この曲面形状の壁にはスリット状の複数の開口部を設け、採光を確保した。また、メイン階段の1段目の踏み板を広く設け、ステージとしても利用できるようにし、1階のエントランスホールの多目的な利用を可能とした(写真3)。この建物内部に階段やエレベーターなどの昇降のための機能を配置する場合は、梁や柱などの既存の構造躯体に影響を受けやすいため、敷地面積に外部増築が可能な空間があれば、増築と合わせて昇降機を配置する手法が有力な選択肢となった。

また、東側のバリアフリー通路棟として1/12勾配のスロープを増築した。この増築により、共用ロビーから車いすでのホールの動線を確保し、ホール内部に「車椅子の客席」を設けることができた。要求される座席数を確保するための面積確保が前提となるが、スロープ配置による安全性の確保と、ホールの鑑賞環境の向上はトレードオフの関係にあり、増築によって解決した一例である。

さらに北側の楽屋・倉庫棟の増築により、「楽屋数の増加」「楽屋面積の増加」を図った。あわせて楽屋と舞台スタッフの動線の確保と、舞台から直接備品や機器を収納できる倉庫の確保のために舞台袖の拡張を行うことにより「楽屋機能の充実」を図っている。増築による搬入導線の縮小を考慮して、影響のない配置計画とすることや、増築とあわせて庇を設け、4トンのガルーピング車から舞台袖まで雨にさらされずに、大道具を搬入できるように対応するなどの工夫を行った。倉庫はロビー・ホワイエの機能改善において要求されたロッカーの機能も兼ねている。

表2 増築により改善した5つの機能

要求された機能	改善手法	増築箇所	改善方法	ポイント
1 エントランスホールとホワイエを分離	外部増築	メイン階段	動線を分離する階段設置	日影規制対応
2 車いすでのホールへの入室動線確保	外部増築	バリアフリー動線	スロープ設置	既存案により内部設置不可能
3 楽屋と倉庫の充実	外部増築	楽屋・倉庫	楽屋と倉庫の設置	駐車場減少
4 客席数の増加	内部増築	バルコニー増築	バルコニー客席の設置	構造・音響環境にも影響
5 ホールの鑑賞環境の改善	内部増築	メイン客席	客席が直接音を反射	杭・既存躯体との取合い

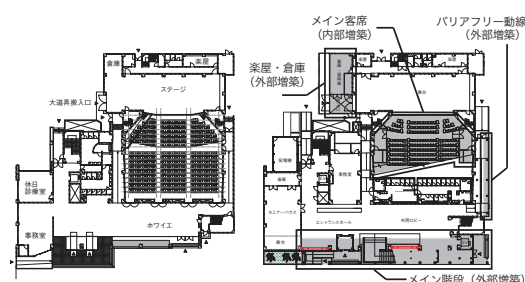


図2 既存(左)と増築後(右)の1階平面図

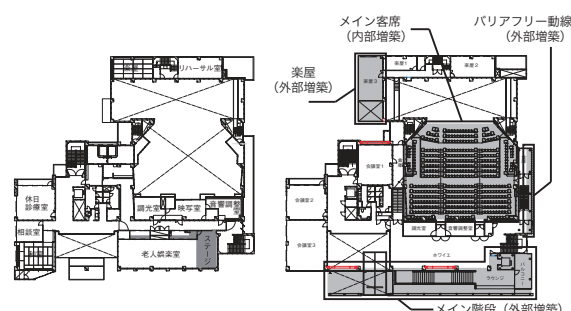


図3 既存(左)と増築後(右)の2階平面図

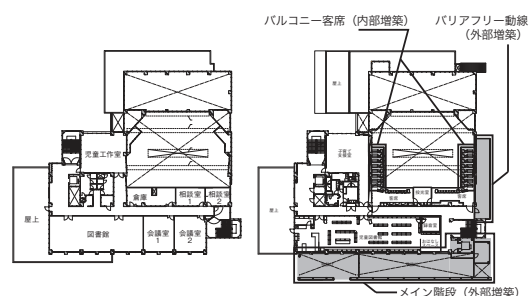


図4 既存(左)と増築後(右)の3階平面図

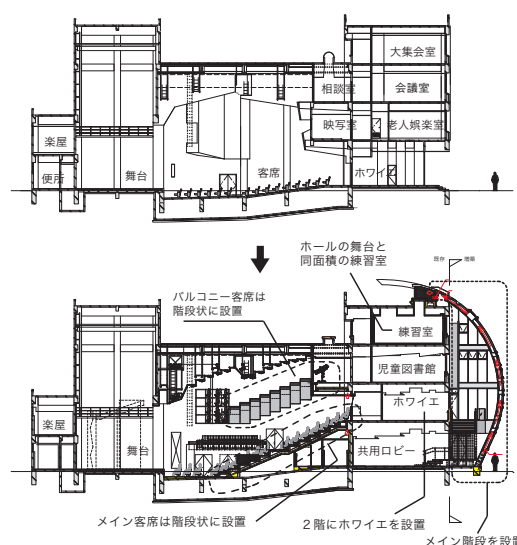


図5 既存(上)と改修後(下)のホール機能の変化

Ⅱ－３．ホール内の鑑賞環境に関する整備手法（内部増築）

機能改善する対象箇所のうち、ホールにおける鑑賞空間の機能改善要求が最も重要視された。メイン客席とバルコニー客席の増築により「客席数の増加」を行った。ホール内の座席数は、客席の増築により481席から508席に増加させ、「車椅子対応の客席」も設けた。また、改修前は平土間客席であった客席の勾配をメイン客席の増築により上げることで、直接音が客席に到達しやすくなり、「音響性能向上」も実現した。

「視覚環境向上」については、メイン客席の増築により、1層から2層の階段状とし、客席と舞台の関係を立体的に構成することで、どの客席からも舞台鑑賞に支障がない計画とした。メイン客席は1人あたりの座席空間を奥行き950mm、幅520mmとして、既存の座席空間よりも広く確保した。内部の鑑賞空間の改善に伴い、既存客席部分にあった通路の不足面積をホールの東側の外部増築（バリアフリー動線）により補っている。

既存のホール客席の形状は舞台から扇状に広がっているため、客席の側方からの初期反射音が不足する欠点があった。そこで舞台袖から客席に向かって直角に側壁をつくり、側壁に沿って設置した2階屋内増築であるバルコニー席の壁により、客席に初期反射音の向上機能をもたせた。バルコニー席の設置と、木による凹凸のある仕上げにより、直接音を側方からくる反射音で補強し、使用目的に応じた適切な音の響きを持つように機能が改善された（図4、写真4）。

残響時間周波数特性について竣工時に音響性能を計測し、改修前の音響測定の結果と比較して改修の効果の確認を行った。その結果、空席時、音響反射板設置時は1.24秒/500Hzと響きの感じられる室内楽に好ましい空間となった。また、幕設置時は1.02秒/500Hzで周波数特性もほぼ平坦で音声明瞭な空間となった。音響性能に関しては、既存空間の音響の弱点をあらかじめ知ることができたため、弱点を補うことにより立体的な音響空間を構成とすることができ、扇型の多くの多目的ホールの弱点を改修したものとなっている。

内部増築により要求される機能改善を行うとともに、仕上げに温かみのある木材を用いることによる大ホールの意匠性の向上の工夫を行い、さらに、演者の高揚感や臨場感の創出を改善し、市民が利用しやすい親しまれる文化ホールとなった。

Ⅱ－４．増築により制約を受けた外構部分の改善手法



写真3 1階エントランスホール



写真5 緑化された駐車場

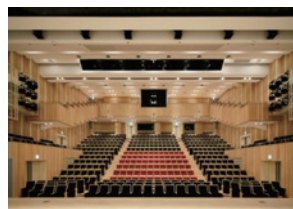
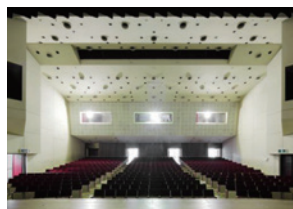


写真4 既存(左)と改修後(右)の大ホールの変化

3ヶ所の外部増築により、駐車場や駐輪場の再配置が必要となったため、駐車場を広場としても利用できる緑化ブロックを用いて整理した。緑化駐輪場とすることにより、夏期の温度低減、雨水の浸透、土埃の予防、景観の向上などの環境改善を図っている（写真5）。さらに既存の塀を撤去し、閉鎖的な空間を市民が自由に往き来できる開放的な空間となるように計画した。このことにより死角がなくなり安全性が向上し、違法駐車や違法駐輪が減少した。また、高木を植樹して建物の存在感を抑制し、地域にとけ込むことにより、緑化駐車場を含むKセンターの外構は地域の公園となっている。この公園は市民の利用率も高く、市からの一定の評価を受けた。

Ⅲ．増築に関する法的な対応

Ⅲ－１．用途地域の既存不適格の対応

Kセンターの敷地は既存建物の竣工後、都市計画法に基づく用途地域の指定が変わり、現在の用途地域指定（第一種中高層住居専用地域・商業地域）では、この敷地に公会堂を新築することはできなくなり、既存不適格となった。そこで既存建物の公会堂の用途を維持するため、既存建物の躯体を残し、既存部分を再利用しながら大規模改修を行い、合わせて増築を行う計画とした。

用途地域が既存不適格の場合、増築面積の規制（建築基準法施行令137条の7、用途地域等関係）、増築後の床面積合計が基準時（既存床面積）の1.2倍を超えないこと、増築後の既存不適格用途部分の床面積の合計が基準時の1.2倍を超えないこと、の3点の制限がある。Kセンターではこの法が定める増築時の緩和規定に基づき、既存建物の延べ床面積の2分の1以下の増築と、既存建物の延

べ床面積の20分の1以下かつ50㎡以下の増築を同時に行った。その結果、既存の屋内の機能改善において、屋内の諸室面積が減少する制約にとらわれることなく、新たなプログラムを計画することが可能となった。

Ⅲ－２．日影制限の既存不適格の対応

日影制限に関する用途地域指定についても既存建物の竣工後に変更されたことにより、現行法では適合しないため、Kセンターは既存不適格となった。また、令第137条にて政令で定められていない事項であったため、増築を行う場合は行政との協議が必要であった。東京都の場合、東京都日影規制条例の一審査基準にて判断するが、一括基準には不適合であったことから「敷地周辺の住環境を悪化させないこと」かつ「増築部分のみの日影が現行法に適合すること」が求められた。

そこで、増築部分は既存部分の日影曲線を超えない配置とした。あわせて増築部分のみの日影は現行法に適合することを確認した(図6、7)。この時、日影に大きく影響を及ぼすメイン階段の増築部分は外周壁を金属板で覆い、主要道路側の外壁形状を曲面とすることで歩道面における幅員を確保することが出来た。日影に関する上記2点の要求を満足させ、許可申請を行った(写真2)。

Ⅲ－３．既存部分と増築部分の取合い

増築に関する構造指針を表3に示す。増築部分の面積が50㎡以上の場合、法規上、既存建物の危険度を増加させないため、増築部分はエキスパンション・ジョイントを用いて既存躯体から切り離すことが必要である。そこでKセンターでは3つの外部増築と内部のメイン客席の増築部分について、エラストイトと呼ばれる繊維質を混ぜた土木用伸縮目地や、ルーズホールを設けた鉄骨の接合など、部位に応じたエキスパンション・ジョイントを用いて既存部分と構造的に分離した。4層吹抜けの外部増築であるメイン階段は曲面形状の柱のみで自立させる為に、既存建物とは別に新たに杭を設置した。また、既存躯体に水平力を伝えない構造とする為、倒れ止めとして既存躯体とローラー支持(すべり支承)で接合した(写真6)。

メイン客席の増築部分は、既存部分と構造的に分離するために、屋内にも関わらず専用の47本の鋼管杭を新設する必要があった(写真7)。そのため、既存のホールの内部に杭を設置するための重機を搬入し、それらを施工した。その結果、既存躯体に応力を与えることなく屋内空間に新たに構造体の設置が可能となり、ダイナミックな空間を造り出すことができた。また、現地で躯体位

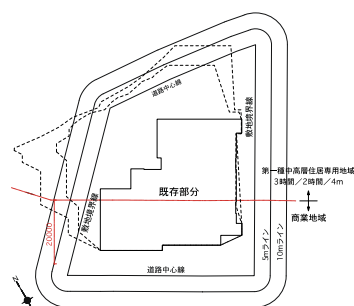


図6 既存の日影図

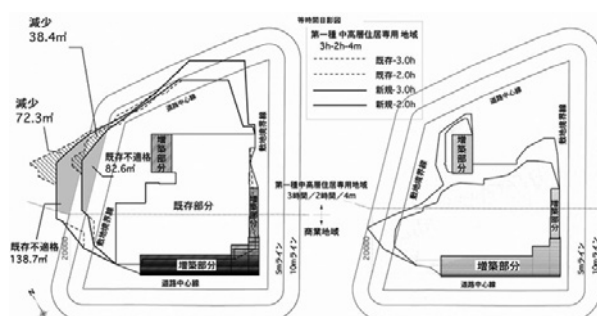


図7 増築後の日影図(左)と増築部分のみの日影図(右)

表3 増築に関する構造指針

増築解釈	増築部分	構造方針	既存部との関係
外部増築	メイン階段	ローラー接合(最大時の水平荷重は既存に負担) ・既存建物重量が各階で増加しない ・鉛直荷重を伝えない ・水平荷重も通常時は既存部には伝えない	既存延床1/2以下 EXPJで分離
	バリアフリー動線		
	菜屋・倉庫	自立構造	
	メイン客席		
内部増築	バルコニー客席	既存部分に関して耐震診断基準Is値(耐震指標) 0.75以上確保のための補強を行い構造評定取得	50㎡以下 既存部分と一体化



写真6 ローラー支持(滑り支承)(左)



写真7 メイン客席の自立する杭(右)

置の調査を行い、地中梁の位置を確認したことなど、施工計画を十分に検討していたため、工程を予定どおりに進めることができた。

Ⅲ－４．一体増築による対応

バルコニー客席の内部増築部分についても、他の増築部分と同様にエキスパンション・ジョイントで分離する方法を検討した。しかし、全て既存躯体から切り離すと独自の柱や吊材が必要となり、客席数の確保や舞台の鑑賞視界の確保などに悪影響を及ぼしてしまうため、50㎡

以下かつ既存建物の延床面積の1/20以下の増築とし、既存躯体と一体化させて柱や吊材をなくし、340mm×250mmのH形鋼の片持ち部材で出幅3mの床を支える手法を選択した。接合部分は、まず躯体にコアを抜き、ボルトを貫通させ、片持ち部材を900mm×500mmのベースプレートにより支持している。一体増築を行うことにより、既存のホールにはなかった立体的なホール空間を造り出すことができたが、部材断面が大きくなるため、天井高さ、平面計画上の支障、工事費用などを構造的な検討とあわせて、計画を進める必要がある。

また、増築したバルコニー客席の形状では東京都安全条例の「2以上の出入口」、かつ「通路の規定」を満足できなかったため、避難安全上有効な通路幅を確保することや投光室を避難ルートとして通過させること、また避難誘導の設置等により東京都安全条例の認定を受けた。

IV. 耐震補強計画の概要

IV-1. 既存部分の補強方針

改修計画の立案にあたり、既存躯体の構造調査を行い、構造に関する検討を行った。国土交通省では建物の構造耐震指標であるIs値の基準を0.6以上と定めているが、清瀬市は公共施設における目標を基準の1.25倍である0.75と定め、Kセンターでは耐震改修評定を取得した。補強前後の二次診断によるIs指標の変化を図8に示す。

同時に、耐震診断に加えて、建物の総重量および各層の重量を既存の建物以下とすること、各部位の許容応力度設計を行うことで建物の危険性が既存建物よりも増大しないこと、の2点を確認している。

IV-2. 既存部分の補強方法

Kセンターの平面形状は、耐震壁付きラーメン架構で、4方向を壁で囲まれた内部に3層の吹抜けを有する大ホールと、ホールの大空間を構成する架構の1つの隅角部の隣り合う2辺に、諸室部分が耐震壁付きラーメン構造で取り付く複雑な形状であった。そのため、単一の補強手法ではなく、複数の補強手法を用いて強度型の計画を行った。具体的な補強としては、鉄筋コンクリートによる湿式補強として耐力壁のRC後打ち壁補強を2カ所、そで壁の後打ち壁補強を2ヶ所、耐震壁の増し打ち補強を15カ所、開口閉塞補強を32カ所行った。また鉄骨や鉄板などによる乾式補強として鉄骨補強ブレースを5カ所、構造スリットの設置を12カ所、鉄骨梁による補強を4カ所行った（表4、表5^{注3)}。さらに、地下階においてピロティ形式となる柱の極短柱の解消のために鉄板

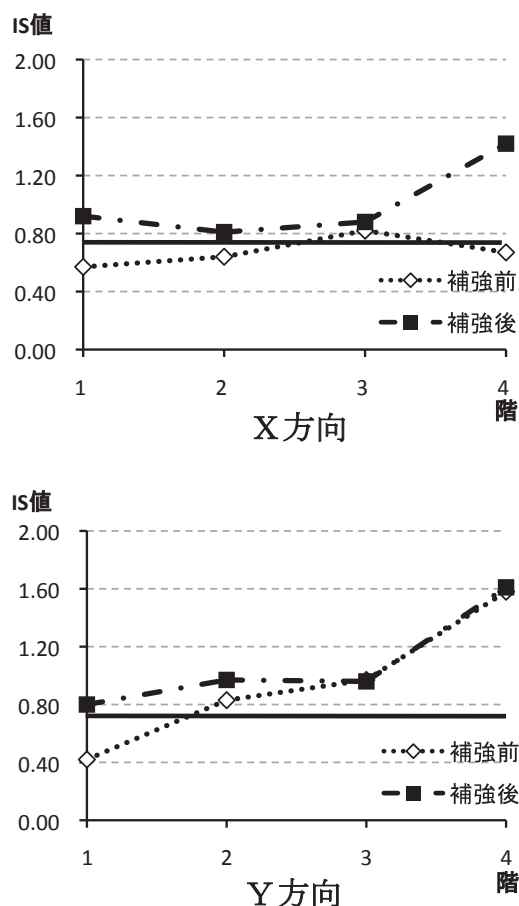


図8 補強前後のIs値(X・Y方向)の変化

表4 既存部分の補強手法と階毎の箇所数

階	方向	B 1		1		2		3		4		合計
		X方向	Y方向	X方向	Y方向	X方向	Y方向	X方向	Y方向	X方向	Y方向	
湿式補強 (RC)	後打ち壁（耐力壁）			1			1					2
	後打ち壁（そで壁）			1			1					2
	増し打ち壁			5	2	2	2	2	2			15
	開口閉塞壁			4	3	5	3	5	1	3		24
	開口閉塞壁（増分耐力壁）			2	1	1		1	1	2		8
乾式補強 (S)	鉄骨ブレース			2		3						5
	スリット設置箇所			2	2	7	1					12
	補強梁						2		2			4
	補強柱（鉄板巻き補強）		3									3
合計		3	3	17	8	18	10	8	6	5	0	72

表5 既存部分の軽量化の手法と階毎の箇所数

階	方向	B 1		1		2		3		4		合計
		X方向	Y方向	X方向	Y方向	X方向	Y方向	X方向	Y方向	X方向	Y方向	
新規開口壁			2	4	5	1	6	5	2	2		27
	新規開口壁（減分耐力壁）			3	1		2	1	1			8
壁撤去			4	5	6	5		4		3		27
	壁撤去（減分耐力壁）		2	2	1	3		2		1		11
合計		0	0	8	14	13	9	8	12	3	6	73

巻き補強を3カ所行った。この地下階の場所が機械室であったため、維持管理しやすい設備配置の自由度を確保した（写真8）。

建物の接道側に配置する鉄骨補強ブレースは、座屈防止二重鋼管ブレースを採用することで、エントランスの吹き抜けの空間に対して採光を確保することができた。

この場合、中間層部分にも二重鋼管による梁材を配置することで、上下階のせん断力の伝達が可能となった（写真9）。使い勝手や機能上の配慮を目的とする適切な補強計画として、建物全体の補強計画と個々の箇所での要求条件を同時に解決する必要がある。さらに、見える部分にのみ意匠性が考慮された鋼管ブレースを採用することで見えない部分で使用した安価な補強手法を使い分けることには、工事費用の低減の目的もある。

また、建物の総重量および各層の重量を既存の建物以下とするため、塔屋部分の減築や、一部、鉄筋コンクリート造であった映写室を解体し、鉄骨造で再構築するなどして、一体増築を含め、建物の重量を増加させずに、減少したことを確認した。

Ⅳ-3. 既存部分における不確定要素としての補修箇所

本計画では、全ての仕上げと設備を解体し、構造体をスケルトンの状態にして躯体の劣化状況を確認した。既存コンクリートのひび割れに対し、エポキシ樹脂の低圧注入による補修や、ジャンカの補修等について、あらかじめ躯体の部位毎に補修計画を立案し、解体時に計画案に基づき補修を行い、劣化の進行防止についても対策を講じた。

補修計画について、外壁部分は解体工事前に目視による事前調査を行うことが可能であるが、その他の補修箇所は工事着手後に仕上げを解体しなければ、その部位と劣化の度合いを把握することができない。工事費用を算出する際には、予備費として補修費用を事前に見込む必要があるが、公共事業の場合、積算書が事前でない事業に対して予算が請求できないため、仕上げ解体に再調査を行い、補修が必要な数量を把握し、予算請求をすることとなった。このような工事着手後に発生が想定される予算に対する枠組みを整備する必要がある。

V. まとめ

本研究では、公共文化ホールの大規模改修設計のケーススタディとして、Kセンターの増築による法的な対応と機能改善計画、及び、耐震補強計画との3点について設計手法とその相互関係を中心にまとめた。

耐震補強計画においては、文化ホールの構造的な特徴をふまえ、単一の補強方法ではなく、数種類の補強手法を複合的に用いて、大規模改修計画における動線や機能を損なわない計画とすることが可能となった。また、Kセンターでは、法的制約や周辺環境を考慮しつつ、複数箇所の増築を用いることで、ホールにおける鑑賞環境の



写真8 柱の鉄板巻き補強

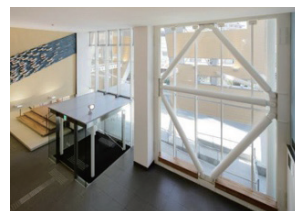


写真9 座屈防止二重鋼管ブレース補強

改善、および、動線の整備というトレードオフの関係にある要望の双方を損なうことなく実行することができた。これを実行可能とした増築時の日影対策、増築部分の基礎施工法、エキスパンション・ジョイントの構造的工夫といった設計手法は、他の公共文化ホールにも応用可能で有用であると考えられる。

現在では、法改正により、エキスパンションジョイントによって構造を分離することで、既存面積の2分の1以上の増築が可能となっている。また、Kセンターでは、敷地に外増築を行う余裕があったが、敷地に制約の多い都市部においては、これらの手法を用いて、機能改善を行うことができないなどの課題が残っている。随時改正される、建築再生に関する複雑な法規制を把握し、建物に応じた手法を用いるなどの対応が必要である。

なお、本計画は、平成21年度の国土交通省、住宅・建築物耐震改修モデル事業の助成を受けたものである。

注

- 1) 令和3年度版 国土交通白書による。
- 2) 国内の公共インフラを従来通り維持管理・更新した場合の費用の推計：「平成23年度 国土交通白書」
- 3) 500mm×500mm（等価面積）以下の開口（複数開口を除く）については、この表では計上しない。増分耐力壁とは、補強により耐力壁が増加した数量を示す。減分耐力壁とは、開口等により耐力壁が減少した数量を示す。

参考文献

- 1) 再生の難題「既存不適格」法対応の工夫でクリア、住宅新報、2010.10.26
- 2) 松浦隆幸：増築の選択肢を広げる 外と内の両方向に増築した「清瀬けやきホール」、日経アーキテクチュア 第944号、pp.68-71, 2011.1
- 3) 青木茂、門脇耕三、長井美咲：さまざまな「再生」。その意義と託した思い、アルキテクトン vol.05, 2011.2
- 4) 青木茂：50㎡以下・1/2以下の増築で構造規定へ挑戦、新建築 第86巻4号、pp.120-128, 2011.4.1
- 5) 再生し長寿命化を図るリファイニング建築、EAST TIMES 秋号、pp.10-11, 2011.10
- 6) 青木茂：清瀬けやきホール、JA 84 WINTER 2012 季刊、pp.58-59, 2011.12

- 7) 青木茂：リファイニング建築における法的問題解決、建築士第161号、No.714, 2012.3.1
- 8) 青木茂：外観、内装とも一新。まちのDNAを継承する新しい顔として再生、公共建築の未来、pp.30-41, 2013.7.19
- 9) 青木茂：外装、内装とも一新、街の新しい顔をつくる、長寿命建築へ、pp.8-9, pp.46~67, 2012.5.1
- 10) 奥村誠一、耐震改修をともなう建築再生の設計プロセスの体系化に関する研究、博士論文、首都大学東京都市環境博第175号、2015年

インド中世主義

—アーナンダ・ケンティッシュ・クーマラスワミと芸術思想—

Indian Medievalism

—Ananda Kentish Coomaraswamy's Vision of Arts and Crafts—

シェイク愛仁香

SHAIKH Anika

要旨

アーナンダ・ケンティッシュ・クーマラスワミ（1877～1947）は、20世紀前半のインド芸術において重要な人物である。セイロン人の父とイギリス人の母を持ち、幼児期に父親を亡くすと、母親によってイギリスで育てられた。彼は、自身のバックグラウンドより、インドの芸術に関心を持ち、特にその手工芸の美に魅せられると、その数多くの著書を生み出した。当時イギリスの植民地であったインドの伝統芸術や職人の技術は、ヨーロッパの商業主義や機械の台頭により、喪失の危機にある。アーツアンドクラフツ運動の思想を持つ彼は、産業革命によって手仕事が脅かされることを嘆き、ヨーロッパ中世主義の立場からインドの芸術を眼差した。ヒンドゥー教や仏教芸術の繁栄した時代を理想とし、それはムガル芸術に対する批判的視点へと繋がる。彼の唱えた理念は、まさに東西の思想の融合を図るものであった。本論文では、クーマラスワミの思想に影響を与えた、初期のイギリス側の物語に焦点を置き、彼がいかにインド芸術に新たな価値を見出したのか考察していく。

●キーワード：インド（India）／中世主義（medievalism）／手工芸（handcraft）

1 Introduction

Ananda Kentish Coomaraswamy (1877~1947) is an important figure to discuss in the field of art in India in the early 20th century. He had a British mother and a Ceylonese father and was born in Colombo, Ceylon. After his father passed away while he was young, he was raised in Britain by his mother. He majored in geography at the University of London and earned a doctoral degree. However, when he went to Ceylon for a geography survey after graduation from 1902 to 1906, he was lost for his words when he witnessed the harsh situation of the colony. He afterwards positively participated in the activities to improve Ceylonese conditions. Especially, his interest turned toward the arts and crafts in India and Ceylon. In that time, the traditional craftsman and vernacular art were in danger of being lost by the introduction of the European commercialism and machines. He mourned over how industrialism ruined the ideal presence of art by hand and dedicated to a lot of books on art philosophy of India through his life. For his career as an art scholar, he took part in the United

Provinces Exhibition held in Allahabad from 1910 to 1911. Plus, in 1917, he accepted the offer from a scholar at the Harvard University and became a curator of Indian art at the Museum of Fine Arts, Boston.

Minoru Kasai categorized the life of Coomaraswamy into three phases: ①before he moved to Boston when he was understanding the traditional art in India, ②after he moved to Boston taking in charge of Indian art division at Boston Museum and ③between 1934 and 1947 that he concentrated on philosophy and metaphysical of Indian art¹⁾. Most of the research on him have been conducted by focusing on art philosophy from his later works, and the earlier time in Britain is scarcely mentioned. Although even in Japan Coomaraswamy makes a subject, they often place him in the Oriental sphere and tend to deal with the connection with the folk-arts movement. However, to deepen his theory, the influence from John Ruskin, William Morris and their followers from the Arts and Crafts movement cannot be avoided as following their spirits he developed his art vision of India. Moreover, he

was actually close to Charles Robert Ashbee, a member of the movement. Through the relationship with him, his position to connect the East and the West from the aspect of arts and crafts was established. To examine this British side of story, the first period according to Kasai is going to be centered on in this paper.

The art vision of Coomaraswamy is a fusion of European theory and Indian philosophy. Just like following the tendency among the British activists those days of finding utopia in the Middle Ages, called medievalism, he also fancied for the past. His medievalism was special in that it was directed toward the Indian art and its craftsman. Based on the desirable conditions of medieval period in Europe, he sought for the ideal for India. He found that the religiousness of Hindu and Buddhism was building the foundation of the country and regarded the 7th and 8th century of India as a golden age. This notion led to the appreciation for Hindu and Buddhist art and critical comments on Mughal art; with this perspective, he lastly reached to 'an art for love's sake'. To understand his standpoint as a medievalist, it is necessary to see his early works when the influences from British medievalism were noticeable, as later he tended to be more philosophical developing the ideology about art in India and exploring for the meanings of the world.

The Arts and Crafts Movement: A Study of Its Sources, Ideals and Influences on Design Theory by Gilliam Naylor well described the flow of art and design theory among the art philosophers and the history of the Arts and Crafts movement. This helped to spot the position of Coomaraswamy who was in a transitional period in a field of art history. Moreover, to search for the relation with Ashbee and the life in Campden, I used *C.R. Ashbee: Architect, Designer & Romantic Socialist* by Alan Crawford, which gave detailed information of their story. Alice Chandler in her book *A Dream Order: The Mediaeval Ideal in Nineteenth-Century English Literature* fully explained the characteristics of medievalism in Britain especially in the 19th century. Her study of the past ideal seen from Ruskin and Morris was useful when I saw the medievalism in the works by Coomaraswamy. By comparing for the similarities in what she described and how he presented India, the influence of European

medievalism on Coomaraswamy would be disclosed, and at the same time, the Indian philosophy becomes evident in his theory.

Based on the literature above, I hope to explore for how with the British medievalism Coomaraswamy produced a new value in the arts and crafts in India, which I call 'Indian medievalism'. To achieve this, firstly I am going to discuss how his medievalism was established by looking into his thought of arts and crafts gained through Ruskin or Morris and the relation with Ashbee to straighten his vision for the past. Secondly, the main perspective of his Indian medievalism should be made clear by comparing for Europeans. At last, I research the Mughal criticism as an outcome of the Indian medievalism to pursue his ideal form of art. Through these chapters, the fusion of the European and Indian theory by him is going to be revealed.

2 Coomaraswamy and his Ideas of Art Developed in Britain

To Explore the thoughts of Coomaraswamy, it is inevitable to investigate the influence he came under in Britain. When his interest turned toward the Indian art, he was so in despair since it was about to disappear under the British rule. This was his turning point to become related to the theory of Ruskin, Morris and other following activists from the Arts and Crafts movement, from which he developed his idea of arts and crafts in India. He criticized the commercialism and industrialism the British brought, by which the vernacular handcrafts were being deteriorated in the same way as those in his homeland. He believed that it was not machines or profits, but the traditional craftsmen that needed to be put priority on for the protection. In this sense, it is reasonable to think of his idea by making a reference to the Arts and Crafts movement. Moreover, Ashbee, an architect, designer and socialist who is one of the most important activists of the Arts and Craft movement about the same age as Coomaraswamy is important to mention for he acted as an intermediary for the movement and Coomaraswamy, the West and the East. They shared the same vision and ideal in medieval time, which could be observed

from their life together in Campden.

In this chapter I am going to discuss the origin of the medieval vision of Coomaraswamy from the British side. To examine his approach to Indian art, it is essential to organize his thoughts on industrialism and commercialism in consequence of British intrusion to see the awareness of Ruskin, Morris and the Arts and Crafts movement. As a direct influence in his own time, Ashbee is going to be important and their life in Campden helps to deepen the beginning of Coomaraswamy as a thinker of Indian art.

2.1 The Decline of the Indian Arts and Crafts

Coomaraswamy is not outstanding in the aspect of the Arts and Crafts movement; however, looking through his ideas and friendly relations with Ashbee, he is not far apart from it. Rather, he could be considered as one of the followers of Ruskin and Morris. He surely absorbed the vision from them like Ashbee and made it into a new version by applying to the Indian art. From his background, it should be noted that Coomaraswamy especially mentioned the arts and crafts in Ceylon as he thought Sinhalese culture was a key to understand India. He explained its importance, saying “India without Ceylon is incomplete, for in many ways, Ceylon is a more perfect window through which to gaze on India’s past, than any that can be found in India herself”²⁾. It is because Ceylon still kept the condition he called ‘mediaeval’ even to his days, even though he was at the same time worried about losing it soon. The cause of degrading the quality of craftsmen in India was led by the rise of machines and its progress which became enhanced by commercialism. Coomaraswamy made his idea clear in his writings:

A less direct, but equally sure and certain, cause of the decline of the arts has been the growth of commercialism, —that system of production under which the work of European machines and machine-like men has in the East driven the village weaver from his loom, the craftsman from his tools, the ploughman from his songs, and has divorced art from

labour.³⁾

In the aspect of commercialism, the attitude of seeking for the profits from the products was accelerated by the introduction of machinery for they brought efficiency and simplification in a process of making. This view is the basis of the Arts and Craft movement in that the problem of design is placed in a frame of society, but in the time of Coomaraswamy, the destruction of art became more certain than the 19th century. In the case of India, it was about to meet the same fate as the West. Although relying on machines could lessen the work of craftsman and simplified their operations, as for Coomaraswamy, ‘life’ of the craftsman was indispensable while producing art, and they needed to take time and effort to pursue beauty in a daily level. As he insisted “cheap work, cheap men”⁴⁾, it was more important to turn not to the profits or easiness but to the craftsmen themselves.

Moreover, Coomaraswamy emphasizes machines cannot increase human happiness or human techniques, saying “It appears, therefore, that it is absolutely essential that mechanical production should in the future be, not as I am willing to believe that civilization is not much better than a failure; for it is not much good being more ingenious than our forefathers if we cannot be either happy or better”⁵⁾. He was critical about the dependence upon machinery which could easily lead to a decay of the skill of craftsman and quality of products, but also accepted the impossibility of eliminating machines in the modern society. This is related to the idea of Morris. He showed hatred toward inhumanity of machines but at the same time he accepted the fact. Their solutions were in common; humans should not be dominated or dependent on machines but operate them. Besides, how to abolish machines was not important for Coomaraswamy but how to regulate them had a point. He put more priority on humanity itself than any other things.

Those modern problems tended to arouse the feeling of nostalgia. Like Ruskin saw the Gothic architecture as magnificent and worshiped the medieval time, Coomaraswamy too found ideal from the past

when the craftsmen were trusting their own hands and the art was rooted in their daily lives. The relation with Ashbee built up his viewpoint in the frame of the Arts and Crafts movement stronger.

2.2 Medieval Vision Shared with Ashbee

Following the idea by Ruskin or Morris, Ashbee was seeking for the beauty in art by hand and considered that the Arts and Crafts movement showed a standard for job or life and a protection of the standard for the creators or creation. He spent his early days as a designer in the East End, an area connected to people from working class. Shocked at poverty and labour condition, there he founded the Guild and School of Handicraft at Toynbee Hall in 1888 to offer an education to be craftsmen for the working people and to give them job opportunities. The Essex House Press was also established in 1898 by taking over two presses belonged to Morris and hired a few craftsmen from the Kelmscott Press. Thinking of the indispensability of nature and handcraft, in 1902 Ashbee moved his Guild from London to Chipping Campden where became important for Coomaraswamy too.

It was Ruskin who advocated that human happiness was related to art and the talented needed to be firmly protected by providing places and furnishing with the tools, which could help the maintenance of the standards of quality and the rise of employment rate. What could make this environment all come true was the revival of the mediaeval guild. Ashbee came over this idea and put into practice. From the notion of Morris as a socialist who knew that the situation of commercial demand could never produce an ideal ground for the art, Ashbee also considered the art by relating to socialism. For his idea, the interaction of art and society could solve each problem and improve the harsh situation for handcraft. Against mass production and capitalism, he aimed at seeking for humanity and craftsmanship in the community. However, the Guild fell into a decline due to financial problem. It was the glorious time for Ashbee and his guild when Coomaraswamy began to stay.

Considering he also longed for the revival of guild like Ashbee and investigated its elements in India, the environment of Campden was what he was seeking for to expand his career as an art scholar of Indian Art.

Initially, Ashbee was involved with Fred Partridge who was a jeweller from Birmingham Municipal School of Art and came to Campden to teach for the guild in 1902. His sister, Ethel Mairet was a weaver and well acquainted with the handcrafts. She was a wife of Coomaraswamy and Partridge his brother-in-law. The presence of guild fascinated Coomaraswamy and he decided to move there with his wife, and the relationship with Ashbee came up to the surface. The Norman Chapel, a residence for Mr. and Mrs. Coomaraswamy was actually designed by Ashbee. This building showed the bond between them filled with their dreams for the past.

The Norman Chapel was ruined in 1903, but Ashbee restored it into a new housing. The nave and chancel arch were surviving, and some addition in the 14th or 15th century was made to make the building a residence. The nave became a music room in response to the request of Coomaraswamy and most of the ceiling was kept as it was. Above the nave was a library with a dais curtained with Morris textiles. To maintain the condition of the house as possible, he treated a sensitive improvement and rebuilt or buttressed the unstable walls. Although the first plan costed too high and was turned down by Coomaraswamy, the final plan was not that large-scale but still praiseworthy. According to Alan Crawford, the work was described as admiring: "... Ashbee's executed scheme for the Norman Chapel was a triumphant demonstration of the value of the Society's¹ approach when applied to buildings of some size and architectural character"⁶). The Norman Chapel was not merely a house but more meaningful, since it proved that the protection of the old buildings was successful and valuable one. Crawford continues:

It was gentle and civilized in a modern way:
you could sit on the terrace by some of its

1 SPAB, short for The Society for the Protection of the Ancient Buildings

oldest stones and be sheltered from the wind. Yet much of its magic lay in its great age; it had on it what Ruskin called 'the golden stain of time', and the sense of tradition, of a building adapting itself to changing uses and yet somehow staying the same. And perhaps what fascinated Ashbee most was the simple fact that long ago it had been a church and was one no longer, and so bore witness to the story of men's shifting beliefs. Like Chelsea, it stirred his historical imagination, as his curious novel Peckover showed.⁷⁾

As is evident, Ashbee intentionally left the old essence the chapel already had to realize a fusion of past and presence, mediaeval and modern. This is well related to his worship for the medieval time, and he was totally satisfied with how his work turned out. More importantly, the Norman Chapel proved that both Ashbee and Coomaraswamy shared the same preference in design since he was the most 'sympathetic' client to him⁸⁾. In 1907 the chapel completed and Coomaraswamy and his wife moved in. The house was soon furnished with the oriental ornaments. They participated in the circle of Ashbee, and a social life in Campden became flourishing. According to Crawford, "There had been magic of an architectural kind in the Norman Chapel when Ashbee has finished restoring it; the Coomaraswamys added another kind of magic of their own"⁹⁾. The Norman Chapel became a symbol for the friendship of Ashby and Coomaraswamy and for their dream of the Middle Ages.

As a neighbor and friend, Ashbee involved in the publication of Coomaraswamy. After he moved his residence to Campden, he started publishing his books on arts and crafts in India. He took over one of the presses Ashbee owned, and his work, *Mediaeval Sinhalese Art*, was printed in 1907. There, the Caslon type was applied which showed his enthusiasm for Morris and Coomaraswamy kindly mentioned in the book:

It is of interest to record, in connection with

the arts and crafts aspect of the questions just discussed, that this book has been printed by hand, upon the press used by William Morris for printing the Kelmscott Chaucer. The printings, carried on in the Norman Chapel at Broaden Campden, has occupied some fifteen months. I cannot help seeing in these very facts an illustration of the way in which the East and the West may together be united in an endeavor to restore that true Art of Living which has for so long been neglected by humanity.¹⁰⁾

The admiration for Morris and the dream for linking the East and the West through arts and crafts that Coomaraswamy put in the book was well written above. Ashbee was the one who made this possible. He was a crucial figure playing a part in connecting the vision of Coomaraswamy in India to the Arts and Crafts movement. When Ashbee took charge of the foreword for his work, *The Indian Craftsman*, he asserted that "In the profoundly interesting address of the English artists in 1878, which bore the names of Morris, Burn-Jones, Millais, Edwin Arnold, Walter Crane and others, there is an appeal to the Government on behalf of Indian Arts and Crafts against the effects of English commercialism upon the production of Indian craftsmanship"¹¹⁾. By mentioning the stream of art movement with significant names, he put India as an extension of the sphere and supported what Coomaraswamy tried to do. Plus, he was sympathetic to the idea of Coomaraswamy and agreed with India and Ceylon he described to him as similar to the conditions seen in Medieval Europe. Apparently, both shared the same vision of the art and the taste for the past.

Though, in 1910 when their marriage failed, Ethel was only in Campden while Coomaraswamy remained in India. They gave up the Norman Chapel and removed the oriental furnishings in the house, and the building was ready for the next owner. In 1911, Ashbee and his wife moved in as he always wanted to make this building on his own. The relation between Coomaraswamy and Ashbee is hard to know afterwards. However his

experience and time with Ashbee in Campden would convince his medievalism and inspiration for the further career for Coomaraswamy.

Consequently, the thought of Coomaraswamy on the Indian arts and crafts by hand soon missed by the commercialism and machines was based on the idea of Ruskin, Morris and their followers. The European influence degraded the skill of Indian craftsmen and their production, which resulted in the nostalgia for the Middle Ages. Ashbee played a crucial role in the early days of Coomaraswamy as contemporary with him. Their life in Campden tells their relationship as a fellow for each other dreaming for the past and demonstrating their visions. The Norman Chapel indeed embodied their positions as medievalists. Ashbee was helping Coomaraswamy by connecting his position to the Arts and Crafts movement. Indian Medievalism is going to be expanded in the succeeding chapter.

3 Coomaraswamy and Indian Medievalism

“The lotus to Indian art and for the Indian mystic, is all that the rose was to Medieval Europe”¹²⁾. When Coomaraswamy illustrated the features of Indian art in his works, he was seeking for the medieval elements by comparing for the Europeans. The medievalism was a prevailing movement and at the same time a philosophy of romanticizing the past which was referred to the time of joy, kindness and happiness. The feeling of nostalgia to the past was generated by a change in society and could trace back to the Elizabethan period. For the 19th century, Industrialization in specific was which made people fantasize the medieval time and motivated them to bring about the new movement. Like Ruskin and Morris turned their nostalgia to the condition of art and craftsman in the Middle Ages, Coomaraswamy was one of those dreamers who considered the medieval era as a golden period and aimed at the revival of the ideal in art. The striking difference of Coomaraswamy among them is that he especially applied this medievalism to India and seeking for the right for arts and crafts.

In fact, India was often associated with the past by the British. They often explained the country as ‘timeless’ or ‘Eden’, and this idea came from their idealization

toward the past. India was a perfect field to seek for a fragment of utopia. Though, as for Coomaraswamy, India was not merely a past but simultaneously contained a hope for the future. As his thought has a close connection to his high evaluations of Hindu and Buddhist period, to understand his standpoint as a medievalist is quite in need. With the European perspective toward past, he established Indian medievalism by assimilating the Indian philosophy. His viewpoint can be divided into two standpoints: religiousness and social structure of India. While what other British scholars saw in India was lingering Mughal memories, Coomaraswamy investigated into a deeper history of India, a country with various religions and thoughts. Plus, his idea of caste was maintained by replacing with the guild in the respect of social structure. I hope to discuss here how India had the desirable conditions that was enough to be called ‘medieval’ by linking with the European theory and how Coomaraswamy absorbed the Indian elements. With these features the fusion of Western and Eastern ideal could be observed.

3.1 Indian Art as Medieval Ideal

There was no wonder that Coomaraswamy saw beauty in the past, considering how he worshiped Morris and spent time with Ashbee in Britain. Like those medievalists feared the industrialism, free trade or machines degraded human nature, which was closely connected to art, Coomaraswamy was also afraid of India losing the medieval essence by the intrusion of the European influence and innovation. As noted in the former chapter, he was critical against commercialism and machines as the craftsmen were losing their skill for creating art. Inspired by the theory of the Arts and Crafts movement, he gave a new perspective in the field of Indian art. There were already a lot of appreciations for oriental art made; however, most importantly, unlike others he did not miss the detailed description of Indian religion and philosophy that framed the Indian society and art condition. Coomaraswamy saw that India was a nation where the art could make its best just like medieval Europe.

To begin with, it should be clarified that the

medievalism of Coomaraswamy in India is not toward the India of his time but the actual golden age for its art: "Not only for Indians, however; for this Indian art of the 7th or 8th century is not merely an Indian dream, but also a dream of humanity—humanity that sooner or later will acknowledge in the same words the significance of all great art"¹³⁾. It was the time Hinduism entered the Buddhist field with its culture sometimes fusing and sometimes replacing. These two deities are what Coomaraswamy believed to make the best for art. This is because the Mughal period is referred to modernity and the medievalism is supposed to be related to primitivity. This notion is going to be important when his critical position against Mughal period should be argued in the next chapter.

According to Alice Chandler, the imagination against the Middle Ages has its own feature by each century. Throughout every period, the past became appealing among people when the rapid transformation took place in politics and religion. When its change was becoming faster from the 18th century, their desire to rewind the time to the past became bigger than ever. This inclination lasted to the succeeding century and even to the day of Coomaraswamy. In her words what shaped medievalism in the 18th and 19th century is described as follows:

One is its naturalism—its identification with nature and the past and thus with simpler and truer modes of feeling and expression and nobler and more heroic codes of action. The other is its feudalism—its harmonious and stable structure which reconciled freedom and order by giving each man an allotted place in society and an allotted leader to follow. The bridge between these two aspects of medievalism is chivalry, which made the spontaneous generosity of the natural man the guiding principle of man in society and which compensated for human frailty by having the strong protect the weak.¹⁴⁾

From the quote above, seeking for naturalism and

feudalism which are connected by chivalry is the feature of the medievalism. All those elements are relevant to each other and any of which cannot be missed. For Coomaraswamy, India contained those conditions and was sufficient to compare with the European past under the Hindu and Buddhist art theory. In the respect of being natural, he persistently argued that fine art needed a great humanity. Due to Industrial Revolution, people were exploited to work in factories and lost their connection with others. The craftsmen in modern time were losing the natural order but taken over by the progress of machines which caused the unnatural work and ugly art. Ruskin also insisted of the necessity of naturalism as it could embrace the perfect imperfection created by man. Although Coomaraswamy didn't mention the definition of perfect art, he pointed out that the beauty of art cannot be separated from the daily life. To attain great humanity, the craftsman needed to seek for at the expense of life. The way people used to live was for him ideally natural without being dependent on machines and doing their works by themselves.

Against the lonely wage in the factory, Coomaraswamy turned his eyes on the feudalism too as an ideal system like other mediaevalists. By giving lands and lives, even a small society played an important role in offering a sense of belongingness and closeness. The king's craftsman could show their respect to the lands they lent and passed on from generation to generation. There were no landless craftsmen by feudalism, which he found appealing. Although feudality was not Morris was up for, Coomaraswamy admitted it was a crucial factor to the past of India. Feudalism led to avoid any free-trade and competition between the craftsmen, which was required for creating true beauty. Even he said, "Their greatest possible ambition was that I should buy them some small piece of land and reward them with it, as did the kings of old"¹⁵⁾. This effect of feudal system on Indian art could also be explained same as in caste in a sense of social structure, which would be explained later in this chapter.

Furthermore, what made the Medieval Europe brilliant was a deep connection with the church and

people's faith, which could contribute to the chivalry. Chandler said "The medieval Catholic church was praised for performing a wealth to give alms and succor to the poor"¹⁶. The religious aspect gave a communal and close relationship among people, and their attitude of giving made the society better. Every modern factor including industrialism or urbanism gave a striking dichotomy: the poor and the rich. Without a religious community to help each other, the society would become far from all the naturalism or humanism. In this respect, the presence of faith in the Gods in India could easily be explained and the country could be called a perfect ground with various religions: Hindu, Buddhism, Islam and Sikh. Coomaraswamy always discussed his art philosophy in India by making a reference to the religious and spiritual field.

Religiousness in specific is essential for the medieval vision of Coomaraswamy. By tracing the Indian philosophy, he accepted the religious characteristic of Hindu art and worked on describing the Hindu Gods and searching for a reason of beauty. According to the Indian philosophical conception, the art is not created by the artists themselves but they receive the skill of Visvakarma and be concealed by him¹⁷. That is, the art belongs to the God and nature. By being connected to the God, the mentality of craftsmen gives inspiration in a spiritual level, so that the details caught by eyes are not considered to be reality of things. To make this happen is a growth of inwardness which is often described by a reference to yoga. As Coomaraswamy thought this kind of Indian faith was indispensable to art, he even gave a negative view against irreligion. The less religious the art becomes; the more individuality came up on the surface. Its purpose was to develop their mind enough to attain inspiration from the God. In this regard, the meaning of art in Europe shows difference in that the individuality has of value. Ruskin advanced architecture or craft expressed a personality of craftsman and reflected the humanity, which became the central pillar of the theory of the Arts and Crafts movement. On the contrary, in India, art is not for individual but made in faith in a daily basis. This is the reason Coomaraswamy has been often discussed in the frame of Orient and

connected with the folk-arts movement by Soetsu Yanagi in Japan.

Coomaraswamy was praising this anonymity in Hindu and Buddhist art, a crucial element in beauty in the mediaeval society of India, since the art meant to be altruistic without any selfishness of humans involved. The communal art also had the effect of removing subjectivity. Most famous and magnificent works of India from the old time were hard to trace the name of the artists as they only belonged to some group and were scarcely known. There was no need to add individuality for arts and crafts, so that they could be beautiful in a natural way like the beauty of trees or flowers. For the explanation of the Indian sculptures of Buddha, Coomaraswamy noted that facial expression was not made enough on purpose to remove the personality; "These have sometimes been described as expressionless because they do not reflect the individual peculiarities which make up expression as we commonly conceive it"¹⁸. It is body that gives the expression for the Indian sculpture. Avoiding the self-centered perspective and accepting the indifference or shift toward any human emotions could bring a way to be god-like, objectivity.

The Indian medievalism by Coomaraswamy made some differences from the European original, for the fundamental faith of the latter was Christianity in the first place. This distinction would make one aim of craftsman for art from another.

3.2 Caste as a Role of Guild

The features in past including naturalism, feudalism and chivalry all composed of the medieval guild. Coomaraswamy often used the word 'guild' to mean the craftsmanship in India in his works. As a position of a pivotal importance to bring the mediaeval Europe and India together, the replacement for the guild with another vernacular factor was required. As a matter of fact, to solve this demand, he presented the caste system in India. Caste formed the social structure of the country for how it was, and its topic was perhaps most difficult and at the same time primary subject to mention for it was deeply rooted in the culture. To him, this hierarchy

in the nation was a desirable form regarding the perspective of art and craftsman. This is one of the most remarkable statements of the medievalism in India he advocated. The essential points the caste structure brought to the consideration of the craftsmanship as the guild, according to Coomaraswamy, could be made clear in the aspect of community and heredity and payment.

As stated by Coomaraswamy, the caste and the guild shared some same features and meanings. It was a communal element caste possessed that he appreciated about. Just like the guild was a community, craftsman in India took the same shape by class division. Everyone is dependent on each other; therefore, a fixed group made it easier for the craftsman to build a bond of fellowship. He noted that caste 'represents a legal recognition of the nature division of society into the functional groups¹⁹⁾'. That is, caste provides the naturalism and the sense of belonging, which both shows humanity and are significant features for the medievalism. Although the feudalism was adduced to prove the function of the medieval time, it needs to be clarified that the caste was laying its foundation. He expressed caste as '*noblesse oblige*' and explained as follows:

Caste system is a system of *noblesse oblige*; each man is born to his ordained work, through which alone he can spiritually progress. This religious conception of a man's trade or profession as the heaven-ordained work of his caste, may best, be likened to the honour of medieval knighthood. For the priest, learning; for the king, excellence in kingcraft; for the craftsman, skill and faithfulness; for the servant, service.²⁰⁾

Since culture is closely connected to human life, he thought this system of being born to be skillful at a certain occupation in caste led the craftsman to be better in his field. To make this ordainment structure work was a heredity of job in the family of same caste. Holding a same position as a craftsman by inheritance in India could easily recall the apprentice system of guild. There the skill and tradition of craftsman were

passing on to the next generation mostly from father to son. In the mediaeval guild, on the contrary, it was descended from masters to man. The relationship between masters and man could be seen from what Ruskin, Morris and Ashbee were asking for to produce art too. About the importance of heredity in art is discussed by Coomaraswamy:

Thus during many centuries the artists of one district apply themselves to the interpretation of the same ideas; the origin of those ideas is more remote than any particular example. The great types are the fruit of communal rather than any particular example. The great types are the fruit of communal rather than individual thought. This communal thought, however, is not only popular thought, but that of the greatest and widest minds of successive generations seeking to impress their vision on a whole race.²¹⁾

The inherited skill was built up by all the experiences the tutor gained through his life. By taking over generation to generation either from father or master, the art could reflect humanity and its magnificence would be surpassed in a spiritual level. Moreover, as a community the guild did not allow any unqualified artist to participate so that the quality of material and design could be maintained²²⁾. Under such condition, heredity could make its best to pass on greatness to descendants. As a difference of Eastern 'disciple' from Western education of professor, Coomaraswamy emphasized: "...for in the East there is traditionally a peculiar relation of devotion between master and pupil, and it is thought that the master's secret, his real inward method, so to say, is best learnt by the pupil in devoted personal service..."²³⁾. Like he kept saying, art and humanity are inseparable and to teach art needs to contain the inwardness and spirituality the master acquired in his lifetime. It was imagination not scholasticism he asked for art. The merit of this hereditary system was that the position, purpose and value of the craftsman were all assured.

Besides, Coomaraswamy pointed out the way of

payment as an important fragment to maintain the communal and hereditary frame in caste. He praised the community of the Indian craftsman in that instead of money it was barter or personal service that were required for in return. Using the example of the craftsmen he worked in Kandy for weeks together, he explained that they did not ask for much money or even think of saving money but they knew they could receive some special gift after completing their works²⁴⁾. It is related to chivalry, a charitable mind of religion. Same as feudalism, the guild was for eliminating competition and introducing money could simply cause a breakdown of synthesis. Interdependence is lacked in industrial and commercial world and like emphasized in Indian philosophy people need to live by depending on themselves. By applying money transaction and generating competition, Coomaraswamy was concerned with the exploitation of the craftsman which could cause the degradation of the skill and beauty. Removing anxiety of them was one of the main purposes of the guild to make beautiful pieces, and the craftsmen were not consumed.

In conclusion for this chapter, the condition of Indian art was enough to be considered in the sphere of medievalism in Europe for Coomaraswamy. He indicated that the humanity was cherished in India which led to naturalism, and feudalism assured the craftsmen of their jobs. In addition, chivalry associated with a faith in religion could make a significant basis of naturalism and feudalism. Religiousness of India was, however, different from Europe as it required subjectivity while the latter emphasized individuality. To develop those factors, for India, the caste system played a crucial role which reminded of the medieval guild, and he explained the similarities between them. The communal, hereditary and payment structure the caste built all composed of the features of the guild. The caste in India could easily make a desirable environment to reconstruct a medieval guild and to support his idea as a mediaevalist. With those medieval perspectives, Coomaraswamy saw the Indian art and its craftsman valuable especially at the time of Buddhism and Hinduism when the vernacular arts and crafts

were produced at their best, which became a criticism in the succeeding period: Mughal.

4 Mughal Criticism

Coomaraswamy considered the Middle period from the 7th to 8th century showed the flourishing time of India with the existence of great art. The European medieval essences in the Indian past discussed in the previous chapter was the very utopia he found. What he taught about the ideal in craftsman was not only for India, but it was 'a dream of humanity'²⁵⁾. The presence of human life in Indian art composed of the philosophy of his later works and his words turned to not only for India or Britain but to the world. His passion for the medieval time is closely related to the religious environment in India: Buddhism and Hinduism. This resulted in his critical comments on Mughal period and its art, and this gave a fresh point of view to Britain for the Mughal reign was usually their preference. For comprehending the point of Coomaraswamy, it needs to cover how his medievalism ended to categorize the arts and crafts of India in a chronological order. In this chapter, I shall see how he made a contrast between his ideal and Mughal period to strengthen his argument on the golden time of India.

4.1 Critical Attitude toward Mughal Art

In the 19th century, the British usually tended to think kindly of the Mughal art over the Hindu art or Buddhist art, as Mughal taste was more fitted to Europeans. Even though Morris was attracted to the art of east and actually absorbed its elements into his design, it was always an Islamic color like the designs of Persian carpets he chose. Moreover, after the Indian Munity broke out in 1857, they were inclined to start looking into domestic art and the fusion of the vernacular and European became popular; for example, Indo-Saracenic style, an architectural form, was invented by mixing western and eastern elements. There, it was Mughal architecture they adopted. The Hindu elements were often despised, as its art was certainly different taste from European art and would have been difficult to understand the beauty. Ruskin too

was interested in the situation in India but could not see the real meaning of India. The harsh statement on Hindu art by Ruskin makes this European standpoint clearer than ever:

It is quite true that the art of India is delicate and refined. But it has one curious character distinguishing it from all other art of equal merit in design— It never represents a natural of fact. It either forms its compositions out of meaningless fragments of colour and flowings of line; or, if it represents any living creature, it represents that creature under some distorted and monstrous form. To all the facts and forms of nature it willfully oppose itself; it will not draw a man, but an eight-armed monster; it will not draw a flower, but only a spiral or a zigzag.²⁶⁾

Undoubtedly, the essence of Hindu art did not fascinate Ruskin and he even called the man, which is considered to mean the God, 'eight-armed monster'. This is because Ruskin or Morris did not visit India, and their observation was only limited to prejudice. In contrast to the strong view on Hindu art, Coomaraswamy found it beautiful and for him it was 'a natural of fact' which provided the answer for arts and desired humanity for the world. He succeeded the idea of how handcrafts should be from the 19th century; on the other hand, his attitude toward Indian art was fresh and new compared to the other pioneers in the field of Indian art in Britain. The medievalism and art philosophy of India he advocated were based on the Hindu and Buddhist elements. As against Mughal followers, his notion led to the criticism on the Mughal period and the thought of Islamic art as an undesirable form in the society. Mughal time contained modernity and was less religious than the India used to be and the presence of patron deteriorated the quality of craftsmen and their works.

Coomaraswamy despised the Mughal period for the mess Islamic culture brought to India. His negativity toward the Mughal Art is clear in his work, *The Arts*

& *Crafts of India & Ceylon*, which was divided into two parts: the former the Hindu and Buddhist art, the latter the Mussulman art. The latter part apparently occupied not much than the former, as he knew the time of Hindu and Buddhist was his sphere. In *Indo Shisoushi (The Indian Philosophy)* by Sengaku Maeda, Mughal was described as the period of destruction²⁷⁾. The intrusion of Islam itself could trace back to the 8th century; however, there was no specific change brought to the nation. It was after 11th century that the Islam started pillage, incendiary fire and demolition. When the Mughal reign was established at Delhi in 1206, along with the Islamic faith, some new heterogeneous thought and culture intruded in the traditional Indian culture. A big change in the country could be observed then.

The condition of the craftsman in the Mughal period was different from the ideal time of Indian art. Firstly, the faith that used to base the society became no longer required in art. Coomaraswamy reproached the irreligion: "Needless to say that by irreligion I do not refer to the decline of one or another particular form of dogmatic belief, but to the prevalence of that superficial view of life which concentrates the attention solely upon outward things, and not at all upon things of the imagination, real things"²⁸⁾. He thought art needed to be deeply connected to the belief to make a spiritual growth, and irreligiousness deteriorated the arts and crafts. Indian art could be magnificent with faith and if it was not concerned with any respect for God, those kinds of art were not what he was seeking for. He described the situation of art in Mughal reign, saying "While the Persians after the 13th century, and the Mughals in India, were not troubled overmuch by orthodox scruples forbidding the representation of living things, it resulted from the old Islamic Puritanism that their art became entirely secular ever treated in Mughal art..."²⁹⁾. In this way, the Mughal society was not appealing for him. It was because of the feature of Islamic art; the Mussulman artists were not allowed to picture God in art unlike Buddhism or Hinduism. He often called its art as 'secular' lacking intimacy of naturalism but focusing on individuality.

In addition to the secularity, the presence of patron

made the Mughal art undesirable. While Hindu art was meant to be 'racial', Islamic art was more 'social'³⁰⁾. Coomaraswamy emphasized that the latter was not for the public or the king, but its brilliance depended entirely on court and individual patronage³¹⁾. In the theory of Hinduism, art belongs to nature and subjectivity of a community makes better art; therefore, the truth is that the growth in the Mughal art meant the dependence on the patron and excessive individuality, which could not give a spiritual growth of a craftsman like Hindu. For Coomaraswamy, nothing was more important than the meaning of art and the condition of craftsman. The Mughal structure changed the aims for them, and patronage and court obviously destroyed the foundation of the medieval-Europe-like society of India. In the preface of *The Arts & Crafts of India & Ceylon*, where he made a clear difference of Hindu or Buddhist art from Mughal, he emphasized the ideal of Hindu art as follows:

The Hindus have never believed in art for art's sake; their art, like that of mediaeval Europe, was an art for love's sake. They made no distinctions of sacred and profane. I am glad to think that they have never consciously sought for beauty; just as none of their social intuitions of life and death, rather than from the conscious wish to make beautiful pictures or songs. The absence of beauty from art, or happiness from life, is an unanswerable condemnation of any civilization in which they are lacking: yet neither beauty nor happiness is easily attainable if sought for as a primary end.³²⁾

As the aestheticism movement, considering art as separated from morality, utility or pleasure and pursuit for beauty as the only objective in life, became growing around the late 19th century, the motto was called 'art for art's sake'. For Coomaraswamy, the Mughal art also held the related aim. In fact, what he esteemed most for art was not merely seeking to create a beauty itself, but it should be made from the consciousness and inwardness gained through human life. From this, it is

clear that he did not only apply the medieval elements in Europe, on the other hand, he also understood the vernacular feature in art. Like other British medievalists, Coomaraswamy was always dreaming for the past in India when the art was prosperous in their best shape and certainly assimilating the British art theory; however, there was originality in his vision in that he put the Indianness and made a fusion of eastern and western art ideal.

Lastly, in this chapter, I saw how the nostalgia of Coomaraswamy for the Indian past gave a critical approach on the Mughal art. Mostly Islamic art was praised by the British side as a beauty and often fused with the European design; on the other hand, he was prominent and distinguished for that he preferred the Hindu and Buddhist art. It was because of the difference in purpose of producing art that made him think in that way. The craftsmen and their arts used to be linked with humanity in a spiritual sphere, but it changed in the Mughal period when art belonged to the patron and court. This shift made a huge difference in his ideal presence and meaning of art. It was 'art for love's sake' he found as a medievalist.

5 Conclusion

In this paper, the art vision of Coomaraswamy was questioned by focusing on his early days when the influence of Ruskin, Morris and the Arts and Crafts movement remained strongly in evidence. With his background, he showed his interest toward the arts and crafts in India and Ceylon. His critical position on European commercialism and machinery could see the spirit of Ruskin or Morris. Besides, what made his position clear in the field of the Arts and Crafts movement was the relationship with Ashbee. Even though the field was different in west or east, he warmly welcomed him into his fellows sharing the same perspective in the study of arts and crafts, which was symbolized by the Norman Chapel.

On the rebound of a change in society by the Industrialization Coomaraswamy also fancied for the Middle Ages. Like Ashbee established his guild, he looked for a lot of medieval fragments in Indian past.

According to Chandler's definition of the feature of medievalists, they were attracted to naturalism, feudalism and chivalry. With those elements, India had sufficient conditions to develop great humanity. Coomaraswamy asked the craftsman. Firstly, he developed his Indian medievalism by focusing on the religiousness. Faith as an essential part to support the medieval time when the church played an important role in chivalry could easily spot in India. Coomaraswamy considered Hinduism and Buddhism as the answer and the 7th and 8th century were the very medieval period of India. There, art belonged to nature and the God and to achieve the subjectivity, a craftsman should make a spiritual progress in daily life. This was the opposite to the idea by the Europeans who cherished individuality in art. Moreover, to make India the medieval ideal ground was the social structure, caste, which he explained by showing the similarities to the medieval guild. In the structure of caste, the craftsman could find their own community, and the traditional skill was passed on among the family like master and man in the guild, and there was no competition or money involved.

Considering those elements, Coomaraswamy came to think that India in Hindu and Buddhist time had so much in common with the medieval Europe in the aspect of arts and crafts in spite of some differences. This led to the Mughal criticism since it spoiled the ideal presence of arts and crafts of India by irreligion and patrons. It was the meaning of the craftsman that should be most treasured in art and the Mughal period changed its structure.

Throughout his idea, it is disclosed that Coomaraswamy had the European medieval ideal and dream for the revival of the guild; however, he at the same time understood the religious meaning and social structure of India. By applying religiousness and caste to the European medievalism, he explained the ideal shape of art. In short, his vision was not one-way; he invented a new value founded on the European medievalism with the Indian elements. By mixing the Western and Eastern thoughts he reached to the most ideal purpose of art, 'an art for love's sake'. This attempt laid its foundation for his further works on art

philosophy.

NOTES

- 1) Kasai p83.
- 2) Coomaraswamy, *Mediaeval Sinhalese Art*, p18.
- 3) Ibid, p6.
- 4) Ibid, p7.
- 5) Ibid.
- 6) Crawford, p265.
- 7) Ibid, p266~267.
- 8) Ibid, p264.
- 9) Ibid. 147.
- 10) Coomaraswamy, *Mediaeval Sinhalese Art*, pix.
- 11) Coomaraswamy, *The Indian Craftsman*, pvi.
- 12) Coomaraswamy, *Mediaeval Sinhalese Art*, p170.
- 13) Coomaraswamy, *The Arts & Crafts of India & Ceylon*, p59.
- 14) Chandler, 195.
- 15) Coomaraswamy, *Mediaeval Sinhalese Art*, p57.
- 16) Chandler, p6.
- 17) Coomaraswamy, *The Indian Craftsman*, p73.
- 18) Coomaraswamy, *The Arts & Crafts of India & Ceylon*, p19.
- 19) Ibid, p66.
- 20) Ibid, p67.
- 21) Coomaraswamy, *The Indian Craftsman*, p22.
- 22) Ibid, p97.
- 23) Ibid. p85~86.
- 24) Coomaraswamy, *Mediaeval Sinhalese Art*, p57.
- 25) Coomaraswamy, *Mediaeval Sinhalese Art*, p18.
- 26) The lecture by John Ruskin, *The Decorative Power of Conventional Art over Nations*, p11.
- 27) Maeda, p187.
- 28) Coomaraswamy, *Mediaeval Sinhalese Art*, pix.
- 29) Coomaraswamy, *The Indian Craftsman*, pvi.
- 30) Coomaraswamy, *The Arts & Crafts of India & Ceylon*, pvi.
- 31) Ibid, p228.
- 32) Coomaraswamy, *The Arts & Crafts of India & Ceylon*, pvii.

Reference

- Chandler, Alice. *A Dream of Order: the Mediaeval ideal in nineteenth-century English Literature*, Lincoln: University of Nebraska Press, 1970. Print.
- Coomaraswamy, Ananda K. *Christian and Oriental Philosophy of Art*, New York: Dover Publications, 1956. Print.
- Coomaraswamy, Ananda K. *Mediaeval Sinhalese Art*, New Delhi: Munshirm Manoharlal Pub Pvt Ltd, 2003. Print.
- Coomaraswamy, Ananda K. *Message of the East*, Vol.5, London: Forgotten Books, 2018. Print.
- Coomaraswamy, Ananda K. *The Arts & Crafts of India & Ceylon*: Alpha Editions, 2019. Print.
- Coomaraswamy, Ananda K. *The Dance of Siva: Fourteen Indian Essays*, New York: Sunwise Turn, 1924. Print.
- Coomaraswamy, Ananda K. *The Indian Craftsman*: Alpha Editions, 2020. Print.
- Coomaraswamy, Ananda K. *The Transformation of Nature in*

- Art*: Angelico Press, 2016. Print.
- Crawford, Alan. *C.R. Ashbee: Architect, Designer & Romantic Socialist*, New Haven: Yale University Press, 2005. Print.
- Inaga, Shigemi. "A・K・Coomaraswamy no Jiseki kara Asia wo Saikou Suru (Ge): Dhaka Art Summit DAS2018 ni Shoutai Sarete." *Aida* dai 240 gou, July 20, 2018: 26-35. Web. 16 August 2022 (<https://inagashigemi.jpn.org/uploads/pdf/aida241.pdf>)
- Inaga, Shigemi. "Honoo no Shiren: Han Shokuminchishugi Shisou no Oukan—A・K・Coomaraswamy to Yanagi Soetsu to no 'Aida' wo Tsunagumono." *Utsushi to Utsuroi: Bunka Denpa no Utsuwa to Shokuhen no Jissou*, Kachousha, 2019. Print.
- Kasai, Minoru. "A・K・Coomaraswamy no Touzai Shisou no Hikaku to Kiki Ishiki." *Hikaku Shisou Kenkyu* Tsugou 10, 1984: 81-89. Web. 16 August 2022. (https://www.jacp.org/wp-content/uploads/2016/04/1983_10_hikaku_%2011_kasai.pdf)
- Maeda, Sengaku, Kyosho Hayashima, Naomichi Takasaki, and Minoru Hara. *Indo Shisoushi*; Tokyo Daigaku Shuppankai, 1982. Print.
- Miwa, Kanetani. *Nuno ga Tsukuru Shakai Kankei—Indo Shibori Zomefu to Musurimu Shokunin no Minzokushi*; Shibunkaku Shuppan, 2017. Print.
- Naylor, Gilliam. *The Arts and Crafts Movement: A Study of Its Sources, Ideals and Influences on Design Theory*. Trans. Yasuo Kawabata and Yasuko Suga. Tokyo: Misuzu Shobo, 2013. Print.
- Ruskin, John. "The Decorative Power of Conventional Art over Nation." *The Two Paths*. Kensington Museum, January 1858.
- Suga, Yasuko. *Igirisu no Shakai to Dezain: Morisu to Modanizumu no Seijigaku*, Sairyusha, 2005. Print.

東京オリンピックにおけるトライアスロンミックスリレーのレース展開とリレーオーダー戦略について

Race Development and Relay Ordering Strategy for Triathlon Mixed Relay at Tokyo Olympic Games

森谷 直樹

MORIYA Naoki

要旨

男女計4名から構成されるトライアスロン・ミックスリレーは東京オリンピックでの新規採用を契機に、年々競技水準が向上している。そこでミックスリレーのレース展開・リレーオーダー戦略を明らかにし強化戦略の基礎データを得ることを目的として、ミックスリレーレース・個人レース結果、各種ランキングデータを用い、それらの分析・検討を行った。レース展開では、レースの進行とともにチーム間のタイム差が拡大していくなかで、全ての走者でRunパートにおいてTOPとのタイム差が有意に拡大したこと、3走では3パートともTOPとのタイム差が有意に拡大したことなどが明らかとなった。また、リレーオーダー戦略について、男子は4走、女子は1走にそれぞれ国際ランキングのより高い選手を配置する傾向が認められた。一方で、ルール変更に伴う新たなレース展開を追跡することや種目毎の特性に応じた強化戦略に繋がる知見を導き出すことなどが課題として残された。

●キーワード：トライアスロン (triathlon)／レース展開 (race development)／
オーダー戦略 (ordering strategy)

1. はじめに

トライアスロンは1974年にアメリカのカリフォルニア州サンディエゴで誕生した複合競技である¹⁾。それは1人の競技者が水泳(以下、Swim)、自転車(以下、Bike)、長距離走(以下、Run)を連続して行うもので、誕生以降世界中に急速に広まった。そうした拡大を受け、2000年のシドニーオリンピック以降、正式競技として採用されている。現在、トライアスロンの距離は様々なもの(表1)がある。その中で最も一般的なタイプはオリンピックでも採用されているSwim1.5km、Bike40km、Run10km、合計51.5kmの「スタンダード・ディスタンス(以下、SD)」と呼ばれるものであり、トップ選手は2時間以内で完走する。なお、現在日本国内での愛好者は30万人以上と言われている。

表1 トライアスロンの主なレースタイプ

	Swim	Bike	Run	Total
スプリント・ディスタンス	0.75	20	5	25.75
スタンダード・ディスタンス	1.5	40	10	51.5
アイアンマン・ディスタンス	3.9	180	42.195	226.1

こうしたトライアスロンの普及と発展のなかで、2021年に開催された東京オリンピック(以下、東京O.G.)では、新たな種目として「ミックスリレー(以下、MR)」が追加された。MRは1チーム男女2名ずつの選手がスーパースプリントと呼ばれる距離(およそSwim0.25~0.30km、Bike5~8km、Run1.5~2km²⁾)を女→男→女→男の順に4名がそれぞれ行い(Leg1、Leg2、Leg3、Leg4)、最終的な順位を競う種目である。競技時間が2時間近くに及ぶSDとは異なり、1名あたり20分程度のLegを4名で繋ぎ、合計1時間20分程で終了する。そのためSD以上に、1)レースが高速であること、2)頻繁に順位が入れ替わること、3)同じコースを何度も通過することなどにより、スペクテーター・スポーツ¹⁾としても人気を博している。

東京O.G.でのMR初開催に向けて、近年世界各国でその強化が急速に進んだ。トライアスロンの国際統括団体であるWorld Triathlon(以下、WT)が開催している世界MRチャンピオンシップでは表彰台に上がる国が毎年のように入れ替わり、年々その競技水準が上昇してい

る(表2)。そうした中においてMRのレース展開や各区間の特性、オーダー戦略などに関する研究が進んでいる。Quagliarottiら(2022)は、Leg1およびLeg2には短距離に特化した選手やドラフティング²⁾状況を得意とする選手を、Leg3とLeg4には正しいペース配分や非ドラフティング状況を得意とする選手を用いることが有効であると指摘している³⁾。また既報では2019年世界トライアスロン(WT)MRシリーズのレース展開とリレー順の分析から、1) Leg3での順位の維持・向上が上位入賞に有効であること、2) 順位形成におけるMRのみのメンバー配置が有効であることなどを明らかにしている⁴⁾。しかしながら、そうした研究は蓄積が十分ではないことに加え、MRの競技水準も年々進歩しているため、さらなる研究が必要と考えられる。

表2 世界MRチャンピオンシップ結果(上位3カ国および日本)

	開催国 / 開催都市	1位	2位	3位	日本
2020年	ドイツ ハンブルグ	FRA -	USA 00:08	GBR 00:34	不参加
2019年	ドイツ ハンブルグ	FRA -	GER 00:04	AUS 00:25	11位 02:48
2018年	ドイツ ハンブルグ	FRA -	AUS 00:43	USA 00:45	7位 01:26
2017年	ドイツ ハンブルグ	AUS -	USA 00:04	NED 00:09	11位 02:03
2016年	ドイツ ハンブルグ	USA -	AUS 00:29	GER 00:29	10位 02:29
2015年	ドイツ ハンブルグ	FRA -	AUS 00:09	GBR 00:19	14位 02:57
2014年	ドイツ ハンブルグ	GBR -	FRA 00:04	HUN 00:24	9位 02:05
2013年	ドイツ ハンブルグ	GER -	NZL 00:19	USA 00:24	10位 01:56
2012年	フィンランド ストックホルム	GBR -	FRA 00:10	RUS 00:43	14位 03:14

(上段：NOC、下段：1位とのタイム差mm:ss)

2. 研究目的および研究方法

2024年に開催されるパリオリンピック(以下、パリO.G.)まで2年を切った今日では、すでにそこに向けた世界各国の競争が繰り広げられているのが現状である。そこで本研究では1) 東京O.G.におけるMRのレース展開とオーダー戦略を明らかにすること、2) パリO.G.における強化戦略の基礎データを得ることを目的とした。

そのためにWTのHPにて公開されている各種レース結果および各種ランキングのうち、1) 東京O.G.のMRレース成績(開催日:2021年7月31日)、2) 東京O.G.の個人レース成績(開催日:男子2021年7月26日、女子7月27日)、3) オリンピック予選ランキング(2021年6月14日付、以下OQR)、4) WTランキング(2021年6月14日付、

以下WTR)を取得し、その関係を分析した。取得データ^{5~11)}の詳細は表3の通りである。

なお、各取得データはすべてWTのHPで公開されているため、インフォームドコンセントは不要であった。

表3 取得データ内訳

	取得データ	内訳
1)	東京O.G. MRレースリザルト	出場17チーム(うち完走15チーム)のNOC・スタートナンバー・総合タイム・順位、各Legの選手名・ラップタイム(Swim、T1、Bike、T2、Run)
2)	東京O.G. 個人レースリザルト	出場選手(男子51名・うち完走48名、女子54名・うち34名)の氏名・NOC・スタートナンバー・ラップタイム(Swim、T1、Bike、T2、Run)・総合タイム・総合記録
3)	OQR (Olympic Qualification Ranking)	ランキング記載選手(男子325名、女子299名)の氏名・YOB・NOC・トータルポイント・ランキング対象レースの獲得ポイントなど
4)	WR (World Triathlon Ranking)	ランキング記載選手(男子1,009名、女子870名)の氏名・YOB・NOC・トータルポイント・ランキング対象レースの獲得ポイントなど

※NOC: 所属、T1: トランジション1、T2: トランジション2、YOB: 誕生日

3. 結果と考察

ここでは1) 取得データから各種リザルトおよびランキングの結果分析、2) リレーオーダー分析の2つを行った。それらに考察も加えて、以下に述べる。

3. 1 リザルトおよびランキング分析

3. 1. 1 東京O.G.MRレース

東京O.G.MRの上位3カ国と日本の結果を表4に示す。MRのレース展開はLeg1からLeg4にかけてチーム間の差が漸次的に拡大するのが特徴である。そのため、下位順位からの巻き返しが困難な傾向にある。その中でLeg1のSwimから先頭集団を保ったGBRが総合1位、同様に上位を維持したUSAが2位、FRAが3位であった。

表4 東京O.G. MRレース結果(上位3カ国および日本)

	1位	2位	3位	日本
	GBR	USA	FRA	13位
NOC	タイム	01:23:41	01:23:55	01:24:04
	Leg1	Jessica Learmonth	Katie Zaferes	Leonie Periault
		00:21:16	0:21:14	0:21:40
		3位	1位	5位
	Leg2	Jonathan Brownlee	Kevin McDowell	Dorian Coninx
		0:20:03	00:20:14	0:20:09
		1位	4位	3位
	Leg3	Georgia Taylor-Brown	Taylor Knibb	Cassandre Beaugrand
		0:21:54	0:22:06	00:21:57
		1位	3位	2位
	Leg4	Alex Yee	Morgan Pearson	Vincent Luis
		0:20:28	0:20:21	0:20:18

(Leg内、上段: 選手名、中筋: 区間記録、下段: 区間順位)

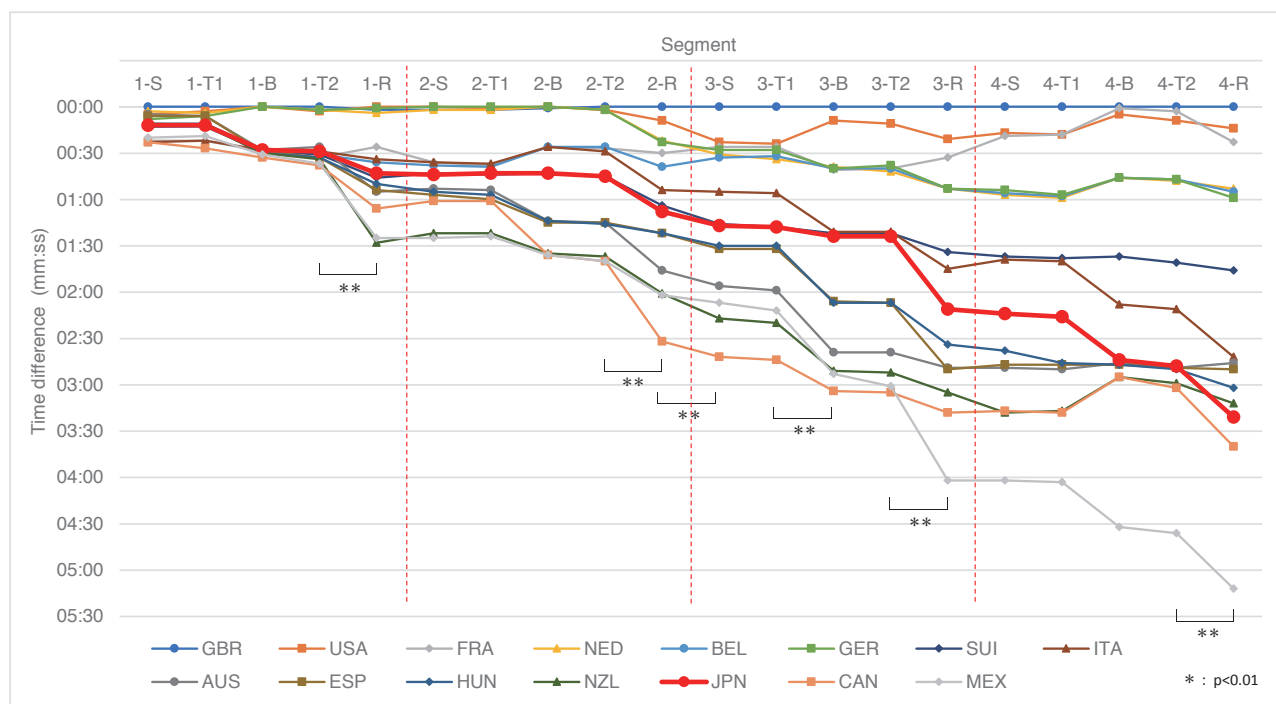


図1 東京O.G.MRレース タイム差推移

一方、日本はLeg 3で7位争いに加わるも、最終的にはペナルティーによるタイムロスもあり13位であった。

次に各Leg内の全てのセグメントにおいて、タイム差がどのように変化したかをリザルトから分析するとともに、連続する2つのセグメント間のタイム差変化を一要因の分散分析を用いて分析した(図1)。スタートからフィニッシュまでのすべてのセグメントで、トップとのタイム差は拡大する傾向を示した。セグメント別では、すべてのLegのランパートでタイム差が有意に拡大した($p<0.01$)。Leg 3では、Swim・Bike・Run パートすべてセグメントで、タイム差が有意に広がった($p<0.01$)。一方、すべてのT1パートおよびT2パートではタイム差の有意な変化は認められなかった。

さらに、MR総合タイムと各Legタイムの相関関係を分析した(表5)。総合タイムは全てのLegタイムと強い相関にあることが明らかとなった。なかでも、男子選手区間であるLeg 2やLeg 4よりも、女子選手区間の「MR総合タイムとLeg 3 ($r=0.919$)」や「MR総合タイムとLeg 1 ($r=0.868$)」の方がより強い相関関係を示した。一方、Leg間の相関関係に目を向けると、男子選手区間同士であるLeg 1とLeg 3が強い相関関係($r=0.754$)を示したのに対し、女子選手区間同士のLeg 2とLeg 4はやや相関関係($r=0.251$)を示した程度であった。

表5 東京O.G. MRレース 各タイム間の相関関係

	MR総合タイム	Leg1タイム	Leg2タイム	Leg3タイム	Leg4タイム
MR総合タイム (1:25:49 ± 0:01:28)	1				
Leg1 タイム (0:21:53 ± 0:00:28)	0.868	1			
Leg2 タイム (0:20:31 ± 0:00:21)	0.705	0.613	1		
Leg3 タイム (0:22:40 ± 0:00:32)	0.919	0.754	0.528	1	
Leg4 タイム (0:20:45 ± 0:00:26)	0.718	0.416	0.251	0.612	1

これらが示すように、東京O.G.MRにおいては女子選手が務めるLeg 3のタイムがMR総合タイムに最も強い影響を及ぼすことが明らかになった。これは各国の選手層をみると、男子と比較し女子は選手層が薄い場合が多いことで、Leg 1とLeg 3の選手にパフォーマンス差が現れ、レース展開が大きく変動することが原因の1つと考えられる。一方、男子区間での展開変化や区間間での傾向の違いがそれほど認められなかったのは、Leg 1・Leg 3での集団形成がそのまま引き継がれること、TOPレベルでの選手層が厚いことによりパフォーマンス差が現れにくいことなどが主な要因と考えられる。

こうした差が出やすいLeg 3において、いかにパフォーマンスの高い選手を配置できるかが、今後の強化における重要なポイントの1つであると考えられる。

3. 1. 2 東京O.G.個人レース

男女個人レースの上位8名と日本人選手の結果を表6、表7に示す。男子は1位から8位までの選手が1分差以内にフィニッシュしているのに対し、女子は同じく8位までで2分48秒差となっている。男子のレースは上位が僅差で順位を競った展開であり、女子は選手間のタイム差が開いた展開であったことが伺える。その中で日本選手は、男子のニナー選手14位、女子の高橋選手19位がそれぞれ最上位であった。

より細かなレース展開に目を向けると、男子は37名で構成されたいわば「大集団」でのBikeフィニッシュとそこからRunでの競争、女子はBikeパート内で集団が複数に分かれそこからRunでの競争と、それぞれ異なる様相であった。そうした展開の中でも、最も順位に直結すると言われているRunパートで高いパフォーマンスを発揮できるようになることが重要と考える。

表6 東京O.G.男子個人レース結果

順位	選手	国	総合タイム	タイム差
1	Kristian Blummenfelt	NOR	01:45:04	—
2	Alex Yee	GBR	01:45:15	0:00:11
3	Hayden Wilde	NZL	01:45:24	0:00:20
4	Marten Van Riel	BEL	01:45:52	0:00:48
5	Jonathan Brownlee	GBR	01:45:53	0:00:49
6	Kevin McDowell	USA	01:45:54	0:00:50
7	Bence Bicsák	HUN	01:45:56	0:00:52
8	Gustav Iden	NOR	01:46:00	0:00:56
14	ニナー 賢治	日本	01:46:24	0:01:20
19	小田倉 真	日本	01:47:03	0:01:59

表7 東京O.G.女子個人レース結果

順位	選手	国	総合タイム	タイム差
1	Flora Duffy	BER	01:55:36	—
2	Georgia Taylor-Brown	GBR	01:56:50	0:01:14
3	Katie Zaferes	USA	01:57:03	0:01:27
4	Rachel Klammer	NED	01:57:48	0:02:12
5	Leonie Periault	FRA	01:57:49	0:02:13
6	Nicola Spirig	SUI	01:58:05	0:02:29
7	Alice Betto	ITA	01:58:22	0:02:46
8	Laura Lindemann	GER	01:58:24	0:02:48
18	高橋 侑子	日本	02:01:18	0:05:42
DNF	岸本 新菜	日本	—	—

3. 1. 3 OQR (Olympic Qualification Rankings)

東京O.G.の国別出場枠（男女最大55名枠）は、その大部分がOQRの順位によって各NOCに分配される仕組みであった³。そのため、OQRの対象期間であった2018年5月から2021年6月にかけて、OQR対象レースとなる

World Triathlon Championship Series (以下、WTCS)、World Triathlon Cup (以下、WTC)、Continental Championshipなどにおける成績を競い合っていた⁴。OQR期間終了である2021年6月13日まで対象レース終了ごとにランキングが更新され、最終的には男子325名、女子299名がランキング入りした。

日本人選手の結果を見ると、男子13名・女子17名がそれぞれランクインするも、東京O.G.出場のための前提条件となるOQR140位以内にランクインしたのは男子5名、女子7名のみであった（表8、表9）。また、ランキング日本人最上位は男子のニナー選手67位、女子の上田選手22位となっており、世界の上位選手とは大きく差が開く結果となった。

OQRそのものはオリンピック出場枠に関わる重要な順位であるので、「ランキングスポーツ」や「国別団体競技」の様相を呈している。また東京O.G.におけるMR出場には東京O.G.個人レースの国別出場枠男女2名以上

表8 OQR結果（男子）

ランク	選手	誕生日	国	ポイント
1	Mario Mola	1990	ESP	10120.66
2	Vincent Luis	1989	FRA	9359.69
3	Kristian Blummenfelt	1994	NOR	8249.23
4	Fernando Alarza	1991	ESP	7842.89
5	Jacob Birtwhistle	1995	AUS	7457.42
6	Marten Van Riel	1992	BEL	7320.28
7	Henri Schoeman	1991	RSA	6782.48
8	Tyler Mislawchuk	1994	CAN	6747.2
9	Jonathan Brownlee	1990	GBR	6490.08
10	Gustav Iden	1996	NOR	5807.47
67	ニナー 賢治	1993	日本	2075.35
72	小田倉 真	1993	日本	1987.57
82	北條 巧	1996	日本	1669.42
84	古谷 純平	1991	日本	1579.66
127	佐藤 隼	1995	日本	822.22

表9 OQR結果（女子）

ランク	選手	誕生日	国	ポイント
1	Katie Zaferes	1989	USA	10500.37
2	Georgia Taylor-Brown	1994	GBR	8844.43
3	Jessica Learmonth	1988	GBR	8754.3
4	Taylor Spivey	1991	USA	8548.61
5	Vicky Holland	1986	GBR	7828.96
6	Summer Rappaport	1991	USA	7442.71
7	Laura Lindemann	1996	GER	7129.31
8	Non Stanford	1989	GBR	6713.84
9	Rachel Klammer	1990	NED	5734.02
10	Sophie Coldwell	1995	GBR	5491.43
22	上田 藍	1983	日本	4475.21
27	高橋 侑子	1991	日本	4256.64
44	佐藤 優香	1992	日本	2948.86
53	井出 樹里	1983	日本	2585.88
67	岸本 新菜	1995	日本	2134.07
86	福岡 啓	1994	日本	1613.07
91	蔵本 葵	1988	日本	1248.41

が必要となるケースもある。そうした中において、出場枠獲得や確保に向けた効果的なランキングの維持・上昇を実現させる強化スケジュールとそれに伴う出場レースの選択など、より戦略的な強化策の策定とその遂行が求められる。

3. 1. 4 WTR (World Triathlon Rankings)

前項のOQR同様にWTRもWT主催レースの成績に基づき、毎週更新されるランキング制度である。OQRが東京O.G.出場に特化したランキング制度であるのに対し、WTRはOQRの対象レースに加え、年間を通じて世界各地で開催されるContinental Cupも対象となり、より多くのレース結果が反映される。そのため、OQRに比べランクインする選手が多いことや、ランキングの変動が比較的大きいのが特徴である。本稿ではOQRと比較検討することから、前項OQRと最も更新日の近い2021年6月14付のランキングを用いた。当該週のランクイン選手数は男子1,009名、女子870名であった。

日本人選手の結果を見ると男子41名・女子43名がそれぞれランクインするも、OQRと比較すべく140位以内に絞ると男子6名、女子9名であった(表10、表11)。また、ランキング日本人最上位は男子の北條選手38位、女子の上田選手20位となっており、OQRよりは僅かながら世界の上位選手との差が少ない結果となった。

WTRそのものは、WTCSなどの上位カテゴリのレース出場可否やレースにおけるSwimスタート場所の優先選択等、その影響力は多岐にわたる。そのためランキング下位選手がランキングを上昇させることは多くの困難が伴う。そうしたWTR影響力の特性を踏まえ、OQR同様に戦略的なポイント獲得に向けた取り組みが重要と考える。

表10 WTR結果 (男子)

ランク	選手	誕生日	国	ポイント
1	Vincent Luis	1989	FRA	6183.36
2	Mario Mola	1990	ESP	5875.41
3	Kristian Blumenfeldt	1994	NOR	5592.03
4	Fernando Alarza	1991	ESP	5333.9
5	Marten Van Riel	1992	BEL	5122.83
6	Henri Schoeman	1991	RSA	4773.93
7	Tyler Mislawchuk	1994	CAN	4599.88
8	Jacob Birtwhistle	1995	AUS	4592.53
9	Jonathan Brownlee	1990	GBR	4510.02
10	Jelle Geens	1993	BEL	4303.76
38	北條 巧	1996	日本	2206.02
40	小田倉 真	1993	日本	2169.28
44	古谷 純平	1991	日本	2074.67
55	ニナー 賢治	1993	日本	1926.86
79	佐藤 錬	1995	日本	1573.92
124	石塚 祥吾	1989	日本	1115.87

表11 WTR結果 (女子)

ランク	選手	誕生日	国	ポイント
1	Katie Zaferes	1989	USA	6293.62
2	Taylor Spivey	1991	USA	5827.61
3	Jessica Learmonth	1988	GBR	5623.48
4	Georgia Taylor-Brown	1994	GBR	5577.38
5	Summer Rappaport	1991	USA	5534.59
6	Laura Lindemann	1996	GER	4826.97
7	Non Stanford	1989	GBR	4776.73
8	Vicky Holland	1986	GBR	4658.62
9	Sophie Coldwell	1995	GBR	4291.84
10	Alice Betto	1987	ITA	3989.05
20	上田 藍	1983	日本	3127.76
25	高橋 侑子	1991	日本	3018.34
50	岸本 新菜	1995	日本	2036.28
56	佐藤 優香	1992	日本	1946.31
60	井出 樹里	1983	日本	1826.3
66	福岡 啓	1994	日本	1745.93
89	蔵本 葵	1988	日本	1487.17
117	加藤 友里恵	1987	日本	1178.28
120	中山 彩理香	2000	日本	1144.19

3. 2 リレーオーダー分析

3. 2. 1 東京O.G.MRレースと東京O.G.個人レース

上述の分析をもとに東京O.G.MRレースと同じく個人レースの關係に着目し、分析を行った(表12、表13)。個人レースでは男女で完走選手数が大きく異なる(男子48名、女子34名)ことから、2つの比較の際には順位とタイムの両方を用いた。

まずは順位をもとにした分析結果について述べる。ここでも3.1.1.同様に「MR総合順位とLeg3個人レース順位 ($r=0.463$)」「MR総合順位とLeg1個人レース順位 ($r=0.423$)」で正の相関が認められた。男子選手区間である「MR総合順位とLeg2個人レース順位 ($r=0.322$)」「MR総合順位とLeg4個人レース順位 ($r=0.263$)」では弱い正の相関を示すに留まった。また、「Leg2個人レース順位とLeg4個人レース順位 ($r=0.460$)」の間で正の相関が認められた。

次にタイムを用いた分析結果について述べる。タイムで見た場合、順位ほど正の相関が現れにくい傾向にあった。しかしながら、順位同様に「Leg2個人レース順位とLeg4個人レース順位 ($r=0.451$)」で弱い正の相関が認められた。

これらのことから、MRレースと個人レースの關係として、男子はチーム内のパフォーマンス差が少ないオーダー戦略をとる国が多かったと考えられる。MR出場国の中には男子の出場枠が3つあり、そこから2名を選出できる国(AUS、ESP、FRA)があったため、より高いパフォーマンスの選手が2名揃う傾向にあったと推測

される。また、個人レースのタイム・順位ともに、男子ではleg2、女子ではLeg3により高いパフォーマンスを発揮した選手を配置する傾向が見られた。

表12 東京O.G.MRと個人レースの相関関係（順位）

	MR総合順位	Leg1 個人レース順位	Leg2 個人レース順位	Leg3 個人レース順位	Leg4 個人レース順位
MR総合順位	1				
Leg1個人レース順位 (15.00±9.41)	0.423	1			
Leg2個人レース順位 (18.08±11.78)	0.322	0.023	1		
Leg3個人レース順位 (14.10±10.22)	0.463	-0.285	0.309	1	
Leg4走個人レース順位 (24.23±16.84)	0.263	-0.218	0.460	0.133	1

表13 東京O.G.MRと個人レースの相関関係（タイム）

	MR総合タイム	Leg1 個人レースタイム	Leg2 個人レースタイム	Leg3 個人レースタイム	Leg4 個人レースタイム
MR総合タイム (1:25:49±0:01:28)	1				
Leg1個人レースタイム (2:00:53±0:03:52)	0.244	1			
Leg2個人レースタイム (1:47:07±0:01:18)	0.312	-0.126	1		
Leg3個人レースタイム (2:00:09±0:02:37)	0.321	-0.239	0.324	1	
Leg4個人レースタイム (1:48:51±0:03:46)	0.366	-0.334	0.451	0.135	1

3. 2. 2 東京O.G.MRレースとOQR

ここではMR総合順位と各Leg選手のOQRの関係を検討した（表14）。これまでの分析で男子および女子2名ずつのパフォーマンスの影響に着眼すべく、各Leg選手のOQRに加えて、男子OQR合計、女子OQR合計も分析に加えることとした。

総合順位と最も高い相関を示したのは「Leg1と

Leg3のOQR合計（ $r=0.727$ ）」であり、「Leg2とLeg4のOQR合計（ $r=0.308$ ）」を大きく上回った。個人のOQRを見ると、Leg1が他のLegよりも総合順位と高い正の相関を示した（ $r=0.630$ ）。

また、Leg同士の関係では「Leg2 OQRと男子OQR合計（ $r=0.893$ ）」「Leg3 OQRと女子OQR合計（ $r=0.849$ ）」「Leg4 OQRと男子OQR合計（ $r=0.846$ ）」がかなり強い正の相関を示した。

これらの結果から、1) Leg1にOQRの高い選手を配置すること、2) 女子2選手ともにより高いOQRの選手でオーダーを組むことの重要性が示唆された。

3. 2. 3 東京O.G.MRレースとWTR

次に3.2.2.同様にMR総合順位と各LEG選手のWTRの関係を検討した（表15）。ここでも男子WTR合計、女子WTR合計も分析に加えた。

MR総合順位と各WTRの関係をみると、OQRほど正の相関を示さなかった。それでも「MR総合順位とLeg3 WTR（ $r=0.494$ ）」や「MR総合順位と女子合計WTR（ $r=0.591$ ）」は正の相関が認められた。また、Leg同士の関係では「Leg2 WTRと男子WTR合計（ $r=0.950$ ）」「Leg4 WTRと男子WTR合計（ $r=0.938$ ）」「Leg2 WTRとLeg4 WTR（ $r=0.784$ ）」「Leg3 WTRと女子WTR合計（ $r=0.731$ ）」がかなり強い正の相関を示した。

これらの結果から、1) 男子においては高いWTRの選手2名でオーダーを組む傾向にあることが示唆された。

表14 東京O.G.MR総合順位とOQR

	MR総合順位	Leg1 OQR	Leg2 OQR	Leg3 OQR	Leg4 OQR	Leg1+3 OQR	Leg2+4 OQR
MR総合順位	1						
Leg1 OQR (31.87±21.10)	0.630	1					
Leg2 OQR (43.47±31.27)	0.261	0.084	1				
Leg3 OQR (38.80±34.65)	0.454	-0.038	-0.103	1			
Leg4 OQR (34.67±26.39)	0.277	-0.061	0.515	0.414	1		
Leg1+3 OQR (70.67±39.88)	0.727	0.496	-0.045	0.849	0.328	1	
Leg2+4 OQR (78.13±50.24)	0.308	0.020	0.893	0.154	0.846	0.144	1

表15 東京O.G.MR総合順位とWTR

	MR総合順位	Leg1 WTR	Leg2 WTR	Leg3 WTR	Leg4 WTR	Leg1+3 WTR	Leg2+4 WTR
MR総合順位	1						
Leg1 WTR (41.27±34.52)	0.282	1					
Leg2 WTR (51.80±52.86)	0.124	0.058	1				
Leg3 WTR (46.13±40.43)	0.494	-0.106	-0.164	1			
Leg4 WTR (46.60±47.60)	0.058	0.084	0.784	-0.046	1		
Leg1+3 WTR (87.40±50.29)	0.591	0.601	-0.092	0.731	0.021	1	
Leg2+4 WTR (98.40±94.88)	0.098	0.074	0.950	-0.114	0.938	-0.041	1

4. まとめ

本研究では東京O.G.で初めて開催されたMRレースのレース展開ならびに出場各国のリレーオーダー戦略を明らかにすること、今後の強化戦略に関する基礎データを得ることを目的として、MRレース結果、個人レース結果、各種ランキングデータを用い、それらの分析・検討を行った。それにより次のことが明らかとなった。

- 1) レースの進行とともに選手間のタイム差が拡大していくなかで、4Leg全てにおいてRunパートでのTOPとのタイム差が有意に広がった。なかでもLeg3では3パートともTOPとのタイム差が有意に広がった。MRはSDなどの個人レースと比べると、レースの距離が短いことと、3パート共に巡航速度が高いことから、一度集団から遅れてしまうと元の集団への復帰が困難であること等が大きな要因であると考えられる。
- 2) 男子区間のLeg2およびLeg4で展開の変化がそれほど認められなかった。これはLeg1およびLeg3で形成された集団が、直後のLeg2およびLeg4においてもレース展開が引き継がれること等によるものと考えられる。こうした展開においても、数名の選手は所属集団を抜け出し、前方集団に迫りつづける展開を示している。そうした選手を事前にマークするなど、日本チームのレース展開に有利に働くような活用の仕方が有効と考える。
- 3) リレーオーダー編成に関して個人レースの結果に着目すると、男子はLeg2、女子はLeg3に、両ランキングからは男子はLeg4、女子はLeg1に、それぞれよりパフォーマンスの高い選手を配置する傾向が認められた。この傾向の違いは、各国の男女各2名の競技力バランスや想定するレース展開などに起因するリレーオーダーの戦略によるもの等と考えられる。
- 4) ランキング上位選手総合順位と個人内成績（個人レース、OQR、WTR）は、個人レース順位 < 個人WTR順位 < 個人OQR順位の順に関係が強いことが明らかになった。なかでも女子2名のOQR合計が最も強いことが明らかになった（ $r=0.727$ ）。このことは1) OQRはWTRに比べ、WT主催レースのなかでもより競技水準の高いレースの順位のみを対象としていること、2) OQRの対象レースにはSDの他に、スプリントやスーパースプリント等のより短いレースフォーマットでの成績も含まれるた

め、個人OQR順位が最も関係を強く示す結果になったと考えられる。パリO.G.に向けた強化策においても、個人OQR順位に基づいた選手評価やリレーオーダーなどにおける活用が有効と考える。

つぎに今後の課題を以下に示す。

- 1) 2022年シーズンからWT競技規則改正により、男女のLegが入れ替わり男→女→男→女の順に変更となった。そのため、本研究で明らかにしたMRのレース展開とリレーオーダー戦略は大きく変動することが予想される。そのため、2022年シーズン以降もWorld Triathlon Mixed Relay Seriesのレース結果を分析することで、新たなトレンドをいち早く明らかにすることが必要である。
- 2) MRそのものは、シーズン毎に競技水準が高まっている。そうした中で、SDやSPなどの1時間程度あるいはそれ以上の競技時間の種目と、スーパースプリントやMRなどのように10~20分程度の短い種目とで、選手の特性に基づいた専門化が進むことが予想される。そのため、両種目群のレース展開の共通点と相違点を明らかにするとともに、そこからより効果的な強化戦略に繋がる知見を導き出すことが重要と考える。
- 3) MRのレース展開を結果であるタイムや順位から分析することに加え、選手の身体内部で発生している変化にも目を向けることで、今以上にレース展開を原因と結果の関係で捉えることが可能になると考える。そのためにはBikeの出力、Runのスピード推移、Runのステップ変数の推移なども取得し、分析することが有効と考える。

今後も本研究を継続することで、レース展開の解明やリレーオーダー戦略を明らかにしながら、課題の改善に取り組みつつ、我が国のMRさらにはトライアスロン全体の競技力向上に寄与できるよう努めて参りたい。

脚注

- *1 スペクテータースポーツについて広義では「競技会などにおいて観客がいる状態で行われるスポーツ」を指し示すことが多いが、ここでは「ルール・運営上の工夫がなされ観客がより楽しめる状態にあるスポーツ」を言う。
- *2 一般的なトライアスロンレースのBikeパートでは、前方を走行する選手を風除けとして利用することはルールにて禁止されている。しかしながらWT主催のレースでは、スペクテータースポーツとして進化するなかで、自転車ロードレースのようにドラフティングと呼ばれる「前方を走行する選手のすぐ後ろを位置取り空気抵抗を軽減させることで、より少ないエネルギーで走行すること」が認められている。
- *3 WTおよびIOCは、東京O.G.におけるOQRクライテリアにおいて、出場枠は各NOCに分配するものと定めていた。それを踏まえて各NOCは国内で選考基準を策定し、代表選手を選出する流れとなっていた。
- *4 OQRは当初2018年5月から2020年5月までの約2年間と定められていた。しかしながら、2020年に入り新型コロナウイルス感染症の世界規模でのパンデミックにより、OQR対象レースの延期・中止が余儀なくされ、対象レースは大きく変更した。その上、東京O.G.そのものが2021年7月に延期されたこともあり、OQR期間も同様に延期された。

引用文献

- 1) 公益社団法人日本トライアスロン連合. “トライアスロンとは?” 日本トライアスロン連合HP, 〈<https://www.jtu.or.jp/join/>〉 (参照年月日: 2022.9.01).
- 2) 公益社団法人日本トライアスロン連合. “2022 Competition Rules” 日本トライアスロン連合HP, 〈https://www.jtu.or.jp/wordpress/wp-content/uploads/2022/03/WorldTriathlon_competition-rules_JP_2022.pdf〉 (参照年月日: 2022.9.01).
- 3) Quagliarotti, C.; Gaiola, D.; Bianchini, L.; Vleck, V.; Piacentini, M.F. “How to Form a Successful Team for the Novel Olympic Triathlon Discipline: The Mixed-Team-Relay” J.Funct.Morphol.Kinesiol. 7, 46, 2022, 7
- 4) 森谷直樹. “トライアスロンミックスリレーにおけるレース展開とオーダー戦略について” 第11回JTUトライアスロン・パラトライアスロン研究会, 2020
- 5) World Triathlon. “Results: Tokyo 2020 Olympic Games | Mixed Relay” WT HP, 2021-07-31, 〈https://triathlon.org/results/result/2020_tokyo_olympic_games/501766〉, (参照年月日2022-01-15)
- 6) World Triathlon. “Results: Tokyo 2020 Olympic Games | Elite Men” WT HP, 2021-07-26, 〈https://triathlon.org/results/result/2020_tokyo_olympic_games/501764〉, (参照年月日2022-01-15)
- 7) World Triathlon. “Results: Tokyo 2020 Olympic Games | Elite Women” WT HP, 2021-07-27, 〈https://triathlon.org/results/result/2020_tokyo_olympic_games/501765〉, (参照年月日2022-01-15)
- 8) World Triathlon. “World Triathlon Individual Olympic Qualification Ranking: Tokyo 2020 Elite Women” WT HP, 2021-07-13, 〈https://triathlon.org/rankings/olympic_qualification/female〉, (参照年月日2022-01-15)
- 9) World Triathlon. “World Triathlon Individual Olympic Qualification Ranking: Tokyo 2020 Elite Men” WT HP, 2021-07-13, 〈https://triathlon.org/rankings/olympic_qualification/male〉, (参照年月日2022-01-15)
- 10) World Triathlon. “World Triathlon Rankings male” 〈https://triathlon.org/rankings/world_triathlon_rankings/male〉 WT HP, 2021-06-14, (参照年月日2022-01-15)
- 11) World Triathlon. “World Triathlon Rankings female” 〈https://triathlon.org/rankings/world_triathlon_rankings/female〉 WT HP, 2021-06-14, (参照年月日2022-01-15)

3次元行動からの増減符号解析による個人識別手法の検討

A Study on Personal Identification Method by Increase/Decrease Code Analysis from 3D Behavior

高橋 大介^{*,**} 平野 晃昭^{**} 立野 玲子^{**} 中村 納^{**}

TAKAHASHI Daisuke, HIRANO Teruaki, MINAMIKAWA-TACHINO Reiko and NAKAMURA Osamu

要旨

空中での行動を対象とした従来の個人認証手法では、平面の情報が主であり、奥行や高さといった3次元の動き情報を利用した検討は十分に行われていない。認証手法で大きな問題として、別人が本人の行動をまねて認証を突破することがある。そこで我々は、まねのしにくい空中行動中の3次元的な動きに着目し、奥や手前への動きから個人差を抽出する手法を考えた。特に個人差が生じると考えられるものに、行動時の「速さの揺らぎ」がある。我々は、行動中から速さの揺らぎに関する大きな変化が発生した個所を変化点とし、変化点間の情報を3次元ベクトルへの変換と符号化による簡便な識別システムの構築を行う。提案システムの精度を検証した結果、同一人物と別人とを識別可能であることが分かった。本稿では、3次元データから個人差のある特徴を抽出する一連の手法の提案と、構築した特徴抽出手法により個人識別が可能かを調査した結果を報告する。

●キーワード：個人識別 (human authentication) / 3次元行動解析 (3D behavioral analysis) / 増減符号 (increase and decrease code)

I. はじめに

近年、個人識別が必要となる機会が増加してきており、伴って識別装置や手法の精度向上は急務である。既存の行動による個人認証方式は、発話や筆記、タッチタイピング、歩き方など、日常の行動を対象としているものが多い¹⁾。日常の行動で個人を識別することができれば、認証されているという心理的負担を軽減することができ、多くの場面で利用することが可能となる。このようなシステムの普及のためには、識別精度が良好、操作が簡便、導入コストが低いことが必要とされる²⁾。

身体的個人認証（身体認証）で虹彩や指紋といった情報を取得するためには、特殊なセンサを搭載した機器を必要とするが、行動による個人認証（行動認証）では、カメラやマイク、キーボードなど日常的に使用されているデバイスを用いることで簡便かつ導入コストを低く抑えることができる。精度に関しては、行動認証は身体認証よりも低めになる傾向がある。しかし、さほど高い精度を求めない、マンション入り口などの共有スペースにおける自動ドアの開閉やオフィス等での共有機器のロック解除などの場合は、利用しやすさといった利便性も重

要な要素となることから、行動認証は有効であると考えられている³⁾。

本研究は、人物の行動的特徴を用いて、個人識別を行うことを目的としている。特に、空中での指先におけるわずかな動きを対象とし、指先の微小行動から速さの揺らぎといった個人の癖に該当する個人差の含まれる情報を抽出し、個人を識別するシステムの構築を目指すものである。本稿では、空中での指先の動きのデータを取得し、3次元での速さの揺らぎを個人特徴量として、符号化して抽出するシステムの構築について述べる。

II. 従来の関連研究と提案手法

II-1 従来手法

認証システムにおいて識別精度の低下の原因となる「なりすまし」は、対象の行動を「見まね」（見て覚える）や、対象の行動を記録し写しだしたものを「なぞり」（なぞって練習する）によって、本人になりすまし認証を突破するものである。従来手法ではこの問題解決のため、特徴量の統計的データを基に認証するGlobal情報利用認証方式や、特徴量の動的な振る舞いを用いるLocal情報

利用認証方式が提案されている。

従来手法を整理したものをTable.1に示す。

Global情報認証方式⁴⁾は「行動時間」、「行動回数」、「変化点数」、「加速度」などを用いて認証するものであり、まねのしやすい「軌跡（形）」への依存度を小さくすることで精度向上を行っている。

一方で、Local情報利用認証方式⁵⁾では、行動の局所的な「曲げ」や「止め」の位置を利用するものがあり、リアルタイム性を持たせたまま、「なりますし」への耐性を得ている。また、上記2種の認証方式を組み合わせたハイブリッド方式^{6) 7)}も提案されている。

しかしながら、2次元情報を単独で用いたものは、まねに対しての頑健性を確保することがやはり難しく、平面情報が主であることから、行動のみではなく他のバイオメトリクス（顔や虹彩、指紋といった身体的特徴）とのハイブリッドな手法など複雑化が行われており、処理コストの増大などの問題も起きている。

一方で、平面情報はまねへの対応に限界があると考え、3次元行動は空間上での「なぞり」ができないことから、行動をモーションセンサ等で取得し、「見まね」がし難い特徴量を用いる手法の開発が行われている⁸⁾。畠中ら⁹⁾は、赤外線ステレオカメラを用いたモーションセンサであるultraleap社製のLeap Motion (Fig.1)¹⁰⁾を行動データの取得に用い、参照する2つのパターン間の多少の違いに対して頑健に類似度を比較する方法であるDP（動的計画法）マッチングによる認証方式を提案している。Leap Motionについては本研究でも使用しており、詳細はⅢ-2にて後述する。この手法では、空中に仮想的な平面の筆記エリアを設定し、筆記した指先の位置情報に対してGlobal方式を主に利用し解析している。また、A.Chanら¹¹⁾は、手の動きに加え、形状に着目した手法を提案している。取得した3次元データに対して、静的（動かさない）な手の骨や指の形状と動的（ジェスチャー）なデータに対してマッチングを行う手法である。手形状という身体的特徴を利用することで、高精度な手法が報告されている。

3次元情報を用いた場合、取得時に特殊な機器が必要となることや、情報量の多さから特徴抽出や認証処理が2次元情報よりも複雑であること、行動の大きさや、微細な位置等のブレの影響を大きく受けやすいといった問題がある。

以上述べてきたように、2次元の手法では、3種類の方式いずれも数多くの研究が報告されている。一方で3

次元の手法も近年研究が盛んにおこなわれているが、2次元手法の拡張手法の研究が主であり、まだ十分な検討がされていない。

Table.1 Conventional Method Type

Identification method	2D	3D
Global Information	◎	○
Local Information	◎	○
Hybrid System	○	△

◎ : many ○ : a few △ : rare

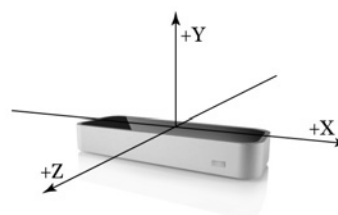


Fig. 1 Leap Motion Controller ©ultraleap

Ⅱ - 2 提案手法

本研究は、空中での指先の微細な3次元行動を対象とし、個人差は指先の動きの速さの揺らぎにあると考える。本研究での「速さ」とは、決まった行動での指先の位置がある時間から時間経過した後の位置までの変化量の大きさから求めることができる。また、この速さの大きさが特定の行動間で「変化（揺らぎ）」することは、個人の行動の癖に由来する。このため、縦の動き（縦勢）、横の動き（横勢）、奥への動き（奥勢）に対して生じるGlobal情報となる「変化点数」およびLocal情報である「変化点間の位置情報に基づくベクトル」に着目した。Table.1では3次元のハイブリッド方式に該当する。3次元のデータを対象とするため、「なぞり」が困難であり、変化点の間という微細な行動である変化点間の位置情報は、「見まね」することが難しいことから「なりますし」への頑健性も確保できるものである。

指先の行動は、高精度かつ高速なモーションデバイスであるLeap Motionを用いて微細な情報を取得する。得られたデータから、奥行情報を含んだ指先の動き量を表した3次元行動ベクトルを算出する、これは、位置情報が相対的なものとなり、行動時の単純な大きさや行動位置の変動に影響を受け難い特長がある。ベクトルから得た個人差を増減符号によって符号化した特徴量を用いることで、本人と別人の識別を行う手法を提案する。

Ⅲ. 指先行動を取得するシステム

Ⅲ-1 対象となる3次元行動と入力方法

被験者の空中での指先の行動は、本来であれば、自由であることが望ましい。しかし、3次元行動時における個人特徴が不明な状態で、被験者それぞれが異なる行動を行った場合、行動自体の継続性や別人との個人差があるかを判別するのは困難である。そこで本研究ではまず、3次元行動時に生じる個人特徴の判別を行うために、行動判別で良く用いられる基本動作である縦および横の動作中に個人差がある特徴が存在するかを調査する。このため、直線のみで構成されており、行動の時間が比較的長く、複数画であり、言語に極力依存しないという条件から対象行動は「十」という形状を空中表現する時のものとした。この形状は単純な形状であるため、運指や動きの省略が生じ難く、色々な行動の基礎となるため、基本的な解析データを得るのに適している¹²⁾。

Ⅲ-2 使用機器

本手法で用いるLeap Motionは、赤外線ステレオカメラを用いていることでマーカーが必要なく、手指のモーション情報取得に特化しており、デバイス上の認識領域に手をかざすだけで行動取得が可能で、導入しやすいデバイスである。機器の設置位置は、実際の使用方法を想定し、机の上に置き、情報表示用のディスプレイより手前とした(Fig. 2)。座標軸の原点はFig. 1で示したデバイスの中心であり、横方向(X座標)と奥行方向(Z座標)は「正負」のデータを持ち、縦方向(Y座標)は「正」のみのデータとなる。手の位置はデバイス中心を基点とし、認識領域内となる左右、前後に20[cm]程度、高さ(上下)は約15[cm]~30[cm]の範囲とした。

Leap Motionは設定により、60~200[fps]と高速にかつ、1/100[mm]~1/10[mm]の精度で指の位置や角度を取得することができる。今回の実験では、処理速度よりも精度を重視し、1/100[mm]、60[fps]の設定でデータ取得を行った。

空中表現では、2次元平面での行動時と異なり、被験者は視覚や触覚でのフィードバックが少ないことで、行動している大きさや位置が分かり難く、形状の安定が失われやすい。本手法では画面表示を行い、被験者にフィードバックの感覚を与えることで、これらの問題に対応している。

データ取得時に、識別対象となる被験者は椅子に座った状態で、Fig. 2 (b) のように手をLeap Motion上に

ざす。この時、指先の位置をFig. 3に例示した画面で情報表示を行う。この画面は640×480[pixels]の大きさであり、動かす範囲の目印として中心に矩形を描画している。また、指先の位置は、Fig. 3で示すように「円」と中心に「点」を描画する。この円はFig. 1で示したLeap Motionの中心を原点とした奥行(Z軸)に応じて、円の色を手前の場合は「青」、中心付近では「黄」、奥にある場合は「赤」に変化するように設定している。また、視覚的变化をより強くするため、円の大きさも奥行値に応じて変化させ、中心に近いほど「小さく」、離れるほど「大きく」なるように設定した。

Ⅲ-3 実験諸条件

データ取得の際、被験者にはできるだけ自由に行動してもらおうが、取得範囲内に収めることと行動の開始と終了をわかりやすくするため制約条件として、

- ・椅子に座った状態で手はFig. 2の位置
- ・開始時と終了時は指先位置を画面中央付近
- ・人差し指のみで行動する
- ・行動の種類:「十」の形状

の4点を伝え、利き手、姿勢などは自由とし、毎回、日時を変えて一人当たり3回のデータを取得した。

本実験は認証を行う際、各個人が別人の行動を特に意識せず入力した時(通常時)を想定している。通常時における個人差の特徴を調査するため、被験者20人(右利き18人、左利き2人、20代から60代男女)のデータを用いて識別実験を行う。被験者には、慣熟のために被験者自身が十分と感じるまで本システムと同様のシステムで事前練習を行ってもらった。その後、先にあげた制約条件を告げ、自由に行動してもらった状態でデータを取得し、提案手法による識別精度を調査した。なお、被験者より得る情報は、氏名(通し番号等でも可)、年代、性別、利き手、指先の行動データであり、取得方法および保管方法について、2022年度の文化学園大学研究倫理審査を受け、承認番号T22C05にて承認を受けている。

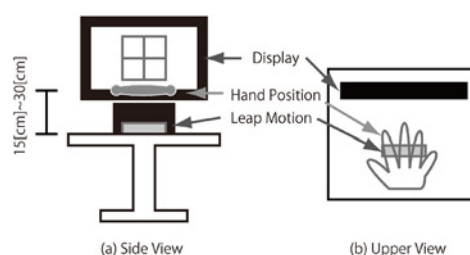


Fig. 2 Location of Leap Motion

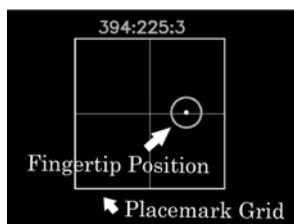


Fig. 3 Display Image

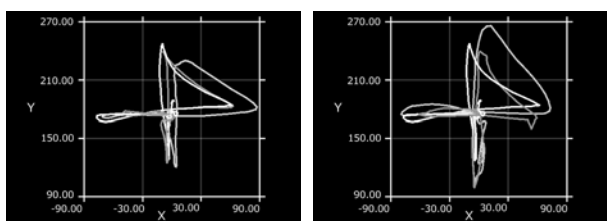
Ⅲ-4 3次元情報として表れる個人の特徴

取得したデータ例について、Fig. 4ではX軸とY軸のデータを、Fig. 5では加えてZ軸のデータを示している。どちらも (a) は同一人物 (same) の3回分のデータ、(b) は3人の別人物 (other) のデータである。単純な重ね合わせであり、行動の大きさが異なっているが、文字サイズのキャリブレーション等を行っていない。これらを比較すると、平面では同一人物時も別人時も似た軌跡であり、一方で、3次元空間で比較すると、同一人物時は軌跡がほぼ同じ形状をしており、別人時と比較すると一見して差が生じているのが見て取れる。

30件（被験者10人分、各3回）の3次元空間データに対し、Fig. 6に示すようにデータを囲む外接直方体を求め、その直方体の各軸の大きさの平均値と標準偏差を算出した結果をFig. 7に示す。横軸は各座標軸を示し、縦軸は直方体の大きさとなる。単純な比較ではあるが、従来手法で用いられているX、Y軸と同様にZ軸の奥行情報にも大きな差が認められた。

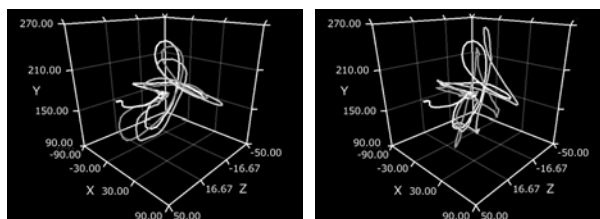
従来手法では、縦と横の動きの2次元情報に射影したため、奥行情報は全て削除されており、使用していない。このことから、X、Y軸情報に加えZ軸情報を加えた特徴抽出を行うことで、より個人の特徴を捉えることが可能であると考えられる。

本稿で提案する手法は、これらの空間情報も加味した特徴量を用いる。具体的には、奥行に関する行動に着目し、被験者が無意識に行っている手前や奥への移動量を従来の平面情報に奥行情報を加味した3次元ベクトルを用いることで、3次元的な速さの揺らぎを表現する¹²⁾。



(a) Same (3 times) (b) Other (3 person)

Fig. 4 Projection of X-axis and Y-axis



(a) Same (3 times) (b) Other (3 person)

Fig. 5 Projection of X-axis, Y-axis and Z-axis

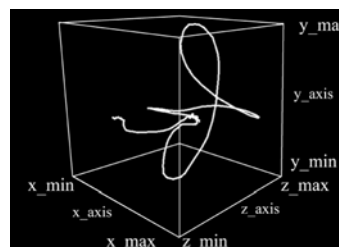


Fig. 6 Bounding Box of Data

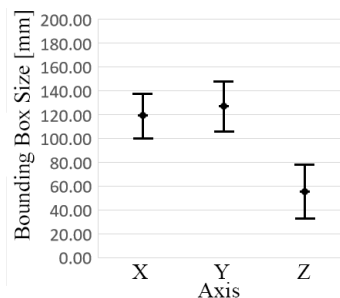


Fig. 7 Variation of Bounding Box Size

Ⅳ. 3次元ベクトルの角度を用いた個人識別の提案

Ⅳ-1 変化点の検出

モーションセンサで取得した一回分の行動データ例は、Fig. 8で表したX軸のみ、およびFig. 9で表したXYZ軸のような時系列データとなる。これらのデータを単純に重ね合わせるなどの比較では、行動時の大きさや位置変化により値が大きく変化する、本人もしくは別人を識別することが困難である。このため、取得データから各個人において行動時に不変であり、かつ別人と大きく異なる特徴が必要である。

そこで我々は、Global情報である指の位置が大きく変化する状態の点（変化点）を基準とした特徴量候補の抽出手法を提案する。変化点は、大きさや位置に変動が生じた場合においても、同一人物が同一の行動をした場合であれば必ず存在し、変化点から変化点までの距離の比率や角度には、変動が生じ難い特長がある。また、変化点間の距離（大きさ）は速さを表しており、変化点および変化点間の特定位置での速さの変化（揺らぎ）を調べることで、個人特徴を得ることができる。

提案手法で対象とする変化点は基準とする軸を「十」という行動のどの位置（フレーム）かがわかりやすいX軸とY軸からとしている。Z軸は他2軸に比べてストローク中などで細かく変化しやすく、どの位置に個人差が生じているか、この段階では不明なため、変化点の抽出には使用しない。X軸もしくはY軸で変化点の位置を抽出した後、同じ位置で元データから3軸の情報を改めて抽出し、3次元の変化点情報を得る。

提案手法の変化点は各フレーム値 F_n から求め、開始点 P_1 、X軸とY軸の最大 P_{max} ・最小 P_{min} 、終了点 P_2 の6点を対象とする。これらの抽出には、Eq. 1～4を用いる。

まず、最大・最小点の場合は、各フレーム F_n から軸での位置が最大もしくは最小となるフレームを算出する。

軸 i に対して、

$$P_{max}^i = \text{Max}(F_n), \quad P_{min}^i = \text{Min}(F_n) \quad (1)$$

次にレンジ（範囲） H_i から変化点算出に用いる閾値 Th_h を算出する。このとき用いる重み値 W_{th} はレンジの何%以上の変化量とするかを意味しており、予備実験より良好となった0.05（5%）もしくは0.01（1%）を用いる。

$$H_i^i = P_{max}^i - P_{min}^i, \quad Th_h^i = H_i^i W_{th} \quad (2)$$

但し、 $W_{th} = 0.05 \text{ or } 0.01$

開始点、終了点はEq. 3 および Eq. 4 で求める。

開始点 P_1 は、X軸ではEq. 3、Y軸ではEq. 4を用い、X軸では P_{min} 、Y軸では P_{max} より前フレーム側に走査し、閾値 Th_h 以上の変化が5フレーム以上続いた後、閾値以下の最初のフレームを開始点としている。

終了点 P_2 は、開始点とは逆方向の走査となり、それぞれX軸ではEq. 4、Y軸ではEq. 3を用い、X軸では P_{max} からY軸では P_{min} より後フレーム側に走査して求める。

$$Cf_n^i = \begin{cases} 1, & |F_{n-1} - F_n| \geq Th_h^i \\ 0, & \text{otherwise} \end{cases} \quad (3)$$

$$P_1^i = \begin{cases} 1, & \sum_{i=n}^{n-4} Cf_n^i \geq 5 \mid Cf_{n-5}^i = 0 \\ 0, & \text{otherwise} \end{cases}$$

$$Cb_n^i = \begin{cases} 1, & |F_{n+1} - F_n| \geq Th_h^i \\ 0, & \text{otherwise} \end{cases}$$

$$P_2^i = \begin{cases} 1, & \sum_{j=n}^{n+4} Cb_j^i \geq 5 \mid Cb_{n+5}^i = 0 \\ 0, & \text{otherwise} \end{cases} \quad (4)$$

X軸に対する実際のデータから変化点の具体的な抽出例を説明する。最大および最小値は、Fig. 8の波高の最大、最小と同じである。また、開始点 P_1 は最小値より前方向に探索した結果求めている。同様に終了点 P_2 は、最

大値より後方向に探索して求めた。これにより、Fig. 8の白点位置が抽出される。また同様に、Y軸に対しても4つの変化点の抽出を行う。今回の場合は最後に、Fig. 9で示すようにX軸での最大点とY軸の開始点、Y軸での最大点とX軸の終了点は、対象としている「十」という動作より同じ位置となることからそれぞれ最大点の位置に統合する。これにより今回のデータでの変化点はX軸、Y軸のそれぞれの開始点（ P_1^x 、 P_1^y ）、最大点（ P_{max}^x 、 P_{max}^y ）、最小点（ P_{min}^x 、 P_{min}^y ）終了点（ P_2^x 、 P_2^y ）の8点のうち、3次元での変化点は、開始点 P_1^x 、終了点 P_2^y 、X軸とY軸の最大（ P_{max}^x 、 P_{max}^y ）・最小（ P_{min}^x 、 P_{min}^y ）の6点の位置となる。変化点をFig. 8、9のようなグラフの形状および実データの数値より、目視で急激に変化した箇所（フレーム）を抽出した場合（Manual）と、Eq. 3、4により算出した場合の精度について例として3人分のデータで比較するとTable. 2に示したように、最大でも5フレーム差以内で検出できている。

さらに、行動に含まれる個人差は変化点だけでなく、変化点と変化点の間のストローク中にも生じると我々は考えている。そこで、上述した手法で得られた変化点を時間軸方向に二分するか所（Fig. 9の破線）のデータも変化点間情報として抽出する。最終的にXYZの3軸それぞれで変化点と変化点間の位置で情報を抽出すると、変化点6か所（Fig. 9の実線）、変化点間5か所、あわせて11か所となり、3軸で計33点の情報を得る。

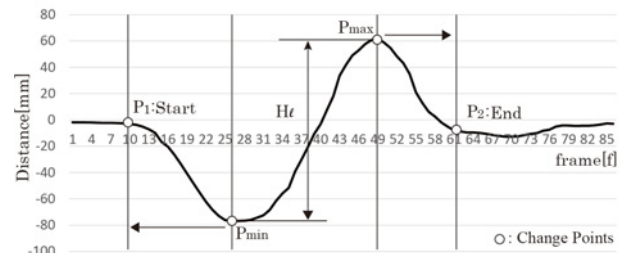


Fig. 8 Finger Location and Change Positions (X axis)

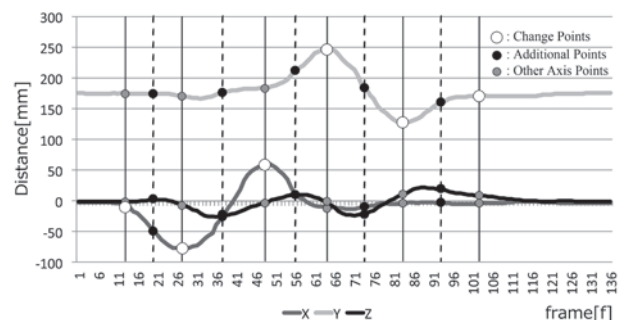


Fig. 9 Change Points Extraction

Table. 2 Manual and Auto Extraction Frame Number

Subjects	A		B		C	
	P1	P2	P1	P2	P1	P2
Manual	28	115	18	73	17	66
1%	27	120	18	71	18	65
5%	25	120	18	72	17	65
Manual - 1%	1	-5	0	2	-1	1
Manual - 5%	3	-5	0	1	0	1

IV-2 ベクトルおよびベクトル間角度の算出

取得した変化点に対して、それぞれ隣り合う2点の位置情報から、ベクトルを算出する。このベクトルの大きさには、Local情報に相当する行動時の速さの揺らぎや、大きさといった各個人の癖の情報が含まれる。特に本手法では従来からの縦横情報に加えて、奥行値の情報を含んだ3次元のベクトルであり、より詳細に個人の情報を反映したデータとなる。

本手法で用いる変化点はIV-1で述べたように11か所となり、取得したXYZ軸の値に対して、連続する2点の位置情報から、Eq. 5により3次元ベクトルの L^2 ノルムをそれぞれ計算することで10個の値を得る。算出したベクトルから行動時の大きさや位置変化の影響を受け難い連続した2つのベクトル間の差の大きさから $\tan^{-1}\theta$ を用いて算出した角度 D_n へ、Eq. 6により変換する。ベクトル間の角度は10個のベクトルから9個の値が得られ、範囲は $-90\sim 90[\text{deg}]$ で算出される。この角度 D_n は変化点11か所それぞれの3軸の動きの大きさと方向を符号と角度に変換したものとなる。

$$\|v_n\| = \sqrt{[x_{n+1} - x_n]^2 + [y_{n+1} - y_n]^2 + [z_{n+1} - z_n]^2} \quad (5)$$

$$D_n = \tan^{-1}(\|v_{n-1}\| - \|v_n\|) \quad (6)$$

IV-3 増減符号の算出

IV-2で算出したベクトル間の角度はTable. 3のAngleに例示するように9つあるが、細かな変動が同一人物であっても生じることから、この値をそのまま個人識別に用いると精度低下の要因となる。しかし、ベクトル間の角度を単純な符号列に変換して表現することで、計測やマッチングを簡便にすることが可能となる。そこで、本手法ではベクトル間の角度を増減符号に変換することで符号化を行う手法を提案する。

増減符号 (Increase and Decrease Code : I/D Code) とは、ある点からある点までの増分を調べたとき、増加

もしくは等しければ「+」、減少であれば「-」の符号を付加し、連続した数値データを符号の連続として取り扱うことを可能とするものである。

提案手法では、この増減符号の整合により、個人間の普遍性および別人との間の差異を判定する。今回、用いる増減符号を基本となる2種から3種以上に増やして調査した予備実験の結果より、方向と大きさの情報をある程度担保でき、最も分離度が良く、最低限の個数となったことから、3種 (+, -, =) を用いることとする。角度の情報から、それぞれの符号へ変換するためには、付加する符号に応じた閾値を設定する必要がある。本実験では、Fig.10に示したようにベクトル間の角度の範囲 $90.00[\text{deg}] \sim -90.00[\text{deg}]$ を3等分したものを用い、符号をつける際の各閾値を「+」: $30.00[\text{deg}]$ 以上、「=」: $+29.99 \sim -30.00[\text{deg}]$ 、「-」: $-30.01[\text{deg}]$ 未満に設定して実験を行った。

増減符号の算出例として、Table. 3のI/D Codeのように一連の角度データに対して9つの増減符号が算出される。なお、IV-1で述べたEq. 2の2つの閾値にて、増減符号を算出するとTable. 4で示すように、Manualと異なる符号 (灰色) は1か所程度と、どちらの閾値でも同様の精度で結果が得られたため、今後の実験では閾値を0.05として得られた増減符号で検討を行う。マッチングでは、Table. 5のように対象人物の増減符号列に対して、同一人物と別人物のときで増減符号の一致数をカウントし、一致率を算出する。

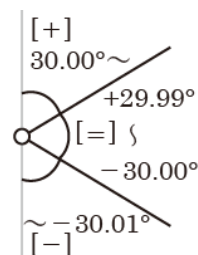


Fig.10 Calculation angle range of I/D Code

Table. 3 An Example of I/D Code Assigned by Angle

Angle[deg]	I/D Code(+, -, =)
-39.38	-
87.45	+
87.84	+
-66.55	-
-88.74	-
87.56	+
-87.98	-
-85.77	-
-1.57	=

Table. 4 Code Matching
between Manual and Auto Extraction

A			B			C		
manual	0.01	0.05	manual	0.01	0.05	manual	0.01	0.05
+	+	+	+	+	+	+	+	+
+	+	+	+	+	+	+	+	-
+	+	+	-	-	-	+	+	+
=	=	=	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	+	+	+
+	+	+	+	+	+	+	+	+
+	+	+	-	-	-	-	-	-
-	-	-	+	-	-	+	+	+
-	-	-	-	+	+	-	+	-

Table. 5 Concordance Example of I/D Code

Subject-Same	Same	Subject	Other	Subject-Other
○	+	+	-	×
○	-	-	+	×
○	=	=	=	○
×	-	=	-	×
○	-	-	+	×
○	+	+	+	○
○	+	+	-	×
○	-	-	-	○
○	+	+	+	○

V. 提案手法による識別精度

提案手法の有効性を確認するため、通常時として取得した被験者20人、各3回のデータに対してIV-3で述べた提案手法による識別精度を算出した。一致率を計測した結果をFig.11に示す。横軸は識別対象の種類として同一人物同士のマッチングおよび別人物とのマッチングを表し、縦軸は増減符号の一致率を算出した結果の平均値および標準偏差を表している。実験結果は、

- ・本人受入率 TAR : True Acceptance Rate
- ・分離度 Res : Resolution (TAR-FAR)
- ・他人受入率 FAR : False Acceptance Rate
- ・本人拒否率 FRR : False Rejection Rate
(100-TAR)
- ・平均誤識別率 AER : Average Error Rate
{(FAR+FRR)/2}

の慣例に基づく指標を用いて実験結果の精度を検証する(Table. 6)。

理想的な結果は、本人受入率TARが高く、他人受入率FARが低いものであり、平均誤識別率AERが低く、分離度RESが大きな値である。

Fig.11より同一人物同士のTARは73.89[%]と増減符号の一致率は良好な値であり、標準偏差も10[%]程度とばらつきが少ない結果が得られた。別人との比較である

FARは44.44[%]、標準偏差17[%]程度と同一人物時より低い一致率ではばらつきも大きな値となった。

分離度Resは29となり、標準偏差も考慮すると同一人物と別人を誤識別する可能性はあるが、単純なマッチング手法を用いての実験結果としては、同一人物と別人を分けることが可能な分離度を得られていると考える。

一方で本人拒否率FRRは26.11[%]、平均誤識別率AERでは37.22[%]と高めと考える値であり、I. で述べたように行動を対象とした識別手法の精度は低めになる傾向が本手法でもみられた。

また、同一人物時と別人時の一致率に対しての、t検定の結果、有意差があった ($t(118)=10.50, p<0.001$)。

実験結果より、空間の指先の動きの速さの揺らぎに着目した本手法にて、速さの揺らぎを表す符号列で個人の指先の動きが特徴づけられた。また、符号をマッチングすることで、同一人物と別人をある程度区別することができた。一方で有意差はあるものの、別人物との分離度やAERが高めであることから、精度向上の検討を重ねる必要がある。

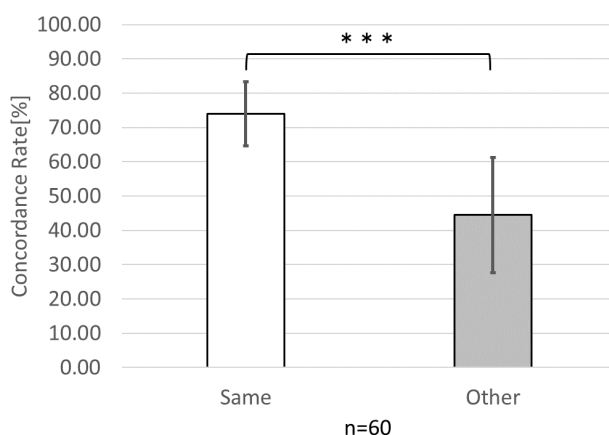


Fig.11 Average of Concordance Rate (Note. *** $p<0.001$.)

Table. 6 Identification Accuracy

Index	Value[%]
TAR	73.89
FAR	44.44
Res	29.45
FRR	26.11
AER	37.22

VI. おわりに

本論文では、3次元空間中の指先行動から人物の行動認証を行う手法の構築を目指し、個人差のある特徴量を取得する手法の開発を行った。提案手法では、モーションデバイスから取得した指先の空中行動という微細かつ高速で動く3次元行動の速さの揺らぎに着目し、指位置情報から行動の変化が大きなGlobal情報の変化点を抽出し、得られた変化点間の3次元ベクトルならびにLocal情報のベクトル間角度を算出した。これにより、先行研究で問題となっていた行動時の大きさや位置などの細かい指のブレによる影響を軽減し、個人差を有した情報を指先の3次元行動データから自動的に得る手法を開発した。また、ベクトル間角度に対して3種類の増減符号を算出し符号化することで、上下左右前後の移動タイミングに応じた個人ごとの癖を単純化し、簡便で定量的な特徴として抽出することが可能となった。

識別実験によって速さの揺らぎは、個人の指先の動きを特徴づけることを確かめた。結果の精度は、本人受入率TAR:73.89[%]、他人受入率FAR:44.44[%]、分離度Res 29が得られ、有意差のある差異が認められた。これにより速さの揺らぎによる同一人物と別人との識別可能性が示された。

今後は、より分離度を大きくするため、増減符号の特性に着目したマッチング手法の開発と、「なりすまし」を意図的に行った場合において、本提案手法の精度の検証を行う予定である。また、対象となる行動を、斜めや円などのより複雑なものへ対応し、字や記号の形状に限らない空中表現行動を用いた個人識別手法の確立を目指し検討を重ねる予定である。

謝辞

本研究を実施するにあたり、多大なるアドバイスをいただきました関東学院大学理工学部 岡本教佳名誉教授ならびに中屋敷かほる先生にこの場を借りて御礼申し上げます。

参考文献

- 1) Y.Komiya, T.Ohishi, T.Matsumoto: "A Pen Input On-Line Signature Verifier Integrating Position, Pressure and Inclination Trajectories", IEICE TRANS.INF & SYSTEMS, Vol.E84-D, No.7, pp.833-838, 2001.
- 2) S.Hangai, S.Yamanaka and T.Hamamoto: "Writer Verification using Altitude and Direction of Pen Movement", Proc. Of ICPR, pp.3483-3486, 2000
- 3) 小山、吉田、和田、半谷: "オンライン署名認証における3種類の分割手法の偽筆に対する耐性について", SCIS2011, 2011
- 4) W.Nelson, W.Turin and T.Hastie: "Statistical Methods for On-line Signature Verification", Intell. Journal of Pattern Recognition and Artificial Intel., Vol.8, pp.749-770, 1994
- 5) T.Ohishi, Y.Komiya and T.Matsumoto: "On-line Signature Verification using Pen-Position", Pen-Pressure and Pen-Inclination Trajectories, IEEE, pp.547-550, 2000
- 6) J.Fierrez-Aguilar, L.Nanni, J.Lpez-Penalba, J.Ortega-Garcia and D.Maltoni: "An on-line Signature Verification System Based on Fusion of Local and Global Information", Proc. of IACR, AVBPA, LNCS-3546, pp.523-532, 2005
- 7) I.Nigam, M.Vatsa, and R.Singh, "Leap signature recognition using HOOF and HOT features," Proc, ICIP2014.
- 8) 大坪、中井: "加速度センサの傾き情報を併用した空中手書き文字認証", 信学技報, PRMU2012-112, pp.263-268, 2012
- 9) 畠中、鹿島、佐藤、渡邊: "指識別情報を用いたフレキシブル空中署名個人認証システムに関する研究", 映像情報メディア学会誌, Vol.70, No.6, pp.J125-J132, 2016
- 10) Leap Motion: <https://www.leapmotion.com/>, 2015.06.03
- 11) A.Chan, T.Halevi, and N.Memon, "Leap Motion Controller for Authentication via Hand Geometry and Gestures," HAS 2015, LNCS 9190, pp.13-22, 2015.
- 12) 坂田、高橋、岡本: "Leap Motionから取得したデータによる筆跡鑑定のための特徴抽出", 映像情報メディア学会技術報告, ME-2014-24, Vol.38, No.7, pp.331-334, 2014

太平洋の両岸で

—ハロルド・ライト作品と戦後日本における他者化—

Otherization on Both Sides of the Pacific

—The Ozarks in Harold Bell Wright's Fiction and Japan After World War II—

久保田 文* John J. Han**

Aya Kubota and John J. Han

要旨

エドワード・サイードによるOrientalizationの分析は、東洋人を「魅力はあるが、劣った他者」とみなす西洋人の視点を浮き彫りにした。本研究ノートは、20世紀末に確立したポストコロニアル批評の立場から、ハロルド・ベル・ライトの作品を読み直す試みである。20世紀初頭にアメリカの都心部に住んだ者達が、自国内のOzarks地方に住む人々に対し、Orientalizationに類似した偏見を抱いていたことが洞察できる。この僻見は、20世紀後半以降ライトに与えられる評価が低くなっていった一因と考えられる。

本研究ノートでは更に、アメリカの支配層が第二次世界大戦後の日本において、Orientalizationに基づく行動をとった史実を示す。そのことが、日本的アイデンティティの喪失やself-Orientalizationにつながり、ひいては三島由紀夫ら知識人を悲しませたのである。

●キーワード：アメリカ文学 (American literature)／ハロルド・ベル・ライト (Harold Bell Wright)／三島由紀夫 (Yukio Mishima)

Introduction

Harold Bell Wright's Ozark novels reflect his affection for southwestern Missouri as is evidenced by his words of dedication for *The Shepherds of the Hills*:

*To Frances, my wife
In memory of that beautiful summer in the
Ozark hills, when, so often, we
followed the old trails around the rim of
Mutton Hollow—
the trail that is nobody knows how old—
and from Sammy's Lookout watched the day
go over the western ridges.*
(11; italics in original)

Indeed, many passages in his Ozark novels portray the inspirational beauty of the region. Once he relocated to California and then to Arizona, he rarely visited the Ozarks, but he maintained an emotional attachment to the region. In a 1935 letter to a relative in Carthage, Missouri, he wrote he “would like to make a pilgrimage

back to the Ozarks” (qtd. in Ketchell 18).

Having said that, a close reading of Wright's Ozark novels reveals that he held a view of the Ozarkers reminiscent of the European objectification of Asia, North Africa, and the Middle East. In his landmark postcolonial study *Orientalism* (1978), Edward W. Said (1935-2003) analyzes the romanticized representation of the Eastern world by Eurocentric Orientalists, who approached the non-Western world in a patronizing, condescending manner. Said's postcolonial critique of Orientalism can be a useful tool in discussing Wright's objectification of Ozarkers who supposedly need improvement.

Specifically, this paper will define the postcolonial concept of Orientalism and then discuss how Orientalist thought is embodied in three of Wright's Ozark novels. In the final segment of the body, we will apply Said's critical theory to the phenomena of Orientalism and self-Orientalization in Japan after the country's defeat in World War II. Said conceived the idea of Orientalism focusing on the Middle East (that is, the Orient) vis-à-vis

imperialist Europe. This paper aims to show how an American version of Orientalism is played out in the Ozarks in the early twentieth century and in Japan in the mid-twentieth century.

Orientalism in a Nutshell

Said's *Orientalism* is considered the key text in postcolonial literary criticism. The author was a man of what W.E.B. Du Bois calls "double consciousness"—a man of "two-ness" (para. 3): a Palestinian and an academic elite in the United States.¹⁾ A basic definition of Orientalism is "the representation of Asia, especially the Middle East, in a stereotyped way that is regarded as embodying a colonialist attitude" (*Oxford Languages*). According to the Orientalist view, the West is the universalized Self, and the Orient is the silent Other, who is represented through the Western eye. In this "us vs. them" mindset, the West is masculine, rational, and moral, whereas the Orient is feminine, irrational, and immoral. Oriental men are weak but dangerous, and Oriental women are seductive and crave domination by Western men. Being superior, the West has the moral obligation to save the Orient from barbarism, ignorance, and depravity. There are some redeemable natives who can serve as administrators, educators, and law enforcement officers under the supervision of the colonizers. Eventually, natives embrace at least part of the colonizer's culture, which results in what Homi K. Bhabha and other postcolonial scholars call "hybridity." In hybridization, the colonized Other adopts a compromising position toward the colonizer's culture. The Orientalist view of Asia also results in Asians' self-Orientalization, denigrating themselves as inferior to Westerners.

The Ozarkers in Wright's fiction are generally poor, uneducated whites who need the help of outsiders, who supposedly know better, in improving themselves and their communities. As a sentimental novelist who classifies people into two groups, good and bad, Wright tends to adopt a condescending posture toward natives that recalls the Orientalist view of Asians. His fiction otherizes the Ozarkers in two ways. First, many outsiders, typically from cities, serve as enlighteners of

the native Ozarkers. Second, some good locals tend to have descended from outsiders, and they can improve themselves quickly through proper mentoring. Three of his Ozark novels provide sufficient evidence for this observation: *That Printer of Udell's* (1902-03), *The Shepherd of the Hills* (1907), and *The Re-Creation of Brian Kent* (1919).

Dick Falkner's Social Activism and Heroics: *That Printer of Udell's*

The title of the novel is the nickname of Dick Falkner, the main character of the story. He initially appears as a tramp looking for employment in Boyd City, which is modeled after Lebanon, Missouri. He used to work in Kansas City but was fired because of his labor rights activism. When he arrives at Boyd City, he expects decent treatment from its residents, most of whom are Christian. However, he is considered a nuisance, even a danger, to the community. Instead of trying to help him, the people want him to move on. After enduring hunger and cold for days, he is employed by a printer, who is a non-Christian called an "infidel" by the pious community. Thereafter, he becomes a leader of the community, exemplifying "applied Christianity" (Wright, *Printer* 80).

Dick's faith in applied, or practical, Christianity is strengthened when he hears the Reverend James Cameron's social gospel message at the Jerusalem Church. Cameron "wish[es] to see Christians doing the things that Christ did, and using in matters of the church, the same business sense which they [bring] to bear upon their own affairs" (43). Dick fully agrees with him. When he came to Boyd City, he sought assistance from a local church, which gave him nothing but good wishes. He felt that the church was an otherworldly institution that disregarded the basic needs of humanity: "And the house of God stood silent, dark and cold, with the figure of the Christ upon the window and the spire, like a giant hand, pointing upward" (33). Once employed as a printer, Dick leads the charge to help the needy by providing space, resources, and care. His idea, which gains Cameron's support, is for the church to offer the tramps in Boyd City a house where they can stay

temporarily, working for food. Sanctimonious lay leaders, such as Deacon Wickham, oppose the idea, deeming it an “unscriptural thing” and “the strange teaching of an outcast and begging infidel” (117, 118). However, Cameron and Dick push the proposal forward, and the church becomes a haven for those who have fallen on hard times.

In addition to his moral courage, Dick is represented as a gentleman-knight in the novel. His appearance is conspicuous: he is a “tall, handsome man with the dark hair” (83). He also deeply admires Amy Goodrich, who has a “beautiful face” (155), and her feeling is mutual. In the second half of the book, Wright traces the two characters’ budding romance and the obstacles they overcome before they marry each other. Jim Whitley, a local scoundrel who has an eye on Amy, takes her to Cleveland, Ohio, where she is about to work as a prostitute. Promising to “fix” the villain (226), Dick takes the train and miraculously rescues her—a damsel in distress—out of his evil clutches. In other words, Dick serves as an outsider-turned-savior in Boyd City. Later, Whitley is killed at the hands of Jake Thompkins, a fellow tramp in Boyd City to whom Dick gave his last nickel years ago. Wright assures his readers that Amy’s purity has not been compromised by Whitley. Before he dies, Whitley tells Jake in a gasping voice, “Tell—Falkner—I—lied—Amy—is—innocent—and—tell—” (241). In *That Printer of Udell’s*, Wright highlights the virtues of Dick—a hero from outside the Ozarks—by using Jim, a native Ozarker who is portrayed as unredeemable.

Dad Howitt as a Mentor: *The Shepherd of the Hills*

The main character of *The Shepherd of the Hills*, Dad Howitt, comes from Chicago to the Ozarks to expiate for his son’s sins against a local girl, whom he impregnated and then deserted. In Chapter 1 of the novel, the title character appears as a man of dignity, authority, and learning. He exudes “the unconscious air of one long used to a position of conspicuous power and influence” and “an intellect unclouded by the shadows of many years” (21). His face is that of “a scholar and poet”; it is “marked deeply by pride; pride of birth, of intellect,

of culture” (21). His voice is clearly different from that of the locals, and a boy from the area, Jed Holland, is awestruck by his presence:

The voice was marvelously pure, deep, and musical, and, like the brown eyes, betrayed the real strength of the man, denied by his gray hair and bent form. The tones were as different from the high keyed, slurring speech of the backwoods, as the gentleman himself was unlike any man Jed had ever met. The boy looked at the speaker in wide-eyed wonder; he had a queer feeling that he was in the presence of a superior being. (21-22)

In the novel, good natives are descendants of outsiders. One of them is Old Matt, who says, “Our folks all live back in Illinois. And if I do say so, they are as good stock as you’ll find anywhere” (41). Young Matt is a “young giant”—a “big man [...] with almost superhuman strength” (91, 92). Although Sammy Lane—one of the Shepherd’s mentees—“kn[ows] nothing of the laws and customs of the, so-called, best society,” she is of “good stock” as well (47). Before they moved to the Ozarks, her father was a plantation owner, and her mother was a Southern belle. Her father tells Sammy, “When you get to be a fine lady, you ought to know that you got as good blood as the best of the thoroughbreds” (54). These “good” locals adore, follow, and learn from the transplanted Ozarkers with supposedly superior intellect and cultural tastes.

Like the Asians as seen through the Orientalists’ eyes, Ozarkers of bad stock are weak, crafty, and evil. Wash Gibbs, the leader of the Baldknobbers, is one of them. He is “distinguished by his gigantic form” (85). He and his gang are “lawless” and rowdy men who burst into laughter over vulgar remarks. However, Wash Gibbs—“a bad man” who has “a devilish cunning”—is not a match for Young Matt, who humiliates him in a duel (99, 127).

Interestingly, good natives speak Standard English whereas bad ones speak in heavy rural accents. An example can be found in Chapter 14, where Sammy and Wash Gibbs—a villain romantically interested in her—

have a conversation:

"Howdy, Sammy." Gibbs leaped from the saddle, and, with the bridle rein over his arm, came close to the girl. "Fine evening for a walk."

"Howdy," returned the young woman, coolly, quickening her pace.

"You needn't t' be in such a powerful hurry," growled Wash. "If you've got time t' talk t' that old cuss at th' ranch, you sure got time t' talk t' me."

Sammy turned angrily. "You'd better get back on your mule, and go about your business, Wash Gibbs. When I want you to walk with me, I'll let you know."

"That's alright, honey," exclaimed the other insolently. "I'm a goin' your way just th' same; an' we'll mosey 'long t'gether. I was a goin' home, but I've got business with your paw now."

"Worse thing for Daddy, too," flashed the girl. "I wish you'd stay away from him."

Wash laughed; "Your daddy couldn't keep house 'thout me, nohow. Who was that feller talkin' with you an' th' old man down yonder?"

"There wasn't nobody talkin' to us," replied Sammy shortly. (76-77)

Sammy's speech style may reflect her ongoing education from Dad Howie, but good Ozarkers tend to speak without much accent throughout *The Shepherd of the Hills*. This reveals Wright's perception of the Ozarks as a culturally inferior region. As Appalachian English has been stigmatized as substandard in the minds of some Americans, so the Ozark dialect is represented as undesirable in Wright's novel.

Good People from the Outside: *The Re-Creation of Brian Kent*

Like the two previous novels, *The Re-Creation of Brian Kent* was one of Wright's bestsellers.²⁾ The novel concerns the regeneration of the title character, a bank embezzler who tries to commit suicide in the river. When his attempt fails, his little boat carries him down the raging river until it reaches where Betty Sue, a

retired schoolteacher from Connecticut, lives. When washed ashore, he is found by Judy, a deformed local girl, who contacts Betty Sue. Betty Sue rescues him, helping him reform himself. Soon, he finds his new love, Betty Jo, Betty Sue's stenographer from Cincinnati. Finally, Homer T. Ward, the bank president in Chicago and Betty Sue's former student, decides not to press charges against him and pays back the money for Brian. Brian's wife, whose lavish lifestyle caused him to steal money from the bank, comes to the Ozarks to find him but drowns in the river. Free now, he and Betty Jo are happily married. In this novel, Judy, who loves Brian, and her abusive father are used as cardboard characters who highlight the feel-good story about a group of civilized, refined characters from the outside. The native-born people are largely a caricature of stereotypical Ozarkers—ignorant, violent, and rowdy. To use Said's term, they are Orientalized in their own land. Homer T. Ward is a native Ozarker, but he has been able to educate himself outside the region.

Not surprisingly, the title character of the novel is someone from outside the Ozarks. When Brian comes to the Ozarks as a criminal, he looks like a "wretchedly repulsive creature" (104). Yet, Betty Sue recognizes something noble in him: "The face which looked back from the mirror to the man was, without question, the countenance of a gentleman" (26). Seeing the potential in him to turn his life around, Betty Sue suggests that he settle down as her hired hand. After pondering her advice, he accepts it, beginning life in the Ozarks. Gradually, he regains his masculine charms:

As the days of the glorious Ozark autumn passed, Brian's healthful, outdoor work on the timbered mountain-side brought to the man of the cities a physical grace and beauty he had lacked,—the grace of physical strength and the beauty of clean and rugged health. (133)

Like Dick Falkner in *That Printer of Udell's* and Young Matt in *The Shepherd of the Hills*, he is an ideal white man: strong, charming, and vigorous.

Orientalism in Japan after the Second World War

Said's postcolonial theory of Orientalism is useful in understanding not only Harold Bell Wright's otherization of the Ozarks but also Japan after its defeat by the Allies in 1945. Orientalization and self-Orientalization in Japan are not issues to be discussed indiscreetly. General Douglas MacArthur's General Headquarters (GHQ), established in Tokyo in 1946, was instrumental in orientalizing Japan and its people.³⁾ The GHQ wrote Japan's new constitution based on MacArthur's view that the Japanese were incapable of doing so (Gilbert 30). According to the intelligence appendix of the U.S. Army's Blacklist Operation Order, every Japanese was a potential enemy, unlike obedient natives such as the New Guineans and the pro-American Filipinos (Eto 160-161).

By directing Japanese media, such as newspapers and broadcasts, the GHQ's War Guilt Information Program exerted tremendous influence on the Japanese psyche. Only the Allied point of view was acceptable in postwar Japan, and, feeling embarrassed about their own country's downfall, numerous Japanese felt disheartened. The Shinto Directive made it difficult for public officials to visit shrines, and parts of textbooks that had formed the Japanese identity, such as Japanese mythology, were deleted. Separated from their own traditional culture and Shinto, the Japanese public was invited to seek entertainment from the Western world.

Self-Orientalization was manifested in the behavior of Japanese people, especially in the immediate decades after the war. The public lost their pride and sense of identity connected with their ancestors. Many Japanese underestimated their traditions and tried to imitate Western ways of life. Unsurprisingly, Lee Teng-hui, a Taiwanese politician, was saddened by the self-denial and self-subjugation of Japanese people. In his later year, he wrote that he wanted the Japanese to regain their pride and Bushido which he had loved since his childhood (316).

Meanwhile, Japanese intellectuals continued to make strides without being distracted by the misguided, masochistic view of Japanese history. Their energy burst in a quarter century after the Second World War.

In March 1970, people marveled at the giant Tower of the Sun, called the Jomon Monster, built at the Japan World Exposition, Osaka. The theme of the Expo was to enjoy Western-style development for convenience and economic prosperity. Nevertheless, Taro Okamoto—the creator of the Tower—emphasized the gratitude for nature and the praise of life as inspired by the ancient Jomon pottery of Japan. Okamoto expressed a return to the spirit of ancient Japan and how the path that the Japanese were trying to take at the time could lead to emptiness (“An Interview”).

In November of the same year, Yukio Mishima committed *seppuku*—ritual suicide—after giving a speech, which stressed the spiritual independence of the Japanese, to the Japan Self-Defense Forces personnel. Earlier, in 1969, he had a debate with students at the University of Tokyo. When a student argued, “You can't exceed your limits as a Japanese,” he shot back, saying, “That's fine. I was born a Japanese, and I want to die as a Japanese” (Toyoshima Keisuke Direct). Several months before his *seppuku*, Mishima wrote that he did not feel like exchanging words with the Japanese people who were only wishing material development. Mishima feared that, if things did not change, Japan would disappear soon (Inoue 94-95).

Even after the passing of Yukio Mishima, it is hard to say that the Japanese who profoundly value the Japanese spirit are the majority. This is because the Japanese have not been given a well-balanced education in public settings since the end of the Second World War. The public continues to be led astray by the words of internationalization and globalism, losing sight of the true value of Japan. There are too few true international figures like Inazo Nitobe, who understood Japanese culture correctly while deeply touching foreign cultures.

Still in 2022, Japanese myths are not allowed to appear in Japanese textbooks, and the Japanese continue to be criticized even for singing the national anthem (Gilbert 240). On the other hand, more and more young Japanese people today are fond of the cultures of other Asian countries without worshiping the West. They often eat Chinese, Indian, Korean, and Thai food,

enjoying entertainment, such as K-POP, Bollywood movies, and Chinese idols. If the economic power of a country increases, the spread of that country's culture will spread to the world. As the economic power of the countries of the East increases, it can be expected that the term *self-Orientalization* will become completely a thing of the past, but it is clear from what was written in this essay that it is still in a transitional period and could be a long way to go. The psychology of Orientalization and self-Orientalization is complex in relation to history, especially in a Japanese context.

Conclusion

In his fiction, Wright praises the beauty and restorative nature of the Ozarks; Dick Falkner finds the Ozarks "very beautiful and restful" (Wright, *Printer* 280), and the Shepherd finds healing for his soul in the Ozarks. However, Wright's appreciation does not seem to extend to the native-born people, who, he finds, lack education, cultural refinement, and inspirational leadership. Despite some locals' desire to improve their lot, they do not know how to do it until someone comes from the city and initiates social and spiritual change.

Wright's Orientalist view of the Ozarks can be attributed to his idea of the "law of *inequality*," as expounded in his autobiography *To My Sons* (1934). Saying that he has descended from an illustrious bloodline that originates in County Essex, England, in the early sixteenth century, he expresses his "confidence in good breeding" (28). According to him, some people are "well-born," but others are not. Those who are well-born "[live] in honor and [serve] God and their country" (24). He claims,

Much of the talk about human equality is ill-considered and empty. There is no such thing as equality among human beings or anywhere else. [...] One man is not as good as another, any more than one horse or one dog is as good as another. There are human plugs and mongrels and ill-bred vicious beasts enough, Heaven knows. [...] A gold-mounted harness never yet transformed an ill-bred scrub into a thoroughbred. (24)

Here, Wright's tone is somewhat akin to the Orientalist view that Asians are less than human. The German philosopher Hegel opined that once a European crosses Persia and visits India and China, it is hard to find humans who are like Europeans, the supposed barometer for all human races. In Persia, one can find himself or herself "still somewhat at home, and meets European dispositions, human virtues, and human passions," but in India and China, one "encounters the most repellant characteristics, pervading every single feature of society" (qtd. in Tchen and Yeats 144). The outsiders' superior attitude in Wright's fiction echoes the Orientalist attitude toward the Ozarks, who are unable—and not allowed—to represent themselves.

Said's *Orientalism* focused on the British (broadly European) condescension toward Asians. The attitude is found in the works of Robert Louis Stevenson, Rudyard Kipling, Bram Stoker, Sax Rohmer, and other Orientalists, in which whites feel superior to non-whites. In Wright's novels, so-called cultured, refined, and educated city people move to the Ozarks as saviors for the local whites. In this regard, Wright was a white Orientalist prejudiced against rural whites in the Midwest.

Whereas the Ozarkers were otherized by their fellow nationals based on regional prejudice, postwar Japan is otherized by an occupying force from the West. The conquering force neither recognized the Japanese people's capacity to draft a new constitution nor the importance of traditional Japanese—and by extension, Asian—culture for them. The attitude of "we know better than you do what is best for you" was manifested in the policies the American occupants enforced. As happens in otherized populations in general, many Japanese have accepted their subservient position vis-à-vis their supposedly superior Orientalists.

Notes

- 1) Said was born in Jerusalem when it was part of Mandatory Palestine. After earning his B.A. in English from Princeton University and his M.A. and Ph.D. in English Literature from Harvard University, he taught in the Department of English and Comparative Literature at Columbia University from 1963 to 2003. He died of leukemia at age 67. In addition to *Orientalism*, he authored *Nationalism, Colonialism, and*

Literature: Yeats and Decolonization (1988) and *Culture and Imperialism* (1993), among others.

_____. *To My Sons*. Harper, 1934.

2) Eudora Welty's "Moon Lake"—part of her short story collection set in Mississippi, *The Golden Apples* (1949)—was inspired by *The Re-Creation of Brian Kent* (Gordon 115).

3) During World War II, the anthropologist Ruth Benedict was commissioned by the U.S. government to analyze the spirituality of the Japanese. Benedict had studied under Franz Boas who regarded all cultures as of equal value. (Prior to Boas, anthropologists regarded the Orientals as just inferior.) *The Chrysanthemum and the Sword*, written by Benedict, contains many analyses that even Japanese people can agree on. Through her analysis, the U.S. government came to understand that the Japanese Achilles tendon was an extreme fear of dishonor and shame. As a scholar, Benedict maintains a balanced view of Japan and its people. The GHQ's actions, however, were largely based on Orientalist assumptions about the conquered land.

Works Cited

- Du Bois, W. E. Burghardt. "Strivings of the Negro People." *Atlantic*, Aug. 1897. <https://www.theatlantic.com/magazine/archive/1897/08/strivings-of-the-negro-people/305446/>. Accessed 17 Sept. 2021.
- Eto, Jun. *Closed Space to Use Language*. Tokyo: Bungei Shunju, 1994.
- Gilbert, Kent. *Japanese Still Bound by GHQ's Brainwashing*. Tokyo: PHP, 2017.
- Gordon, Leslie. "Re-Visiting *The Re-Creation of Brian Kent*." *Eudora Welty Review*, vol. 1, Georgia State University, 2009, pp. 115-19, <http://www.jstor.org/stable/24742099>. Accessed 19 Sept. 2021.
- Inoue, Toyoo. *Unfulfilled Promise: Yukio Mishima's Legacy*. Tokyo: Cosmo Books, 2006.
- "An Interview with Taro Okamoto: Art is Explosion!" <https://youtu.be/mS9-fm8sYqo>. Accessed 16 June, 2022.
- Lee, Teng-hui. *A Bibliographical Essay on Bushido: What Noblesse Oblige Is*. Tokyo: Shogakukan, 2006.
- Ketchell, Aaron K. *Holy Hills of the Ozarks: Religion and Tourism in Branson, Missouri*. Johns Hopkins UP, 2007.
- Said, Edward. *Orientalism*. 1978. Vintage, 1979.
- Toyoshima, Keisuke Direct. "Yukio Mishima Versus All-Campus Joint Struggle League." TBS Pictures. 2021. DVD.
- Wright, Harold Bell. *That Printer of Udell's*. 1903. Gretna, LA: Pelican, 2011.
- _____. *The Calling of Dan Matthews*. 1935. *A Harold Bell Wright Trilogy: The Shepherd of the Hills, The Calling of Dan Matthew, God and the Groceryman*. Gretna, LA: Pelican Publishing, 2007. 193-401.
- _____. *The Re-Creation of Brian Kent*. Chicago: The Book Supply Company, 1919.
- _____. *The Shepherd of the Hills. A Harold Bell Wright Trilogy: The Shepherd of the Hills, The Calling of Dan Matthews, God and the Groceryman*. Gretna, LA: Pelican, 2007, pp. 19-191.

定冠詞と不定冠詞の機能と用法の考察

Consideration of the Function and Usage of Definite and Indefinite Articles

ジョン・D・オーエン

John D. Owen

要旨

英語には4つの冠詞、*the*、*a/an*、*some*、 \emptyset （ゼロ冠詞）がある。冠詞は主に名詞の前に置かれ、名詞を修飾する形容詞の働きをする。定冠詞である*the*は、相手にとってその名詞が何を意味するのかがわかるように、名詞の前に置かれる。2つの不定冠詞*a/an*と*some*は、一般的な名詞であるか、あるいは相手がその名詞が指し示すものについて知らない場合に使用される。これらに加えて、名詞が冠詞を必要としない特定の状況もあることから、この場合には限定詞として \emptyset ゼロ冠詞を使用する。本論は、文法的な観点から、英語における冠詞の適切な選択を理解することの限界と、第二言語学習者が冠詞の意味論的思考を理解することの利点を明らかにする。英語の冠詞体系についての意味的重要性を説明するための教材として、9-quadrantモデルを提示している。

Abstract

In English there are four articles: *the*, *a/an*, *some*, \emptyset . Articles are used before nouns and function like adjectives. The definite article *the* is used before a noun to indicate that the identity of the noun is familiar to the listener. The two indefinite articles *a/an*, *some*, are used before a noun that is either generic in context, or its identity is novel (unfamiliar) to the listener. Moreover, there are certain situations in which a noun does not require article modification, signified as \emptyset zero article. This paper explains the limitations of understanding the proper choice of English articles from a grammatical perspective, and it illuminates the benefits for second language learners to consider the semantic meaning of articles. A nine-quadrant model will be presented as a teaching aid to explain the semantic importance of the English article system.

●キーワード：定冠詞 (definite article)／関係節 (relative clause)／機能 (function)

Introduction

In an indiscriminate perusal of academic papers, Berry (1991) revealed, definite articles and indefinite articles occur in discourse with the average frequency of one in every ten words. Furthermore, Berry estimates the frequency of article and determiner choice occurs in normal discourse at the average rate of 1 in every 5 words. These facts make the function of encoding nouns, as either definite or indefinite, the most frequent if not most confusing decision L2 learners incur in their acquisition of English. When taking into account the use of the \emptyset zero article, indefinite article *some*ⁱ⁾ along with the reoccurring necessity of nouns to utilize, quantifiers, demonstratives and possessives (see figure 1), the selection of the proper determiner reveals itself

to be quite daunting. Essentially, L2 learners are

Four categories of determiners:

Articles (*the*, *a*, *an*, \emptyset , *some**)

Quantifiers (*a lot of*, *a few*, *a little*, *many*, *much*, *some*...)

Demonstrative Adjectives (*this*, *that*, *these*, *those*)

Possessive Adjectives (*my*, *your*, *his*....)

(figure 1)

confronted by an article or modifying determiner choice with every noun phrase they encounter.

L2 learners, cognizant of their article inexactitudes, often attempt to ameliorate such deficiencies with reference resources and grammar exercises, frequently associated with contradictory rules contained in the pedagogy. All too often, such endeavors amount to little

more than categorizing nouns for the purpose of encoding them with the correct article. For example, definite articles are used for hotels, restaurants, theaters, cinemas, museums, galleries, buildings, oceans, rivers, bridges, newspapers, etc. While such groupings can be helpful they give a false impression that article choice is a rule-based endeavor. Ultimately such collocations, article assignment based on word categories, are superficial to the actual function of definiteness and indefiniteness. The reality of course is that meaning is communicated through the constituency between an article and the noun it modifies. Article choice allows nouns to acquire relative meaning to the context in which they are used. That is to say, there is either implied relative clause (a familiarity) to nouns encoded with a definite article or no implied relative clause (a novelty) encoded with the use of a definite article. As a point of clarification, in this paper we shall use the term “encoded” to emphasize that there is additional implied meaning represented in article selection, which is discretely familiar between a speaker and a listener.

All too often, while sympathetically correcting article errors, teachers tend to place a low priority on full article acquisition. This likely stems from the fact the article inaccuracies seldom cause messaging errors in a learner’s overall topic or subject matter. What is required, as this paper will attempt to reveal, is a paradigm rethink (so to speak) in the pedagogical approach that teachers pursue. In particular, it is necessary to shift away from syntactic rules-based pedagogies toward a more semantic determination and comprehension approach, where definite articles are seen to encode nouns with familiarity and indefinite articles likewise encode nouns with novelty. The impetus, for a familiar/novel variable determination approach, would be to instill the notion that the primary function of articles is semantic not syntactic. That is to say articles encode nouns with meaning relative to a context existing between the speaker and listener, in both written and oral communication.

Among the multitude of natural languages, the use of articles is more the exception than the rule. (Dryer & Haspelmath 2013). Articles are generally classified as determiners, used to augment a level of shared knowledge between a speaker and listener. In English, the grammatical markings of indefiniteness and definiteness are commonly expressed by the construction of a noun phrase (NP). That is to say, the speaker selects an article to precede a noun, and the two-word constituency signals the NP’s level of novelty or familiarity. Novelty is expressed through indefiniteness, by use of the article *a* (modifying singular countable nouns), the \emptyset zero article (plural and uncountable nouns) or the article *some* (modifying singular countable, plural and uncountable nouns). Familiarity is expressed through definiteness, by use of the article *the* (a constituent of singular countable, plural and uncountable nouns). Moreover, in certain expressions and idiomatic phrases, nouns tend to use no article modification. These colloquial circumstances, which frequently compel the use of \emptyset zero article, require case by case recognition as they appear in discourse. “It seems that the article system in English is a reflex of a universal system of semantic and discourse marking that exists in order for speakers and hearers to sort out reference and to achieve topic continuity in connected discourse” (Young, 1996, 142).

From a pragmatic perspective, operating in broader set of determiners, English articles function much like adjectives, in that they modify the nouns they precede semantically. This function precludes obvious the exception that articles, similar to demonstrative and possessive adjectives, cannot be modified by intensifiers or migrators, or varied in degrees of strength, whereas quantifiers are subject to intensification. Nonetheless, there is something acutely perplexing about the use of determiners in general and articles in particular. Zamparelli (2005) inquires, “If many determiners are actually non-quantificational, and non-quantification determiners are treated as predicate modifiers, why are they so different from normal adjectives” (933). Unlike so-called “normal adjectives,” which offer the speaker’s

perspective, concerning the intrinsic qualities of persons, places and things, the determination of articles is discourse dependent—contextually derived. The choice of articles is frequently contingent on the relationship of speaker and listener. Explicitly, in English discourse “the article system is employed for the expression of definiteness and specificity and is linked to such pragmatic notions as shared assumptions between discourse participants about their knowledge of and familiarity with a referent” (Diez-Bedmar and Papp 2008 417). In other words, definiteness is inferred only if there is sufficiently shared information between the speaker and listener (an implied relative clause understood by each interlocutor). The identity of nouns, in respect to familiarity or novelty, can be seen as conditional in terms of their exophoric context (situational or generic shared knowledge understood outside the text or conversation) or their endophoric context (shared knowledge originated within the text or conversation). In conversation, endophoric contexts are almost exclusively derived from an anaphoric reference (prior mention). However, it should be noted that in works of literature cataphoric references (later mention) are occasionally used as literary devices.

“The essential function of definiteness is to signal that the intended referent of an NP is a referent with which the audience is already familiar at the current stage of the conversation” (Heim 1982 194). Definiteness is always derived one of two aspects of discoursal context, either exophoric or endophoric familiarity. In contrast, a noun phrase can be “considered as ‘indefinite’ if there is nothing in the discourse or the situation or our generic knowledge of the world that identifies it for us” (Downing and Locke, 2002, 418). Where definiteness signals what is familiar, between speaker and listener, indefiniteness assumes what is novel. For the instructor of English L2, conveying this essential semantical function should be a fundamental teaching point, in respect to article selection. Central to this paper is the notion that L2 learners need to develop an intuitive understanding of the meaning and semantical function of the definite/indefinite article system.

Discussion

The use of indefinite or definite articles in many languages can be viewed, from a syntactical perspective, as non-essential function words appearing in sentences. While articles may add meaning, a sentence can still function grammatically if they are removed. Let’s consider the following.

- (a) *I heard a dog barking.*
- (b) *I heard the dog barking.*
- (c) *I heard dog barking.**
- (d) *I heard dogs barking.*

In sentence (a) dog is a constituent in a NP encoded with an indefinite article as “a dog”, which conveys the meaning of a novel dog. In sentence (b) dog is encoded as “the dog”, invoking a definite article, thus transmitting the sense of a familiar dog. While sentence (c), seems ungrammatical, it nonetheless contains a subject and a functioning predicate. This becomes evidently clear by simply pluralizing the objective noun, as in sentence (d), thereby restoring the grammaticality of the sentence. We can thus conclude that articles are semantically useful but not syntactically essential to the function of a sentence.

To reiterate, when we speak or write, we often refer to things that were mentioned in prior discourse, we term such excerpts anaphoric references, meaning something, mentioned previous is reoccurring. English L2 learners are often taught as a general rule that the indefinite *a/an* or the \emptyset zero article should be employed when using a noun for the first time, and the definite *the* is required every time thereafter the first mention. The logic behind such anaphoric references is obvious. A new topic mentioned for the first time is likely to be novel to the listener. Thus, presumably it requires indefinite encoding. Moreover, if a topic has been previously mentioned, its second mention, and thus all subsequent mentions, will be familiar to the listener. Therefore, it is no longer novel and should be encoded as definite. Let’s observe this sort of rule-based example (first mention indefinite articles followed by second

mention definite articles):

1 (a.) *I saw a great movie last night. The movie was about gladiators.*

(b.) *I really love bitter coffee. The coffee I bought this morning was especially bitter.*

The problem with such rule-based examples is that they obscure the functional purpose of article encoding. Moreover, such rules can easily be violated (as below with a second mention indefinite article):

2 (a.) *I saw the movie Gladiator last night. It was a great movie.*

(b.) *The coffee I bought this morning was especially bitter. I really love bitter coffee.*

Sentences 1 (a.) and (b.) comply with the general rule that first mention nouns should be encoded with indefinite articles and second mention nouns require definite encoding. However, sentences 2 (a.) and (b.) invert the encoding order, without any significant change in meaning or coherence. These examples show, while a rule-based article selection frequently gives the L2 learner the correct coding, reliance on rules can unfortunately undermine the actual purpose of indefinite/definite article selection. That is to say indefinite/definite article selection is meant to disseminate semantical information, the context particular nouns being modified, rather than facilitate syntactical functions in sentence production.

Semantical transference in article selection

Indefinite articles *a/an* and *some*:

The indefinite article *a/an* is used to encode singular count nouns as either generic or specific and novel to the speaker and or the listener.

Generic/novel singular encoding:
A dog is a carnivorous mammal.

Non-specific/novel singular encoding:

I heard a dog barking last night

The indefinite article (*some*) is used to encode non-specific (as opposed to generic) plural or uncountable nouns that are novel to the speaker and or the listener.

Non-specific/novel plural/uncount:

Would you care for some coffee?

Non-specific/novel count/plural:

Would you care for some apples?

Definite article *the*:

The definite article *the* is used to encode singular or plural count nouns or uncount nouns, as either generic or specific nouns familiar to the speaker and or the listener.

Generic singular/count:

The automobile changed city planning forever.

Specific/familiar singular/count:

The window is open.

Specific/familiar uncount:

The traffic in Los Angeles is always bad.

Specific/familiar plural/count:

The apples I bought yesterday are too hard to eat.

Zero article (\emptyset):

The zero article (\emptyset) is used to encode plural count nouns and uncount nouns to express generic meaning.

Generic plural/count:

Dogs make good pets.

Generic uncount:

Happiness makes one healthy mind and body.

Four steps in determining the correct article

Step 1. Determine if a noun has a generic, non-specific or specific identity

A noun is classified as a generic noun when its reference is only a member associated to a category without any reference of it as a potentially identifiable

specific member of that category. For example, the statement dogs are barking animals makes no reference to actual dogs. A noun is classified as a specific noun when it references a potentially identifiable specific referent. For example, the statement I hear dogs barking refers to actual dogs (whether or currently identifiable or not) that can be potentially identified as specific dogs. Let's consider the following examples:

Generic identity:

Giraffes are strange looking animals.

A giraffe is strange looking animal.

The giraffe is strange looking animal.

Non-specific identity:

A giraffe escaped from the zoo.

Specific identity:

The giraffe that escaped was captured.

Step 2. Determine if a noun is countable or uncountable

For the purposes of encoding a noun with the correct article, it is first important to make a grammatical determination as to whether the noun is capable of being counted. Nouns like milk or cheese cannot be counted, only measured by volume or weight. Furthermore, only nouns that are actually capable of being counted, without the requisite use of a partitive structure, are considered countable nouns. Nouns like bread are uncountable nouns, quantities that cannot be counted without the use of partitive structures like slices or loaves. Let's consider the following examples:

Countable nouns:

I would like to have a fried egg and a slice of cheese on a piece of toast.

Uncountable nouns:

I would like to have ham and cheese on toast.

Uncountable nouns:

Milk spilled on the floor.

Uncountable nouns:

Some milk spilled on the floor.

Step 3. If a noun is countable it must be enumerated as singular or plural

Countable nouns need to be enumerated as either singular or plural. Singular countable nouns can be encoded with either the indefinite article *a* or \emptyset zero article. As seen above, uncountable nouns can never be identified as plural, and the can only be encoded with the indefinite \emptyset zero article or the indefinite article *some*. Plural nouns can also be encoded with the indefinite article *some*, as well as the definite article (*the*). Furthermore, enumeration is not a fixed property but rather singularity or plurality can be subject to the partitive structure of a noun's context. For example, if we are speaking of spilt *milk*, the spillage may consist of one *drop* (singular) or two or more *drops* (plural) *of milk*. Though milk in its own essence is a uncountable noun, the word *drop* in this context is a countable noun because we can count the partitive structure *drops*. Therefore, according to this rule as it is applied to countable nouns, the word *drop* can be encoded with the indefinite article *a* or definite article *the*, and its plural from drops can be encoded with the with the indefinite \emptyset zero article or the indefinite article *some* and definite article *the*. Let's consider the following examples:

Singular: *A drop of milk spilled on the floor.*

Plural: *Drops of milk spilled on the floor.* (\emptyset)

Plural: *Some drops of milk spilled on the floor.*

Plural: *The drops of milk spilled on the floor.*

Step 4 Determine listener's knowledge of a noun familiar (implied relative clauses) or novel

Encoding a noun with either a definite or indefinite article requires a determination about the listener's knowledge of the specific referent. The definite article *the* conveys that there is an implied relative clause about the listener's knowledge, in respect to the specific referent noun. That is to say an implication exists in the mind of the speaker that the listener has knowledge of the specific referent noun. Whereas, the indefinite articles *a/an*, *some*, \emptyset convey that the listener has no prior knowledge of the referent noun—the referent noun is novel to the listener.

Implied relative clauses:

Use of the definite article *the* with any constituent (whether singular or plural, count or uncount) implies the specific identity of the noun is familiar to the listener. Let's consider the following examples:

Definite singular count noun:

The car stopped on the highway.

Definite plural count noun:

The cars stopped on the highway.

Definite uncount noun:

The traffic stopped on the highway.

An implied relative clause familiar to the speaker and listener is implicated by the use of the definite article *the* above. Let's consider the possible implications of each sentence above.

The car stopped on the highway.

This sentence encodes an implication that this specific car is familiar or possibly owned by either the speaker or the listener or both. Furthermore, the sentence carries an idiomatic implication—the car broke down.

The cars stopped on the highway.

This sentence implies multiple or many specific cars, familiar or perhaps seen by either the speaker, the listener or both, stopped.

The traffic stopped on the highway.

This sentence implies a collective, group of many specific cars, familiar or perhaps seen by either the speaker, the listener or both, stopped.

No implied relative clauses:

Use of the indefinite article *a/an*, with any singular countable noun implies the non-specific identity of the noun is novel to the listener. Let's consider the following example:

Indefinite singular count noun:

A car stopped on the highway.

Use of the indefinite article *some* with any singular/plural countable noun or any uncountable noun implies a non-specific identity of a noun novel to the listener. Let's consider the following examples:

Indefinite singular count noun:

Some car stopped on the highway.

Indefinite plural count noun:

Some cars stopped on the highway.

Indefinite uncount noun:

Some traffic stopped on the highway.

Use of the indefinite zero article \emptyset with any plural countable noun or any uncountable noun implies a non-specific identity of the noun novel to the listener. Let's consider the following examples:

Indefinite plural count noun:

Cars stopped on the highway.

Indefinite uncount noun:

Traffic stopped on the highway.

Genericity and Specificity

While Japanese has no article system, it is nonetheless possible to differentiate between the concepts of genericity and specificity with a divergence in topic markedness and nominative markedness (Kuroda, 1992). Let's consider syntactic parsing of the sentences below, which demonstrates the emergence of generic (Japanese syntax does differentiate between generic and non-specific) and specific referents.

- (1) Topic marker [は] *-wa*

犬は吠える。

inu-wa hoeru.

[_N Dog _{TM} *-wa*] _V bark

A dog barks. / Dogs bark.

- (2) Nominative marker [が] *-ga*

犬が吠える。

inu-ga hoeru.

[_N Dog/_{NM} -ga] v bark

The dog barks. / The dogs bark. / *My dog(s) bark(s).

The constituency of the bare noun dog (*inu*) and the topic marker *-wa* [_N Dog _{TM} -*wa*] produces a generic referent to dog, as a category of mammals (*canis familiaris*). Thus, the English equivalent of *inu-wa hoeru* would be a generic or a categorical description of “dogs” distinct from other animals. Furthermore, because dog can be pluralized in English, as opposed the Japanese noun *inu* (dog), which is uncountable, the English translation can appear in either generic singular (a dog barks) or generic plural (dogs bark). Sentence (2) is a bare noun with the nominative marker *-ga* [_N Dog/_{NM} -ga], which denotes a definite reference to a specific dog. Once again, sentence (2) like (1) can refer to one or more than one dogs depending on the context.

Thus far, generic nouns and specific nouns do not appear to differ dramatically, between English and Japanese. As we have just noted, the Japanese topic marker *-wa* references generic (*non-specific) nouns, in that all referent generic nouns by definition are not specific nouns, while the nominative marker *-ga* refers to a specific noun. However, as we shall observe, the property of English nouns, distinguished as either countable or uncountable, greatly confuses the matter. Whereas, in Japanese we have two categories of nouns, generic and specific, in English there emerges at least three categories. We can broadly classify these categories as generic, non-specific and specific. For this study genericity shall be defined as the grouping of nouns into categorical classes consisting of both abstract and concrete referents. Non-specificity shall be defined as nouns whose referent is a novel variable (between the speaker and listener). Specificity shall be defined as nouns whose referent is a familiar variable (between the speaker and listener).

Kind-Oriented v. Object-Oriented Nouns

Unfortunately, “genericity is not a uniform concept”

(Krifka 122). There are in fact two distinct phenomena associated with nouns that make the classification of genericity awkward. Krifka refers to these observable modes as *kind-oriented* and *standard object-oriented*. The *kind-oriented mode* refers to the genus of a noun's grouping in a class or classification.

We can view the generic *kind-oriented* noun a semantic notion, defined by its ontological status. Whereas, the *standard object-oriented mode* embodies the “general property” of the noun, in terms of a syntactic notion. It is important to note that these types of generic NPs can function not only as a subject, but also as objects of a verb. Thus, they are more difficult to identify as generic, than abstract NPs, which contextually are in the subject position of a sentence. This is illustrated below: In sentence (1) the NP “the horse” (a classification of animal) operates as the subject of the sentence. However, in sentence (2) the NP “the horse” is an object nested in the predicate.

- (1) The horse is a four-legged mammal.
- (2) Man has long used the horse for transportation.

Understanding the distinction of between modes of genericity requires English L2 learners to develop intuitions, in regards to the semantical and syntactical notion of NPs. This is perhaps more of an acquirable skill than a teachable one. Nonetheless, L2 teachers need to consider ways of developing such intuitions. A nine-quadrant model is presented to assist with this task.

The Nine-quadrant Model

As observed, there are myriad criteria that are simultaneously coordinated into each context, from which an article selection is derived. It would appear that understanding context, as opposed to mere grammar rules, is ultimately the most important factor (and perhaps greatest stumbling block) in determining the constituent article for encoding nouns. Because the definite article *the* infers that there is an unspoken or implied relative clause associated with the noun, .

understanding implied relative clauses can either allow the L2 learner to clarify or constrain the nouns specific identity. Let's consider how L2 learners may attempt to understand the semantic meanings associated with such implied relative clauses. As we shall observe, L2 learners need to focus not so much grammatical rules, though initially they may prove beneficial, but rather develop intuitions about the semantical transfers. That is to say, there is implied knowledge that is encoded in article selection. A number of strategies have been devised to provide a visible charting of how such semantical contexts are orchestrated. The most prominent among these stems from the research of Bickerton (1981), Huebner (1983), Masters (1990) and Gundrel, Hedberg and Zacharski (1993). These studies attempted to develop non-grammatical systematic

approaches for the purpose of identifying the semantical underpinnings of English articles. Bickerton, subsequently adopted and elaborated by Huebner, developed a "semantic wheel" which offered a visual representation to explain why English speakers choose one article and not another. Its primary function was to show the conditions in which nouns can be encoded as a [+/- Special Referent] and the semantic transfers of what is [+/- Familiar to the Listener]. Likewise, Masters, and consequently Gundrel, Hedberg and Zacharski, developed binary hierarchical charts to distinguish the determination of definiteness from indefiniteness. All four of studies are given acknowledged deference in the development of the Nine Quadrant Model (see figure 2).

<div> <div>名詞のタイプ</div> <div>Noun Types</div> </div> <div> <div>参照例</div> <div>Reference</div> </div>	Generic Categorical Description 総称名詞	Non-specific novel variable 聞き手の知らない名詞	Specific familiar variable 聞き手の知っている名詞
<div>Plural-countable noun</div> <div>複数・可算名詞</div> <div>Uncountable noun</div> <div>不可算名詞</div>	<div>1</div> <div>∅</div> <div>All constituents (full constituency) of a category</div>	<div>2</div> <div>∅</div> <div>some</div> <div>Random and unknown</div>	<div>3</div> <div>the</div>
<div>Singular-countable noun</div> <div>単数・可算名詞</div>	<div>4</div> <div>a/an</div> <div>Each constituent of a category</div> <div>the</div> <div>The whole category</div>	<div>5</div> <div>a/an</div> <div>some</div> <div>Random and unknown</div>	<div>6</div> <div>the</div>
<div>Proper noun</div> <div>名詞</div>	<div>7</div> <div>a/an</div> <div>Exemplar reference</div>	<div>8</div> <div>∅</div> <div>Standard use</div> <div>a/an</div> <div>Rhetorical reference</div>	<div>9</div> <div>∅</div> <div>Standard use</div> <div>the</div> <div>Special emphasis</div>

Figure 2. Nine Quadrant Model for Articles

Using the Model

Let us observe the juxtaposition of noun specificity and countability, on *x* and *y* axes, respectively. Suppose we are presented with following utterance: "dogs bark." As listeners, what does this expression convey to us? With no additional context, the only thing that can be

extrapolated categorically from "dogs bark" is that it is a statement about the nature of dogs, as opposed to other animals, such as "cats purr" or "birds sing." Clearly, this is a generic statement about dogs. This conclusion is made all-the-more-clear if reduce the utterance to just "dogs." The point being, all nouns, if

void of any context, can be classified as generic. Given context is what determines a noun's level of specificity or non-specificity. If we want to plot the utterance, "dogs bark," into one of the quadrants in the model above: we can observe the referent, "dogs," is a plural-countable noun, and it has no constituent article, thus it is contextually generic [plural, Ø, generic]. The referent "dogs," in the utterance "dogs bark," can therefore be slotted into quadrant [1] of the model, where the x and y axes intersect. Quadrant [1] is a co-occurrence of a generically categorical description and plural-countable noun. Conversely, if we allow for additional context, we can alter the level specificity. Consider the utterance "dogs are barking." We are no longer talking about an abstract generic description of a particular animal, the nature of dogs as a species, but rather the actions of supposedly actual dogs. Somewhere, there are supposedly physical dogs barking, in a supposedly physical location (e.g. "dogs are barking in the street" or "dogs are barking in the park"). The context has shifted from generic to non-specific (actual dogs barking, whose identity is neither detailed nor exact). If we want to plot the utterance, "dogs are barking," into the model, we can observe the referent, "dogs," is a plural-countable noun, has no constituent article and is contextually a novel variable [plural, Ø, non-specific]. Thus, the given referent "dogs" in the utterance "dogs are barking," can be slotted into quadrant [2], where the x and y axes intersect—a co-occurrence of a non-specific, novel variable, plural-countable noun. Finally, let's observe the same referent, "dogs," when contextualized with maximum specificity. Consider of the utterance "the dogs are barking." Once again, the context of the utterance supposes actual dogs are barking in a supposedly physical location. However, use of the definite article in NP "the dogs" marks referent's identity with a sense of particularity, uniqueness shared between listener and speaker. The constituency, of definite article *the* and noun "dogs," indicates that there is familiarity, in respect to the dogs' identity—anaphoric or shared knowledge (e.g. they are our dogs, the neighbor's dogs or dogs contextual understood from a prior mention. If we want to plot the utterance, "the

dogs are barking," into the model, we can observe the referent NP, "the dogs," is a constituency between a plural countable-noun encoded with definiteness and contextualized as a familiar variable [plural, *the*, specific]. Thus, the referent "the dogs," in the utterance "the dogs are barking," can be slotted into quadrant [3], where the x and y axes intersect: a specific, familiar variable, plural countable-noun. The variations of specificity attributed to the referent "dogs" [plural-countable noun], detailed above can be summarize in the following notation:

Quadrant 1. dogs bark :

[plural, countable, generic]

Quadrant 2. dogs are barking*:

[plural, countable, novel , non-specific]

Quadrant 3. the dogs are barking:

[plural, countable, familiar, specific]

*For this example, we used the Ø article. However, for plural and uncountable nouns, *some* is often a preferable article choice, given that it is the constituent of a novel variable, non-specific referent. The article *some* for singular nouns connotes a referent that is more randomly novel, compared to NPs that use the article *a* as their constituent.

Moving horizontally on the x axis, from quadrants [1] to [3], we can track a noun's semantical changes, least to greatest, in contextual specificity. Each quadrant informs us of the article that is required in order to signify the intended level of specificity, for the given noun class on the y axis (*Noun Types*). In the example above, we tracked the plural-countable noun "dogs" as our referent. However, if we select an uncountable noun, the model clearly illustrates the relationship between plural-countable nouns and uncountable nouns. As classes of nouns, they function quiet differently, however, as noun types, in respect to levels of specificity, they assume identical constituent articles. From left to right, on the x axis, from quadrants [1] to [3], we can observe the semantical changes that occur in uncountable nouns, where they mirror plural-countable nouns, in contextual specificity (least to greatest). If we plot uncountable nouns into the model, quadrants [1] to [3], they can be summarized in the

following notation:

Quadrant 1. yogurt is a dairy food :

[uncountable, Ø, generic]

Quadrant 2. let's have some yogurt* :

[uncountable, novel, non-specific]

Quadrant 3. the yogurt landed on the floor :

[uncountable, familiar, specific]

*As noted above some is often a preferable article choice for plural and uncountable nouns. Compare the two sentences: (a). *Let's have some yogurt.* (b). *Let's have yogurt.* The former seems preferable to the latter, though both (a) and (b) are acceptable.

Equally, moving vertically, on the *y* axis, the model can tell us which article is required for the given implied level of specificity, for each noun class on the *y* axis. Let's observe the intersection of non-specific, novel variables, referents on the *x* axis in quadrants [2], [5] and [8] on the *y* axis. We can plot co-occurrences of uncountable or plural nouns, singular countable nouns and proper nouns, respectively on the *y* axis:

Quadrant 2. would you like some donuts* :

[plural, countable, novel, non-specific]

Quadrant 2. would you like some coffee* :

[uncountable, novel, non-specific]

Quadrant 5. would you like a donut :

[singular, countable, novel non-specific]

Quadrant 8. a Mr. Jones is waiting for you :

[proper noun, variable, non-specific,
rhetorical]

Methodology

This model constitutes an effort to visually identify the familiar and novel co-occurrence of cross-sectional variables produced in a discursive context. While the examples given are certainly not exhaustive, they should be viewed as an attempt to curtail the more salient features of a noun in a given context. From the L2 learner's perspective, we will assume a context and attempt to express an implied relative clause where possible.

Students are instructed to first fill in the blank space provided in each sentence, with a selected article: *a/an, the, some, Ø*. Then students are asked to give the context of the encoded noun phrase they have completed (e.g. quadrant 1: *sing. countable / novel*). Students should try to identify the quadrant number in which the context materializes on the *x* and *y* axis. The ultimate goal is for students to develop an intuition about their article selection. Students should be encouraged to speculate the implied relative clause, if one exists, between the speaker and listener. First, let's consider the possible varying contexts for the article selected, in the example (below). Then observe in solution 1 and 2 the expressed semantic implications provided.

Example: This morning _____ car broke down on the highway.

Solution 1: This morning a car broke down on the highway.

singular countable / novel / non-specific / intersects with quadrant 5 / there is no implied relative clause

Solution 2: This morning the car broke down on the highway.

sing. count. / familiar / specific / intersects with quadrant 6 / implied relative clause: a specific car, perhaps owned by the speaker and or the listener

After students become aware that answers can vary, and that there is correlation between article selection and the implied answer, additional exercises should be assigned. The teacher should try to develop examples where article selection can vary as often as reasonably possible, in order to emphasize that meaning is encoded by the article they select. Distinguishing

noun phrases from expressions and idiomatic phrases present a particular problem, when trying to acquire articles. However, once students recognize the function of articles in noun phrases, it is hopeful students will be able to flush out the special use Ø for idioms and particular expressions, as they arise. Let's view some additional exercises:

Exercises

1. It is hard to find Ø water in the desert.

uncountable / novel / non-specific / intersects with quadrant 2 / no implied relative clause

2. She took a breath and jumped into the water.

uncountable / familiar / specific / intersects with quadrant 3 / implied relative clause: perhaps a swimming pool familiar the speaker and listener

- (3) Would you like some water?

uncountable / novel / specific / intersects with quadrant 2 / no implied relative clause

- 4a. I don't like sleeping on a bed.

sing. count. / generic / intersects with quadrant 4 / no implied relative clause / it could be could be any or all beds

- 4b. I carried our baby to the bed.

sing. countable / familiar / specific / intersects with quadrant 6 / implied relative clause: a bed owned by the speaker

- 4c. I went Ø to bed late last night.

sing. countable / expression* went to sleep

* Expressions like 4c should be compared to noun phrases like 4a and 4b.

- 5a. I'm going to the school.

sing. countable / familiar / specific / intersects with quadrant 6 / implied relative clause: commuting to a location

- 5b. I'm going to Ø school.

sing. countable / expression* studying or commuting

* Expressions like 5b should be compared to noun phrases like 5a.

- 6a. The guard works in a prison.

sing. countable / novel / non-specific / intersects with quadrant 6 / implied relative clause: in a physical location (prison)

6b. The convict is in Ø prison for life.

sing. countable / expression* serving time, locked up, imprisoned or confined.

* Expressions like 6b should be compared to noun phrases like 6a.

7. Excuse me, a Mr. Jones is waiting in the lobby for you. .

Proper noun / novel / non-specific / intersects with quadrant 8 / an unknown person

8. Excuse me, Ø Mr. Jones is waiting in the lobby for you.

Proper noun / familiar / specific / intersects with quadrant 9 / a (likely) known person

9a. Mars is the red planet.

sing. countable / familiar / specific / intersects with quadrant 6 / implied relative clause: the red planet is a nickname for Mars

9b. Mars is a red planet.

sing. countable / novel / non-specific / intersects with quadrant 6 comparisons between sentences like 9a. and 9b make a good teaching point for the semantic encoding of nouns for a given context

10a. He's talking to Ø Bill Gates.

Proper noun / familiar / specific / intersects with quadrant 9 / a (likely) known person

10b. Is he talking to the Bill Gates?

Proper noun / familiar / specific / intersects with quadrant 9 / special emphasis

10c. No, it's popular name I knew a Bill Gates in high

Proper noun / novel / non-specific / intersects with quadrant 8 / an unknown person again juxtaposing sentences like 10a, 10b and 10c make a good teaching point to show semantic encoding of nouns for a given context

Conclusion

English articles, from a grammatical perspective, often appear enigmatic to L2 learners. Moreover, from the standpoint of teachers, the perpetual breaching of rules exposes further heights of complexity to tangible solutions. What emerges from the simple morphology of English articles is a system easy to explain, but frustratingly difficult for students to master. This difficulty is compounded for L2 learners whose L1 does not incorporate an article system, or whose L1 utilizes a definite/indefinite coding format vastly distinct from English. While rule-based instruction can benefit students to navigate difficult areas of article usage, there appears to be a diminishing return, which at some

point the voluminous rules can become overwhelming. This paper has suggested that in part the solution may be found not in pursuing grammatical solutions, but rather developing semantical intuitions. Attention to these aspects of article acquisition may serve more helpful to students than simply trying to apply rule-based prescriptions. We also acknowledge the enormity of this task requires more research, and it demands further developments to assist L2 learners acquire an accurate understanding of English articles.

References

- Bayley R. & Preston D. R. (Eds.), Second language acquisition and linguistic variation (pp. 135-175).
- Berry, R. (1991) Re-articulating the article. *ELT Journal*, 45: (3): p. 252-259.
- Bickerton, D. (1981). *Roots of Language*. Ann Arbor, MA: Karoma Publishers.
- Birdsong, D., & Vanhove, J. (2016). 9 Age of Second-Language Acquisition: Critical Periods and Social Concerns. *Bilingualism Across the Lifespan: Factors Moderating Language Proficiency*.
- Chesterman, A. (1991). On definiteness: A study with special reference to English and Finnish. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- DeKeyser, R. M. (2013). Age effects in second language learning: Stepping stones toward better understanding. *Language Learning*, 63, 52-67.
- Diez-Bedmar, M. B., & Papp, S. (2008). The use of the English article system by Chinese and Spanish learners. In G. Gilquin, M. B. Diez-Bedmar, & S. Papp (Eds.), *Linking up Contrastive and Learner Corpus Research* (pp.147-175). New York: Cambridge University Press.
- Downing, E. and P. Locke (2002), *A University Course in English*. Second edition. London: Routledge.
- Dryer, M. S. & Haspelmath, M. (eds.) (2013). *The world atlas of language structures online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology
- Gundel, Jeanette K., Nancy Hedberg, Ron Zacharski. (1993). Cognitive status and the form of referring expressions in discourse. *Language* 69: p.274-307.
- Heim, I. R. (1982), *The semantics of definite and indefinite NPs*. Ph.D. dissertation, Department of Linguistics, University of Massachusetts, Amherst, MA
- Huebner, T. (1983). *A longitudinal analysis of acquisition of English*. Ann Arbor: Karoma Press.
- Ionin et al. (2009). Acquisition of article semantics by child and adult L2 English learners. *Bilingualism: Language and Cognition*, 12(3), p.337-361.
- Master, P. (1990). Teaching the English Articles as a Binary System. *TESOL Quarterly*, 24(3), p.461-478.
- Krifka, M., Carlson, G. N., & Pelletier, F. J. (eds.) (1995). *The generic book*. Chicago: The University of Chicago Press
- Kuroda, S.-Y. (1992). *Japanese syntax and semantics: Collected papers*. Dordrecht: Kluwer. DOI: <https://doi.org/10.1007/978-94-011-2789-9>
- Snape, N. (2018). Definite generic vs. definite unique in L2 acquisition. *Journal of the European Second Language Association*,
- Young, R. (1996). Form-function relations in articles in English interlanguage.
- Zamparelli, R. (2005), 'The structure of (in)definiteness', *Lingua*, 115: 915-936

Notes

- i) *Some* is generally considered a quantifier in prescriptive grammars and the zero article \emptyset , rather than the indefinite article *a*, is used with plurals and mass nouns. However, *some* can be used descriptively as an indefinite plural article.

大学生と読書

—読書環境の変化 3—

University Students and Reading

—Changes in Reading Environment Part 3—

吉田 昭子

YOSHIDA Akiko

要旨

新型コロナウイルス感染症の感染拡大が始まってから、3年目を迎えようとしている。全国大学生生活協同組合連合会の「学生生活実態調査」によれば、コロナ禍の2020年に1日の読書時間がゼロ分の学生はいったん減少したが、2021年度の調査で再び増加に転じている。およそ半分の大学生が1日の読書時間がゼロ分で、読書をする学生としない学生の二極化が依然として存在している。本稿では大学生を対象に読書の楽しさ、読書時間の有無、読書に関わる交流、好きな作品、好きな作家、繰り返して読む本、読書のメリットについてのアンケートを実施し、読書を生活の中にどのように位置づけるかをとらえ直すことを試みた。読書のメリットについては、学生の自由記述をまとめたところ、次の4つに分類できた。①勉強・知識、②想像力・体験、③時間の過ごし方・楽しみ、④コミュニケーション・交流である。繰り返して読む本に関する調査では、自分にとって大切な1冊に出会い、見つけた体験を持つ学生は、作品の感想を共有し合うコミュニケーションを通して「味わう」までに高める力を獲得している。これにより、今後の研究の重要な基盤を得ることができた。

●キーワード：読書（reading）／大学生（university students）／読書の楽しみ（pleasure of reading）

I. コロナ禍の大学生の読書状況

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の発生が伝えられたのは、2019年12月のことであった。世界的な規模の感染拡大が続き、不要不急の外出自粛や三密を避けて感染拡大を防止することが求められた。この3年間に、新規感染者の増大と減少が繰り返されてきた。2022年11月に入り、第7波が下げ止まらない中で、それを上回る第8波流行の心配が指摘されている¹⁾。

新型コロナウイルス感染症の拡大当初は、急遽オンライン授業の方法を検討し、実施した大学が多く見られた。その後、地域による感染状況を考慮し、対面授業とオンライン授業を合わせたハイブリッド形式の授業が実施された。2022年度に入り、感染拡大の防止に充分配慮しながら、多くの大学が各大学の授業実施方針に沿って授業を展開している²⁾。3年間も続くと、非日常ではなく日常化している気配も感じる。

全国大学生生活協同組合連合会が毎年10月から11月に実施している「学生生活実態調査」によると、大学生の読書状況は次のように推移している。新型コロナウイルス感染拡大以前の2019年に実施された第55回調査³⁾では、

1日の読書時間が0分の学生は48.1%だったが、コロナ禍の2020年に実施した第56回調査⁴⁾は47.2%に減少した。しかし、ワクチン等の新型コロナウイルスに対する対応が整い始めた2021年の第57回調査⁵⁾では、読書時間0分の学生は再び増加し、50.5%になった。これは、半分の学生は1日の読書時間がないことを示している。

1日の平均読書時間は、第55回（2019年）が30分、第56回（2020年）が32.1分、第57回（2021年）が28.4分である。つまり、コロナ禍の2020年に一旦増加した読書時間は、再び減少しているのである。

筆者が授業を担当している東京都内の私立大学生2年生から4年生の64名の学生に、2022年7月の時点で、コロナ禍に読書時間の変化があったか否かを質問紙を用いて調査を行った。結果は次のようであった。コロナ禍で、①読書時間が増加した24人（37.5%）、②読書時間に特に変化はない33人（51.6%）、③読書時間が減少した7名（10.9%）であった。そして、変化はないという回答が多くを占めた。

2020年はコロナ禍の外出自粛要請を受けて自分で使える空き時間が増え、一旦読書時間が増えて1か月に1冊

も本を読まない学生の割合も減少した。自粛が解除されて社会が次第に日常を取り戻す中で、対面形式の授業が増加すると、1日の読書時間が0分の学生も再び増え始めたと推測できるのだろうか。コロナウイルスで実際にどのような状況が生じたのかは明らかにはなっていない。新型コロナウイルス感染症の収束が見込めない状況で、コロナ禍の大学生の読書状況について実際に調査してみる必要があると考えた。

そこで、ここでは筆者が担当する文化学園大学の授業を履修している学生に対して、読書の楽しさ、好きな作品、好きな作家、よく繰り返して読んでいる本等について行ったアンケートを基にコロナ禍の学生の読書の現状を明らかにする。

Ⅱ. 読書状況についてのアンケート結果

2. 1 アンケートの対象と実施時期

文化学園大学では、2022年4月から対面形式を中心とした授業を展開しており、新型コロナウイルスに感染したり、濃厚接触者として対面授業の受講が難しい学生の場合は、ハイブリッド授業を行っている。アンケートは後期授業の初め、筆者が担当する10月の授業で実施した。

筆者が担当する文化学園大学国際学部の後期授業の中で、日本語文章作成演習Ⅱを履修している大学1年生51名と司書課程の授業を履修している2年次から4年次の学生のうちの26名、合計77名を対象として質問紙によるアンケートを実施した。

2. 2 アンケートの質問内容と選択肢

読書に関するアンケートの質問内容と選択肢は次のとおりである。問1から問6は選択肢から回答させ、問7から問10は自由記述の形式をとった。

問1 読書は楽しいか

1. 楽しい 2. どちらかという楽しい 3. どちらかという楽しくない 4. 楽しくない

問2 大学生になってから、読書をする時間はあるか

1. ある 2. ときどきある 3. あまりない 4. ない

問3 子どもの頃（幼稚園や小学校の頃）には読書をする時間はあったか

1. ある 2. ときどきある 3. あまりない 4. ない

問4 本の話を読かすことはあるか

1. ある 2. ときどきある 3. あまりない 4. ない

問5 誰と本の話をするか（複数選択可）

1. 友達 2. 家族 3. そのほか（ ） 4. 誰もいない

問6 誰かに本を勧めたり、本を貸すたりすることはあるか（複数選択）

1. ある 2. ときどきある 3. あまりない 4. ない

問7 他の人と本の話をするときは、どんなジャンルの本の話が多いか（自由記述）

問8 好きな作品、好きな作家はいるか（自由記述）

問9 これまで2回以上繰り返して読んだことがある本はあるか。何回くらいか、どんな本か。（自由記述）

問10 自分自身の経験から、読書のメリットはどんなことだと思うか。（自由記述）

2. 3 アンケートの結果

2. 3. 1 読書の楽しさ

問1では読書することを楽しいと思うかという質問を行った。第1表に司書課程の学生と司書課程以外の大学1年生の回答結果を示した。（ ）内はそれぞれの割合を示している。司書課程の学生の7割以上が「楽しい」と回答している。「楽しい」と「どちらかという楽しい」の合計は学生全体の9割をしめる。

第1表 読書は楽しいか

選択肢	司書課程の 学生人数	司書課程以外の 学生人数	合計人数
1 楽しい	19 (73.1%)	22 (43.1%)	41 (53.2%)
2 どちらかという 楽しい	7 (26.9%)	22 (43.1%)	29 (37.7%)
3 どちらかという と楽しくない	0 (0%)	4 (7.8%)	4 (5.2%)
4 楽しくない	0 (0%)	3 (5.9%)	3 (3.9%)
合計	26 (100%)	51 (100%)	77 (100%)

2. 3. 2 読書時間の有無

問2では大学生になってから、読書をする時間があるかどうかをたずねた。第2表に示したように、司書課程の学生は「ない」と答えた学生はいない。6割が「あまりない」と回答している。司書課程以外の学生は3割弱が「ない」と回答しているが、「あまりない」と「ない」をあわせると、6割強の学生が読書時間は「ない」と答えている。

第2表 大学生になってからの読書時間

選択肢	司書課程の学生 人数	司書課程以外の 学生人数	合計人数
1 ある	5 (19.2%)	5 (9.8%)	10 (13.0%)
2 ときどきある	5 (19.2%)	12 (23.5%)	17 (22.0%)
3 あまりない	16 (61.5%)	20 (39.2%)	36 (46.8%)
4 ない	0 (0%)	14 (27.5%)	14 (18.2%)
合計	26 (100%)	51 (100%)	77 (100%)

問3では子どもの頃（幼稚園や小学校の頃）の読書時間をたずねた。その結果が第3表である。

第3表 子どもの頃の読書時間

選択肢	司書課程の学生	司書課程以外の学生	合計
1 ある	23 (88.5%)	39 (76.5%)	62 (80.5%)
2 ときどきある	2 (7.7%)	9 (17.6%)	11 (14.3%)
3 あまりない	0	2 (3.9%)	2 (2.6%)
4 ない	1 (3.8%)	1 (2.0%)	2 (2.6%)
合計	26 (100%)	51 (100%)	77 (100%)

2. 3. 3 読書に関わる交流

問4から問6では本による他者との交流をとりあげた。問4では「本の話を読かすことがあるか」、問5では「誰と本の話をするか」（複数選択可）、さらに、問6では「誰かに本を勧めたり、本を貸したりすることがあるか」をたずねた。第4表から第6表にそれぞれの回答結果を示した。

第4表 本の話を読かすことがあるか

選択肢	司書課程の学生	司書課程以外の学生	合計
1 ある	5 (19.2%)	5 (9.8%)	10 (13.0%)
2 ときどきある	9 (34.6%)	14 (27.5%)	23 (29.8%)
3 あまりない	10 (38.5%)	21 (41.1%)	31 (40.3%)
4 ない	2 (7.7%)	11 (21.6%)	13 (16.9%)
合計	26 (100%)	51 (100%)	77 (100%)

第5表 誰と本の話をするか

選択肢	司書課程の学生	司書課程以外の学生	合計
1 友達	23 (88.5%)	26 (51.0%)	49 (63.6%)
2 家族	10 (38.5%)	17 (33.3%)	27 (35.1%)
3 そのほか	2 (7.7%)	2 (3.9%)	4 (5.2%)
4 誰もいない	2 (7.7%)	13 (25.5%)	15 (19.5%)

そのほかとしては、司書課程の学生は図書室の司書、SNS上での知り合いを、司書課程以外の学生では、学校の先生をあげている。

第6表 本を勧めたり、貸すことがあるか

選択肢	司書課程の学生	司書課程以外の学生	合計
1 ある	5 (19.2%)	8 (15.7%)	13 (16.9%)
2 ときどきある	8 (30.8%)	10 (19.6%)	18 (23.4%)
3 あまりない	12 (46.2%)	13 (25.5%)	25 (32.5%)
4 ない	1 (3.8%)	20 (39.2%)	21 (27.2%)
合計	26 (100%)	51 (100%)	77 (100%)

問7では「他の人と本の話をする際にどんなジャンルが多いか」を自由記述でたずねた。複数挙げられたジャンルを第7表に示した。小説全般を挙げている場合と、ミステリー小説、恋愛小説、推理小説などの特定の小説

を挙げている例がみられる。小説とそのほかの特定の小説もあわせると、6割強が小説で占められている。

第7表 他の人と本の話をする際に多く話すジャンル

選択肢	司書課程の学生	司書課程以外の学生	合計
小説	10 (38.5%)	7 (13.7%)	17 (22.1%)
ミステリー小説	4 (15.4%)	13 (25.5%)	17 (22.1%)
恋愛小説	2 (7.7%)	7 (13.7%)	9 (11.7%)
推理小説	1 (3.8%)	5 (9.8%)	6 (7.8%)
マンガ	2 (7.7%)	2 (3.9%)	4 (5.2%)
雑誌	2 (7.7%)	2 (3.9%)	4 (5.2%)
映画等の原作	1 (3.8%)	3 (5.9%)	4 (5.2%)

2. 3. 4 好きな作品・好きな作家

問8では自分の好きな作品、好きな作家についてたずねた。自由記述で挙げられた作品は第8表のとおりである。複数の学生があげた作品数は6点のみで、シリーズものや映像化されている『きみの友だち』や『余命10年』があげられている。

好きな作家は第9表のとおりである。最も多く取り上げられているのが、ミステリーや推理小説に対する人気が高く、東野圭吾が最も多く取り上げられている。

第8表 好きな作品

好きな作品	人数	全体77人に占める割合
ハリーポッター (J・Kローリング)	6	7.8%
きみの友だち (重松清)	2	2.6%
桜のような僕の恋人 (宇山佳佑)	2	2.6%
シャーロックホームズシリーズ (コナン・ドイル)	2	2.6%
また同じ夢を見ていた (住野よる)	2	2.6%
余命10年 (小坂流加)	2	2.6%
あかんべえ (宮部みゆき)	1	1.3%
明け方の若者たち (カツセマサヒコ)	1	1.3%
アラレン戦記シリーズ (ジョン・フラナガン)	1	1.3%
いじめっこには報復を (斬)	1	1.3%
一瞬の風になれ (佐藤多佳子)	1	1.3%
兎の眼 (灰谷健次郎)	1	1.3%
宇宙の秘密の鍵シリーズ (スティーブ・ホーキング)	1	1.3%
海底2万里 (ジュール・ヴェルヌ)	1	1.3%
鏡 (星新一)	1	1.3%
キノの旅 (時雨沢恵一)	1	1.3%
ケーキ王子の名推理 (七月隆文)	1	1.3%
コーヒーが冷めないうちに (川口俊和)	1	1.3%
コスメの王様 (高殿円)	1	1.3%
この恋は世界でいちばん美しい雨 (宇山佳佑)	1	1.3%
砂糖菓子の弾丸は撃ち抜けない (桜庭一樹)	1	1.3%
地獄堂霊界通信 (香月日輪)	1	1.3%
試着室で思いついたら、本気の恋だと思う	1	1.3%
11ぴきのねこ (馬場のぼる)	1	1.3%
十字架 (重松清)	1	1.3%
少年探偵団 (江戸川乱歩)	1	1.3%
白雪姫 (グリム)	1	1.3%
スマホを落としたけなのに (志駕晃)	1	1.3%
晴天の迷いクジラ (窪美澄)	1	1.3%

ちぐはぐな身体 (驚田清一)	1	1.3%
D坂の殺人事件 (江戸川乱歩)	1	1.3%
ディズニーサービスの神様が教えてくれたこと	1	1.3%
西の魔女が死んだ (梨木香歩)	1	1.3%
20代で得た知見 (F)	1	1.3%
人魚姫 (アンデルセン)	1	1.3%
阪急電車 (有川浩)	1	1.3%
ひだまりの詩 (乙一)	1	1.3%
陽だまりの樹 (手塚治虫)	1	1.3%
ブレイブ・ストーリー (宮部みゆき)	1	1.3%
僕らのご飯は明日で待ってる (瀬尾まいこ)	1	1.3%
本を守ろうとする猫の話 (夏川草介)	1	1.3%
真夜中乙女戦争 (F)	1	1.3%
密室殺人ゲーム (歌野晶午)	1	1.3%
モモ (ミヒヤエル・エンデ)	1	1.3%
妖怪アパートの幽雅な日常 (香月日輪)	1	1.3%
夜が明けたらいちばんに君に会いに行くよ (汐見夏衛)	1	1.3%

第9表 好きな作家

好きな作家	人数	全体(77人)に占める割合
東野圭吾	7	9.1%
住野よる	3	3.9%
江國香織	2	2.6%
知念実希人	2	2.6%
星新一	2	2.6%
湊かなえ	2	2.6%
青柳碧人	1	1.3%
赤川次郎	1	1.3%
朝井リョウ	1	1.3%
有川浩	1	1.3%
伊坂幸太郎	1	1.3%
上橋菜穂子	1	1.3%
江戸川乱歩	1	1.3%
乙一	1	1.3%
カズオ・イシグロ	1	1.3%
カツセマサヒコ	1	1.3%
グリム兄弟	1	1.3%
河野裕	1	1.3%
白川紺子	1	1.3%
張愛玲	1	1.3%
中山可穂	1	1.3%
七月隆文	1	1.3%
馬場のぼる	1	1.3%
宮部みゆき	1	1.3%
薬丸岳	1	1.3%
柚木麻子	1	1.3%
吉本ばなな	1	1.3%
綿矢りさ	1	1.3%

2. 3. 5 繰り返して何度も読む本

問9では、これまで2回以上繰り返して読んだことがある本はあるか、何回くらい読んだか、どのような本かをたずねた。結果は第10表、第11表のとおりである。2回、3回繰り返して読む学生が最も多く、気に入りの本は繰り返して読む。子どもの頃は何度も繰り返して読んでいたので、数えきれないという回答も見られた。

第10表 何回くらい繰り返して読むか

繰り返して読む回数	人数	全体(77人)に占める割合
2回	11	14.3%
3回	12	15.6%
4回以上	5	6.5%
5回	7	9.1%
6回	1	1.3%
7回	1	1.3%
8回	1	1.3%
10回以上	4	5.2%
20回	1	1.3%
100回以上	1	1.3%
くり返して読む 数えきれない	2	2.6%
合計	46	59.7%

複数の学生がとりあげた作品は『星の王子さま』『ハリーポッターシリーズ』のみで、それ以外は別々の作品を選んでいった。それぞれの学生が、自分にとって忘れられない1冊を持っている。『秘密の花園』については、「小学校の時から、必ず1年に1回は必ず読み返している。やさしくて暖かい作品で、忘れられない大切な1冊である」という回答が見られた。

複数回読み直す理由は、推理小説のように先が知りたくて、急いで読み飛ばしてしまった内容を見直しながらかいたり、文章を味わいながら読む。結末を知って読み直すと最初読んだときには気づかなかったことを発見することがあるなどの指摘があった。また、『斜陽』や『人間失格』のような1度読んだだけでは理解しにくい難しい内容の場合は、さらに細かい点を調べたり、確認しながら読むことが多いという回答も見られた。

第11表 繰り返して読む作品

くりかえし読む作品	人数	全体(77人)に占める割合
星の王子さま (サンテグジュペリ)	4	5.2%
ハリーポッターシリーズ	2	2.6%

青い鳥（重松清）	1	1.3%
赤毛のアン（L・M モンゴメリ）	1	1.3%
あかんべえ（宮部みゆき）	1	1.3%
アラレン戦記（ジョン・フラナガン）	1	1.3%
いじめっこには報復を（斬）	1	1.3%
イソップ物語（イソップ）	1	1.3%
一瞬の風になれ（佐藤多佳子）	1	1.3%
失われる物語（乙一）	1	1.3%
おいしいのぼうけん（ふるたたるひ）	1	1.3%
海底二万里（ジュール・ヴェルヌ）	1	1.3%
かくしごと（久米田康治）	1	1.3%
感情教育（中山可穂）	1	1.3%
キッチン（吉本ばなな）	1	1.3%
きつねとつる（イソップ）	1	1.3%
君の臓腑を食べたい（住野よる）	1	1.3%
さくらえび（さくらももこ）	1	1.3%
地獄堂霊界通信（香月日輪）	1	1.3%
死にぞこないの青（乙一）	1	1.3%
シャーロックホームズシリーズ（コナン・ドイル）	1	1.3%
斜陽（太宰治）	1	1.3%
少年探偵団（江戸川乱歩）	1	1.3%
すきまじかん（アンネ エルボー）	1	1.3%
たとえ声にならなくても君への思いを叫ぶ（小春りん）	1	1.3%
ちぐはぐな身体（鷺田清一）	1	1.3%
ツナグ（辻村深月）	1	1.3%
D坂の殺人事件（江戸川乱歩）	1	1.3%
長くつ下のピッピ（アストリッド・リンドグレーン）	1	1.3%
西の魔女が死んだ（梨木香歩）	1	1.3%
人魚姫（アンデルセン）	1	1.3%
人間失格（太宰治）	1	1.3%
猫背の王子（中山可穂）	1	1.3%
ハイキュー！！（古館春一）	1	1.3%
陽だまりの樹（手塚治虫）	1	1.3%
秘密の花園（フランシス・ホジソン・バーネット）	1	1.3%
復讐専用ダイヤル（赤川次郎）	1	1.3%
ブレイブ・ストーリー（宮部みゆき）	1	1.3%
ぼくは勉強ができない（山田詠美）	1	1.3%
僕らのご飯は明日で待ってる（瀬尾まいこ）	1	1.3%
マジックツリーハウス（メアリー・ポー・オズボーン）	1	1.3%
また同じ夢を見ていた（住野よる）	1	1.3%
密室殺人ゲーム 王手飛車とり（歌野晶午）	1	1.3%
モモ（ミヒヤエル・エンデ）	1	1.3%
妖怪アパートの幽雅な日常シリーズ（香月日輪）	1	1.3%
夜が明けたらいちばんに君に会いにいくよ（汐見夏衛）	1	1.3%
ONE PIECE（尾田栄一郎）	1	1.3%

2. 3. 6 読書のメリット

問10では、自分の経験から読書のメリットはどのようなことだと考えるかを自由記述形式でたずねた。得られた回答をまとめたところ、4グループ（①勉強・知識、②想像力・体験、③時間の過ごし方・楽しみ、④コミュニケーション・交流）にわけることができた。その結果を第12表から第15表に示した。

第12表 メリット ①勉強・知識

メリット	司書課程の学生	司書課程以外の学生	合計	全体（77人）の中の割合
①勉強・知識				
知識が増える	5	9	14	18.2%
語彙力がつく	4	9	13	16.9%
文字の表現力が豊かになる	3	3	6	7.8%
漢字に強くなる	3	3	6	7.8%
読解力が身につく	2	3	5	6.5%
文字を読む速度が速くなる	1	3	4	5.2%
文章を書くときの参考になる	0	1	1	1.3%
国語力が高まる	1	0	1	1.3%
歴史を学ぶことができる	0	1	1	1.3%
翻訳書を原文で読むと語学の勉強になる	1	0	1	1.3%
教養や常識が身につく	0	1	1	1.3%
①合計	20	33	53	

第13表 メリット ②想像力・体験

②想像力・体験	司書課程の学生	司書課程以外の学生	合計	全体（77人）の中の割合
想像力が豊かになる	5	11	16	20.8%
人生や考え方を学び、視野が広がる	4	4	8	10.4%
他の人の体験を疑似体験できる	2	6	8	10.4%
現実逃避ができる	4	1	5	6.5%
価値観が変わる	1	2	3	3.9%
感受性が豊かになる	2	0	2	2.6%
読後の満足感が得られる	0	1	1	1.3%
人生が変わる	1	0	1	1.3%
新しいアイディアがうまれる	1	0	1	1.3%
②合計	20	25	45	

第14表 メリット ③時間の過ごし方・楽しみ

③時間の過ごし方・楽しみ	司書課程の学生	司書課程以外の学生	合計	全体（77人）の中の割合
集中し夢中になることができる	4	3	7	9.1%
ワクワクして楽しい	0	6	6	7.8%
心が落ち着く	2	4	6	7.8%
非日常なことを楽しめる	2	2	4	5.2%
ストレス発散	0	1	1	1.3%
時間を有意義に使える	0	1	1	1.3%
ケータイ、SNSから離れる時間を作ることができる	0	1	1	1.3%
喜びや幸福感が得られる	1	0	1	1.3%
気分転換、息抜きになる	1	0	1	1.3%
③合計	10	18	28	

第15表 メリット ④コミュニケーション・交流

④コミュニケーション・交流	司書課程の学生	司書課程以外の学生	合計	全体（77人）の中の割合
他の人の気持ちに共感できるようになる	0	4	4	5.2%
会話のきっかけやネタになる	0	2	2	2.6%
話し方が上手になる	1	0	1	1.3%
幅広い世代の人と話すきっかけになる	1	0	1	1.3%
④合計	2	6	8	

Ⅲ. 考察と今後の課題

読書する学生と読書をしない学生の二極化は依然として存在している。それは読書が楽しい学生と楽しくない学生の二極化であり、読書時間のある学生とない学生の二極化でもある。子ども（幼稚園や小学校）の頃には単純な読書時間の有無だけではなく、それを支える読み聞かせや図書の時間等の時と場があり、家庭や園や学校で親や先生、友達とのふれあいの場が設定されたりす

る。読書を生活の中にどのように位置づけるかをもう一度真剣にとらえ直してみる必要がある。

読書のメリットはなにかと考えるとき、キーワードは常に「読書の楽しみ」に存在するのではないだろうか。「想像力・体験」から生まれる新たなチャレンジ、「時間の過ごし方・楽しみ」が集中、夢中、ワクワクの気分を創出し、「コミュニケーション・交流」が共感しあい、幅広い世代の人々との交流へとつながる。

今回の学生に対するアンケート調査を通して、身近な学生たちの声の中にこそ、読書を生活の中に位置づけるための大きなヒントが隠されていることに改めて驚いた。学生1人1人が自分なりの読書への熱い思いを持っている。

- ・自分には小学生の時に会った大切な本がある。それは、『秘密の花園』である。この本を1年に1回は必ず読んでいます。やさしくて暖かい本だからだ。
- ・原作は漫画だが、小説化されたり、映画化される作品が増えている。小説が好きな人、小説が得意ではない人、漫画が好きな人、漫画が嫌いな人、いろいろな人がいる。読書が苦手だった自分は、好きな漫画から始めて映画、小説を読むようになった。そして、苦手な読書を克服する自分なりのヒントに気づいた。それは、無理をしないで自分に合ったやり方で読み続けることだ。
- ・電子書籍を初めて使ったときに、こんなに便利なものがあるのに驚いた。電子書籍も読むが、それでも紙の本の方が好きだ。ページをめくると、次にどんなことが書かれているのか、どんな展開が待ち受けているのか、ワクワクする。図書館で本を借りた時に手揚げに本を入れる瞬間は、電子書籍では味わえない喜びだ。
- ・子どものころ、祖母の影響でラジオの朗読を聞くようになった。祖母が録音していたので、遊びに行ったときに一緒に聴くのが楽しみだった。今では自分のおすすめの本を祖父母に紹介するようになった。昔読んだことがある本を何年か経って読み返すと考え方が変わることがあるように、読んでいるときの年齢や環境などで作品の感じ方が変わることも読書の面白いところだ。本を読むことを通して学んだ知識や価値観は、今後生きていく中で自分の強みになると思う。
- ・祖父は小説を読むことが好きで、いつも図書カードをくれる。小学生の頃には、朝読書があって沢山本を借りた人は表彰されるイベントがあった。それでも、自

分は本を読むことが好きではなかった。高校生になってからは朝読書がなくなり、さらに本を読まなくなった。その代わりに漫画や雑誌を読むようになった。大学生になってから、小説を1冊だけ買った。それは、好きなアイドルがその小説の実写版映画の主演を務めたからだ。

- ・1冊の漫画を読んで、自分は2つのことを学んだ。1つ目は、1つのことに集中する事、続けること、あきらめない事。2つ目は自らアクションを起こす事である。自分から声を上げることは簡単ではないが、夢のかなえるためには大切だということがわかった。漫画はあまり良いものとされていないが、漫画から学ぶことは沢山ある。一番魅力的なのは、読んでいて動きがあることである。漫画は絵本の大人版だと思う。
- ・小さいころから本を読むことがとても嫌いだった。ページをめくっても、めくっても文字がずらっと並んでいる本に魅力を感じることができなかった。逆に本を読むことが大好きな姉のことを不思議に感じていた。初めて読んだ絵本、小学校の頃に貸してもらった姉の本、高校で出会った友達と訪れた図書館で出会った本、母や姉、友達など様々な人々がかかわっている。

自分だけの「推し」の本を見つけた体験をしている学生は、作品の感想を共有し合うコミュニケーションを通して「味わう」にまで高める力を持つ。本は読んで終わりではなく、誰かの心にずっと残るということは、何度も読み返す本との出会いになる。個々人の交流の新たな輪を広げる原動力といってもよいのではないだろうか。

今、図書館や書店で読書離れに対応した新たな先進的な取り組みが行われている。2022年7月に開館した石川県立図書館では、2022年11月に「秋の選書祭 100万冊の中からあなたにピッタリの本を5冊見つけます!」というサービスが展開されている。読みたい本が見つからない、読書をしたいが何から読めば良いかわからない人のために本との出会いを創出し、図書館が積極的に利用者の「読書の楽しみ」を発見する手助けをする取り組みである⁶⁾。また、紀伊国屋書店は2027年までに現在68ある国内店舗を100店に拡大するという。その背景には若い世代の国語力の低下や大学生の読書時間の減少に対する危機感があるという⁷⁾。

今回は自分の体験から考えた読書のメリットを大学生にたずねた。その結果、1人1人が思いがけない工夫やユニークな取り組みをしていることが分かった。アン

ケートでは多くの学生が読書は楽しいと回答しているにも関わらず、読書が苦手という学生も多い。読書を苦手にするものは何か、読書のデメリットは果たして何かについても引き続き考えてみたい。

注・参考文献

- 1) 特設サイト新型コロナウイルス「第8波」への警戒
<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/eighthwave/> (2022-11-13参照)
- 2) 大学プレスセンター. 各大学の2022(令和4)年度授業実施方針について <https://www.u-presscenter.jp/article/post-47319.html> (2022-11-13参照)
- 3) 第55回学生生活実態調査概要3. 日常生活(2) 読書時間
<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report55.html> (2022-11-13参照)
- 4) 第56回学生生活実態調査概要報告3. 日常生活(3) 読書時間・電子書籍
<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report56.html> (2022-11-13参照)
- 5) 第57回学生生活実態調査概要報告3. 日常生活(5) 読書時間・勉強時間
<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html> (2022-11-13参照)
- 6) 石川県立図書館. 秋の選書祭 100万冊の中からあなたにピッタリの本を5冊見つけます!
<https://www.library.pref.ishikawa.lg.jp/category/event2022/2278.html> (2022-11-13参照)
- 7) “紀伊国屋書店：読書離れを防ぐ使命 紀伊国屋書店「店舗倍増計画」”. 毎日新聞2022年9月7日夕刊4頁.

「不死鳥」におけるリアリズム (2)

—「海行く人」の「Ne+主語」成句との比較—

An Analysis of Realism in *The Phoenix* (Part 2)

—A Comparative Study of the 'Ne' + 'Subject' Formula in *The Seafarer*—

白井 菜穂子

SHIRAI Naoko

要旨

『エクセター・ブック』写本に収録された「海行く人」にはラテン詩から借用されている成句「Ne+主語」が数か所に見られるが、詩の前半では原典と思われるラテン詩での機能と同様、慣習通り否定語neと名詞、形容詞という組み合わせで現れるが、後半には、その成句が動詞を含めて再構築されている。

例えば同じ写本の中の「不死鳥」を例にとると、135-136行のne hearpan hlyn ne hæleþa stefn / ænges on earþan ne organan (not the sound of harps of trumpets nor horns / in any way on the earth nor organs)¹⁾のように、動詞のない否定語のneと名詞で構成された成句が通例である。同じようなneと名詞の成句が「海行く人」の前半にも使われているにも関わらず、詩の最後の95-96行には動詞がふんだんに使われ、この後に続くGreat is the terrible power of Godを称えるエンディングに動きのある視覚化の効果を与えている。本稿では、この成句の変化型が意図的にリアリズムの効果をもたらす工夫であることを指摘したい。

●キーワード：海行く人 (*The Seafarer*) / エクセター・ブック (the Exeter Book) / リアリズム (realism)

I. Introduction

Whilst the Latin-origin 'ne' + 'subject' formula frequently appears in the Old English poetry, it seems to be used to express a specific concept of an individual poet. In *The Phoenix* of The Exeter Book, the formula highlights the misery of the human world when the poet utilises the common original Latin 'ne' + 'subject' phrase (comprising a negative word, a noun, and an adjective), signifying a static, bleak, and distressed world of human beings.²⁾ If it is common for Anglo-Saxon poets to reflect the effect of the Latin formula in their works, they might be expected to emphasise its archaic tradition of literature. Therefore, if they attempt to transform the formula in some parts of their poems, there must be some significant intention to suggest the poet's new ideas. This article seeks to shed light on the alteration of the Latin 'ne' + 'subject' in *The Seafarer*, where its original formula appears in the first half of the poem. In contrast, the formula comes to include a 'verb' in the latter half as a transformed formula. Thus, there must be some idea of the poet in deforming the

original formula.

The Seafarer is an Old English (OE) verse of 125 lines weaving the lamentation of an exiled poet in the Exeter Book. As in *The Phoenix*, the verse also includes the 'ne' + 'subject' formula twice. The usage of the formula should particularly be analysed in comparison with that in *The Phoenix*, where the formula delivers a negative connotation of human nature.³⁾ What specific idea then can be implied by the poet in incorporating the original formula with a verb in *The Seafarer*? There should unmistakably be the poet's purpose to draw readers' attention to the function of verb: dynamics. The most plausible reason to use a verb is to make readers realistically envision the world the poet designs to create. In *The Seafarer*, the world he would like to visualise is the heavenly land of God.

II. The Formula in *The Seafarer*: Ne + Adjective and Ne + Noun

The Seafarer is commonly divided into two parts at line 64. Gordon observes that 'And though there is an

apparently abrupt change of thought at line 64, where the real seafaring theme ends and a not very obviously connected moralizing begins, the two parts are closely linked grammatically and metrically, and the difference of style between them is no greater than the difference of subject matter warrants.⁴⁾ As he argues, the first half of the poem is focused on the seafaring theme, which introduces the exile's recalling his glorious life in the past. Contrariwise, the second half iteratively emphasises the Christian theme that his faith in the Lord has been challenged during his seafaring exile. Notably, the traditional 'ne' + 'subject' formula appears in the first half of the poem, while the new 'ne' + 'subject' + 'verb' formula emerges in the end of the poem. If this twist is devised by the poet, the context of the scene where the new verb-included type is used should be thoroughly examined by comparing it with its counterpart without a verb.

The traditional 'ne' + 'subject' formula creates a successive impact on narrating the transience of human lives in lines 39–47.

for þon nis þæs modwlanc mon ofer eorþan,
ne his gifena þæs god, ne in geoguþe to þæs hwæt,
ne in his dædum to þæs deor,
ne him his dryhten to þæs hold,
þæt he a his sæfore sorge næbbe,
to hwon hine Dryhten gedon wille.
Ne biþ him to hearpan hyge ne to hringþege –
ne to wife wyn ne to worulde hyht –
ne ymbe owiht elles nefne ymb yða gewealc;
ac a hafað longunge se þe on lagu fundað. (39–47)⁵⁾

because is not so spirited a man on the earth,
nor so generous in his gifts, nor so vigorous in youth,
nor so brave in his deeds,
nor so gracious his lord to him,
that he always in his sea-voyage
would not have sorrow,
to what his Lord intends to bring.
Nor is a thought to him about a harp
nor about receiving of rings –
nor in a delight of woman nor in a joy of the world –

nor of anything else except for rolling waves;
but always has longing
he who is eager to go over the sea.

Apparently, 'mon' (man) in line 39b is the subject of these lines 39–43, which excludes the repetition of the 'subject' in the following two lines. The repetition of 'ne' + 'adjective' without a verb has a more static effect, suggesting that the world of human beings should be motionless like a memory of the past. When the sequence of adjectives 'modwlanc' (spirited), 'god' (generous), 'hwæt' (vigorous), 'deor' (brave), and 'hold' (gracious), is all denied with 'ne' (nor), this may emphasise the vanity of old and stale Anglo-Saxons' lives compared with the heavenly land of God, which exists vividly and everlastingly.

Following a few lines with a verb contextualising the scene (43–44a, 47), the lines (44–46) use the 'ne' + 'noun' formula with ingenuity.⁶⁾ The noun with the adjective delivers a static effect on the part of the poem, where a sequence of noun without a verb freezes the moment of the exile's recalling past glory: 'to hearpan' (about a harp), 'to hringþege' (about receiving of rings), 'to wife wyn' (in a delight of woman), 'to worulde hyht' (in a joy of the world), 'ymbe owiht elles' (of anything else), and 'nefne ymb yða gewealc' (except for rolling waves).

The verses before the aforementioned lines describe the exile as longing for the new land while sailing over the sea.⁷⁾ They include full verbs only in six lines (Gordon, 33b–38): 'cnyssap' (trouble), 'cunnige' (venture), 'monað' (urge), 'feran' (travel), and 'gesece' (seek). This could reveal that the poet attempts to make an explicit contrast to the past glory of the Anglo-Saxon world with the advent of a new age: the world of God. The abundant use of verbs prior to the 'ne' + 'adjective' formula expresses the vigorous and dynamic reality of the new world.

Contrariwise, the formula is followed by the seafarer's longing to travel over the sea to seek an unseen country.⁸⁾ Herein again, several verbs stand out in the formula only in five lines (48–52): 'nimað' (take), 'fægriað' (adorn), 'wlitigað' (brighten), 'onetteð' (hasten), 'gemoniað' (urge), 'þenceð' (mind), and 'gewitan' (depart).

The exile's yearning for a sea-voyage is vividly expressed here with a sequence of verbs that attracts readers' attention to the expectation of exploring a beautiful land beyond the sea. Gordon, however, objects to this idea, stating in his note on 'longunge' (47a) that 'the context makes it clear that this does not mean a longing for the sea. . . . though there may be an underlying Christian significance of 'yearning'.⁹⁾ Contrary to Gordon's interpretation, the frequent appearance of verbs before the 'ne' + 'adjective' formula refers to the joy of travelling over the sea to discover a new world, as discussed in the previous paragraph. In short, the 'ne' + 'adjective' formula (39–47) is inserted in the middle of a passionate narrative of sailing to the new world, which makes readers imagine that the world of the Anglo-Saxons is static and old-fashioned.

III. The Formula in *The Seafarer*: Ne + Subject + Verb

At the end of *The Seafarer*, the traditional 'ne' + 'subject' formula undergoes a notable change of its form, the formula with a 'verb'. This alteration depicts a different theme in the latter half of the verse. Towards the end of the poem, the poet attempts to describe a dynamic surge of emotion towards his Christian faith by inserting a verb into the traditional formula.

Ne mæg him þonne se flæschoma,
 þonne him þæt feorg losað,
 ne swete forswelgan ne sar gefelan
 ne hond onhreran ne mid hyge þencan. (94–96)

Nor can to him then the covering of flesh,
 when to him the life is lost,
 nor eat sweetness nor feel pain
 nor stir with a hand nor think with mind.

In line 94a, 'flæschoma' (covering of flesh, meaning 'body') is the subject, which likewise functions in the following lines. In contrast to the first half of the poem, the frequent appearance of verbs in the formula is conspicuous: 'mag' (can), 'losað' (lose), 'forswelgan' (eat), 'gefelan' (feel), 'onhreran' (stir), and 'þencan' (think). These verbs are inserted at the end of every half line,

creating a constant rhythm towards the end to encourage the poet's religious passion.

The theme of lines 80–102 focuses on the transient world of human beings, in which the modified formula with verbs is incorporated. The poet exaggerates how worldly fame and youth are valueless as follows:

Blæd is gehnæged,
 eorþan indryhto ealdað ond searað,
 swa nu monna gehwyle geond middangeard.
 Ylde him on fareð, onsyn blacað,
 gomelfeax gnornað, wat his iuwine,
 æþelinga bearn eorþan forgiefene. (88b–93)

Glory is torn down,
 nobility on the earth grows old and fades,
 so no every man throughout the middle earth.
 Old age overtakes him, face grows pale,
 the grey-haired laments, passed away his old friends,
 children of men depart the earth.

In this part prior to the lines of the 'ne' + 'subject' + 'verb' formula, the poet deprecates the value of the real world using several verbs: 'gehnæged' (bring low), 'ealdað' (grow old), 'searað' (fade), 'fareð' (go), 'blacað' (grow pale), 'gnornað' (lament), 'wat' (depart), and 'forgiefene' (depart). He then continues to use the verb-incorporated formula in order to amass dynamic examples of worthlessness, following Anglo-Saxon tradition (94–96). The usage of verbs herein retains a rhythmical succession of action from line 80b towards the end.

The Seafarer reaches its climax at the end (103–125) with the great passion of his faith in God. The following lines urge readers to fear death, discard their past traditional lives, and take faith in God.¹⁰⁾

Micel biþ se Meotudes egsa,
 for þon hi seo molde oncyrræð;
 se gestapelade stiþe grundas,
 eorþan sceatas ond uprodor.
 Dol biþ se þe him his Dryhten ne ondrædeþ:
 cymeð him se deað unþinged.
 Eadig bið se þe eaþmod leofaþ;

cymeð him seo ar of heofonum.
(103–107)

Great is the fear of God,
before it the earth turns aside;
he establishes the firm earth,
the expansion of the earth and the heavens above.
Foolish is he who himself fears not his Lord:
comes to him the unexpected death.
Blessed is he who lives humble;
comes to him the grace of heaven.

The poet's faith is beautifully described in the lines above, which deny mortal human nature and worship God's creation of the world. This is the verse of propagation in Christianity, where the power of creation is dynamically proliferated by a succession of verbs: 'oncyrræð' (turn aside), 'gestapelade' (establish), 'ondrædeþ' (fear), 'cymeð' (come), and 'leofaþ' (live). The dynamic function of verbs overwhelmingly occupies the end, setting the final tone of the poem.

IV. Conclusions

As is argued in each section of this article, the function of verbs in the Latin-based 'ne'+ 'subject' formula in *The Seafarer* is established by the fact that the poet commences the verse with the static 'ne'+ 'adjective' formula without a verb, then modifies the formula to a more dynamic form with a verb in the end. This shift of formulas coincides with the change of themes: a sea journey of the exiled deprived of his past glory in the first half, God's glory and the poet's faith in the latter half. The poet first uses a noun and an adjective in the formula to create a static scene of past glory, whilst in the end he makes good use of the verbal function as a dynamic tool to vividly depict the blissful land of God.

As discussed in a previous article on *The Phoenix*, the 'ne'+ 'subject' formula implies that the world of human beings has faded away into the past.¹¹⁾ Likewise, the first half of *The Seafarer* begins with the scene of a motionless sea voyage in which the exiled recalls his past. Contrariwise, the use of verbs in this formula

plays an important role in creating a dynamic effect in the end of the poem. One difference between *The Phoenix* and *The Seafarer* is seen in the 'ne' + 'subject' + 'adjective' + 'verb' formula (94–96), which seems to be the poet's technique to make readers 'envisage' the paradise of God more realistically. This function of the verb in the Latin formula may be one of the literary methods of realism with which the poet of *The Seafarer* intends to convey his religious passion.

NOTES

- 1) The citation of *The Phoenix* is attributed to N. F. Blake, ed., *The Phoenix*, revised edition (University of Exeter Press, 1990). All modern English translations of the OE poems in this article are by the author.
- 2) See Naoko Shirai, 'An Analysis of Realism in *The Phoenix* (Part 1): A Comparative Study of the "Ne" + "Subject" Formula', *Journal of Bunka Gakuen University and Bunka Gakuen Junior College* No.53 (2022): 44–49.
- 3) See Shirai, 'Realism in *The Phoenix* (Part 1)'.
- 4) See I. L. Gordon, ed., *The Seafarer* (Methuen, 1969), p. 2.
- 5) *The Seafarer's* lines are all derived from I. L. Gordon, ed., *The Seafarer* (Methuen, 1969).
- 6) The line 44a apparently contains a verb 'biþ' (pres. 3 sg. of *beon*). However, it usually coincides with modern English static verb 'be' or 'exist', which eliminates the active character of a verb. Moreover, the following repetition of 'ne' + 'noun' formula (44–46) should be a significant signature of *The Seafarer*.
- 7) Williamson's modern English translation interprets this part as 'Still my heart is stirred / To seek the sea-streams, the tumult of waves, / By my wandering thoughts. The mind always urges / The soul to set out, seeking some foreign soil, / A land of strangers.' Craig Williamson, trans., *The Complete Old English Poems* (University of Pennsylvania Press: 2017), p. 469.
- 8) Here is Williamson's modern translation: 'The groves burst into bloom, adorning the towns, / Meadows grow beautiful — the world hastens on: / All this urges the restless heart to travel, / The eager mind of the sailor to seek the sea.' Williamson, p. 469.
- 9) Gordon, p. 39. Klinck comments on Gordon's interpretation, 'Although Gordon rejects the meaning "longing" here, it is in keeping with the general tenor of this part of the poem that *longung* should mean both "anxiety" and "yearning". See Anne L. Klinck, *The Old English Elegies: A Critical Edition and Genre Study* (McGill-Queen's University Press, 1992).
- 10) The authorship of the last part (103–125) of this poem is controversial. Although the ending could have been incorporated into the original verse by a later scribe, the theme of Christianity remains consistent towards the end. Klinck remarks on the last part (103–125) of the poem that 'But, as Pope notes, "It is by no means impossible that *The Seafarer* was partially recast from time to time before it

reached the Exeter Book" (1978, 33). In this sense, the material in lines 103–24 may be of a different and later provenance'.

11) See Shirai, 'Realism in *The Phoenix* (Part 1)'.

光の芸術家マリアノ・フォルチュニ —1911年の「女性の仕事の博覧会」をブルーストは見たか？—

Mariano Fortuny, Artist of Light

—Did Proust Visit “The Exhibition of Women’s Work” in 1911?—

勝山 祐子

KATSUYAMA Yuko

要旨

ブルーストとフォルチュニの間に交流があったのかどうかは不明である。しかし、1911年にパリの装飾美術館で開催されフォルチュニも製品を出品した「女性の仕事の博覧会」に関する記事は多く存在し、ブルーストの周辺の作家たちも雑誌や新聞に寄稿しており、ブルーストがこれらに目を通した可能性は高い。例えばアルベル・フラマンやマリー・ド・レニエだ。両者ともフォルチュニが舞台照明の改革者であることに言及しつつ、照明であろうと服飾品であろうと、それが光の戯れによる芸術作品であることを強調する。後者の場合はフォルチュニを空と海の煌めきを想起させる光の魔術師であるとみなすが、同時に、フォルチュニのドレスは「過去を持ったドレス」であり「死んだ女のドレス」であるとする。これはアルベルチヌの「死と生」を象徴する二羽の鳥をモチーフとしたドレスを想起させる。しかし、二人に先立つ1908年、アンリ・ド・レニエがすでに、フォルチュニの舞台照明と母親のテキスタイル・コレクションとに言及し、彼の芸術の本質が光の戯れにあると述べていたのである。

●キーワード：アルベル・フラマン (Albert Flament)／マリー・ド・レニエ (Marie de Régnier)／
アンリ・ド・レニエ (Henri de Régnier)

I. 序

アンリ・ド・レニエがマリアノ・フォルチュニと親しく交際していたことは、過去の拙稿でも述べたとおりである。レニエが1928年に発表した『アルタナ、あるいはヴェネチアの日々』¹⁾には、ヴェネチアに住むフォルチュニとその家族が描かれている。特に、黄昏時に見たというフォルチュニの母親の古いテキスタイル・コレクションの描写は美しく、『失われた時を求めて』におけるフォルチュニに関するテキストを想起させるものでもある。また、ジャン＝ルイ・ヴォドワイエ (Jean-Louis VAUDOYER) が1949年に発表したエッセイによると、1948年にヴェネチアのカ・ダリオの裏にレニエを記念するプレートが設置されその除幕式が開かれたのだが、そのわずか12名ほどの列席者の中にはフォルチュニ夫妻もいたという²⁾。レニエがフォルチュニと交際するようになったきっかけは、フォルチュニの後援者だったマルティヌス・ド・ベアルン伯爵夫人だったのだろう³⁾。

ところで、レニエの妻で、ジェラルド・ドゥーヴィル (Gérard d'Houville) との男性名で作家として活動した

マリーは、レニエ以上にベアルン夫人と親しかったと考えられる (1906年、レニエ夫妻はフォルチュニの母が住むパラッツォ・マルティネンゴを訪れ、彼女の古い織物コレクションを見学した。この頃彼女の愛人だったのは、前述のヴォドワイエである⁴⁾)。ローレル・スタジ (Laure STASI) が出版したベアルン夫人に関する大部の著作を読むと、愛人ピエール・ルイ (Pierre LOUÏS) が亡くなり、二人の関係を示す書簡やルイが撮影したマリーの裸体の夥しい数の写真が売却されそうになった時、秘密裡にこれを購入し焼却処分を試みたのがベアルン夫人だったことが分かる (ただし、夫人の意思に反してこれらは保存されており、21世紀になってから日の目を見ることになってしまった)。マリーが夫人に泣きついたので⁵⁾。しかもマリーは女性なのだから、フォルチュニのドレスを所有していてもおかしくない。事実マリーは、1911年、『フィガロ』紙にフォルチュニのドレスに関する文章を寄せている。だが、この年にフォルチュニのドレスについて記事を執筆したのはマリーだけではなかった。本稿では、キアラ・ボリレ (Chiara BORILE)

の2016年の論文を出発点に⁶⁾、ブルースト以外の作家たちが、どのようにフォルチュニのドレスを描いたのかを紹介しつつ、ブルーストにおけるフォルチュニの描写について検討したい。

II. ブルーストとフォルチュニの出会い？

ボリレがブルーストにおけるモードと社交界を主題に執筆した博士論文の第4章「言葉から織物へ マルセル・ブルーストとマリアノ・フォルチュニ」は、フォルチュニとブルーストの実際の関係を探る試みである。ボリレは、ヴェネチアの国立マルチャーナ図書館 (la Biblioteca Nazionale Marciana) が所蔵するマリウッティ＝フォルチュニ・コレクション (Fondo Mariutti-Fortuny)⁷⁾ にあたり、フォルチュニ夫妻が集めたと考えられる、「フォルチュニ」の名が見られる記事に目を通した。フォルチュニのクーポールが設置されたベアルン夫人の私設劇場ビザンチン・ホールは1906年3月にオープンしたのだが、ボリレによれば、その柿落としを伝える同年3月31日頃の記事には招待客として、ブルーストと交流のあった画家ジャック＝エミール・ブランシュやプリモリ伯爵 (le comte PRIMOLI) やプールタレ伯爵夫人 (le Comtesse de POURTALES) の名があるという⁸⁾。だが結局のところ、ブルーストとフォルチュニの関係性については不明であるとボリレは結論づける。ただし、ギレルモ・デ・オズマ (Guillermo de OSMA) の著作に基づいて、1908年にマドレーヌ・ルメール夫人の屋敷で開催されたギリシャ風仮装パーティーにはフォルチュニのクノッソス・ショールを纏った招待客がおり、この場にはブルーストもいたのだから、遅くともこの頃にはフォルチュニのギリシャ風服飾を知っていたのだろうとしている⁹⁾。筆者としては、1908年にレーナルド・アーンに当てた書簡から¹⁰⁾、ブルーストがこの頃にはフォルチュニのテキスタイルを知っていたことは明らかであると述べたい。

III. 1911年の「女性の仕事の博覧会 (l'Exposition des travaux de la femme)」

いずれにしても、ブルーストの周辺の人々がフォルチュニと交際し、フォルチュニのドレスを纏っていたのは確実である。そして、ブルーストの知る作家たちの中には、フォルチュニのクリエイションに関する記事をものした者もあった。ボリレはとりわけ、パリの装飾美術館で1911年に開催された「女性の仕事の博覧会

(l'Exposition des travaux de la femme)」にフォルチュニの製品が展示されたことに注目する。この博覧会については多くのメディアが記事を掲載したようだ¹¹⁾。例えば1911年4月8日の『ゴーロワ (le Gaulois)』紙にトゥー＝パリ (TOUT-PARIS) 名義で掲載された「刺繍と刺繍家の女性たち (Dentelles et dentellières)」に、フォルチュニへの言及が見られるのだ。この記事はフォルチュニを「大芸術家の息子で、マドラゾ氏の甥」であると説明し、続いて、フォルチュニの布地が「ルネッサンス期の図案や彼自身がデザインしたモダンな図案」をプリントしたものであるとする。そして、「ベルベットや金銀刺繍の施された織物や最も豪華な絹の完全な模倣であり、ヴェネチアのパラッツォ・オルフェイでフォルチュニ自身によって発明され実地に移された方法は、現代女性の身繕いにおいてまで最も美しい効果をあげている¹²⁾」と述べている。

ここで注目すべきは、古代ギリシャ風のドレフォスやクノッソスではなく、ヴェネチアの古い図案から着想されたプリントについてのみ述べられていることだろう¹³⁾。筆者が過去に拙稿で指摘したように¹⁴⁾、『失われた時を求めて』においてはフォルチュニのギリシャ風製品への言及は全くなく、フォルチュニはルネッサンスのヴェネチアの織物を現代に蘇らせた芸術家として描かれているからである。

ところで、この博覧会は女性の手仕事を紹介するもので、貴族の夫人たちが後援するチャリティーと呼べるものだった。先ほどのトゥー＝パリ名義の『ゴーロワ』紙の記事によると、ガネー侯爵夫人 (marquise de GANAY) が実行委員会の委員長を務めている。おそらくこのガネー夫人とはベアルン夫人の妹のベルト・ド・ガネーであり¹⁵⁾、女性の手仕事を紹介するための博覧会に、男性であり、すでにパリでは一定の人気を博していたフォルチュニの製品が出品されている理由も、フォルチュニをよく知る夫人たちが後援する催しだったからだと思像される。そして、1911年のこの博覧会のテーマは『ゴーロワ』紙の記事のタイトルが示しているとおり刺繍だったのであり、フランス各地の刺繍に加えてイタリアからも各地の刺繍製品が出品されていたようだ (その意味でもフォルチュニの製品が出品されていたのは例外的で、おそらくは人集めのためか、パリでの開店を促すためだったのではないだろうか？¹⁶⁾)。したがって、フランス及びイタリアのギピュール・レースへの言及も少なくない。そして、フランスとイタリア各地の刺繍を

順番に説明したあとで、この記事の筆者トゥー＝パリは、展示会場の奥の一角がフォルチュニの製品に当てられていることについて述べるのである。これは筆者に次のエルスチールの言葉を想起させる。

「[前略]。いまここ [バルベック] でおこなわれているような水上の試合もあったので、それはカルパッチョが『聖女ウルスラ伝説』のなかで描いているように、たいていは使節の一行などをねぎらうために催されたのです。船の群れはどっしりとした威容に、大厦高樓の建築を思わせ、深紅のサテンとペルシアのカーペットとに被われた跳橋で岸につながり、さくらんぼ色のプロケード織やみどりのダマスク織を身につけた女たちを乗せながら、色さまざまの大理石をはめこんだバルコンのすぐそばに碇泊している、一方、そのバルコンにいて、真珠をぬいやりばめたギピュール・レースをかざった黒のパフ・スリーブに白が透いて見えるスリット入りのドレスを着た他の女たちは、そのバルコンから身をのりだして下をながめている [後略]」アルベルチヌは、エルスチールが私たちの眼前に描きだすそうした豪華な映像、服飾の詳細を、熱心に、注意を凝らしてきいていた。「ああ！私もいまのお話のようなヴェネチア・レースを身につけたいわ、ずいぶんきれいでしょね、ヴェネチアの刺繍は」[後略]。¹⁷⁾

ここでエルスチールが言及する作品は、カルパッチョの『聖女ウルスラ伝説』シリーズの一つ『婚約者の出会いと巡礼への出発』であると考えるのが自然だが、同時に、ギピュール・レースのドレスを着たヴェネチアの女性は、おそらく、カルパッチョの寓意に満ちた不思議な美しさを呈する『二人のヴェネチアの貴婦人』（ヴェネチアのコレール美術館所蔵¹⁸⁾）を念頭に置いたものだろう。それはさておき、ヴェネチアのギピュールへの言及は見逃せない。続いて、エルスチールはフォルチュニについて言及する。

「[前略]ヴェネチアの芸術家で、フォルチュニという人がその製法の秘密を再発見したとかいうことで、ここ数年も経たないうちに、かつてヴェネチアが貴族階級の女たちのためにオリエ

ントの模様でかざったのとおなじくらい豪華なプロケードを着て、女たちは散歩することもできるでしょうし、家のなかで過ごすことはなおのことできるでしょう。しかし、それが私に大いに気に入るかどうかはわかりません、すこし時代錯誤にすぎた衣装^{コスチューム}になるのではないかな、現代の女性にはね、[後略]。」¹⁹⁾

トゥー＝パリが「現代女性の身繕いにおいてまで最も美しい効果をあげている」と述べるのに対して、エルスチールは現代の女性には時代錯誤になるだろうと、逆の主張をしている²⁰⁾。いずれにしても、ルネッサンス期のヴェネチアからインスピレーションを得た織物が現代の女性にふさわしいものかどうか注目する点においては、共通しているといえるのだ。

IV. アルベール・フラマンによるフォルチュニ (1) ー『レ・モード (Les Modes)』誌より

ボリレによれば、この博覧会におけるフォルチュニの展示に関する記事は少なくないのだ²¹⁾。アルベール・フラマン (Albert FLAMENT) もまた、この展覧会に出品されたフォルチュニの製品に関する記事を執筆している。フラマンは『ルヴュ・ブランシュ』に寄稿していた作家で、プルーストとも旧知の間柄だった。ただし、ジャン＝イヴ・タディエ (Jean-Yves TADIÉ) によると、少なくとも1901年の段階では二人の関係は良好ではなかった²²⁾。しかしフラマンは、1904年と1905年に『レコー・ド・パリ (L'Écho de Paris)』紙上で、プルーストがラスキンの『アミアンの聖書』を翻訳したことに言及しており、この頃には二人の関係は改善していたのかもしれない²³⁾。フラマンはまた、1908年1月18日の『イリュストラシオン (L'Illustration)』紙に、18世紀フランス絵画やターナーのコレクターだったカミーユ・グルー (Camille GROULT) に捧げる追悼文を発表、グルーの絵画コレクションや邸宅に言及している²⁴⁾。この中でフラマンは、ボニ・ド・カステラヌのパレ・ローズと呼ばれた館²⁵⁾の隣にあったグルーの邸で1907年に開催された大規模な夜会にも言及する。このテキストに見られるグルー邸のユベール・ロベール風の噴水や、この夜会でベンガル花火が打ち上げられたことなどには、『ソドムとゴモラ』におけるゲルマント大公夫人邸の夜会の描写との際立った類似が見られ、プルースト自身がこの夜会に参加したか、あるいはこの夜会に関して書かれたも

のに目を通したことを推測させるのである。

さて、フラマンがフォルチュニイについてどのように書いているのか検討しよう。フラマンの記事が掲載されたのはファッション月刊誌『レ・モード (Les Modes)』5月1日号である²⁶⁾。フラマンはこの雑誌で連載を持っていたのだ。

まずフラマンは、フォルチュニイが「ヴェネチアのスペイン人で画家の息子であり、彼自身も画家なのだが絵筆をいったん傍に置き」、舞台照明の分野で「素晴らしい発明」を成しとげたことを説明する。この「照明プロジェクト装置」は「ドイツのいくつかの劇場に採用されている」という。以上は1906年、フォルチュニイがクーポールを商業化するためにドイツで合併会社を設立し、翌7年にはベルリンを代表するオペラ・ハウスだったクロル・オーパーにクーポールが設置されたことに付合する²⁷⁾。続いて、「ここ数年は女性の服飾のための布地を刷新すること」に集中しているという。フォルチュニイはテキスタイルを、①「まずは古代のフレスコや浅浮き彫りから着想し²⁸⁾」、②「鮮やかな色彩のシルク・モスリンのショールに小アジアの縁取りのモチーフや地味な紋様を模写し」、③これら「古代風ののちには、イタリア・ルネッサンスへと向かった」のである。①がデルフォス・シリーズを、②がクノッソス・スカーフを、③がブルーストの小説でも描かれるルネッサンスのテキスタイルを蘇らせたプリント・テキスタイルであることは明白だろう。

フラマンは続いて、「女性の仕事の博覧会」にフォルチュニイが出品した製品について言及する。

ロアンの翼間 (Pavillon de Rohan) にある装飾美術館では、現在、女性による一連の美術工芸品の博覧会が開催されているが、その中にあって、とりわけ強烈に目立っているのがジェノヴァ²⁹⁾とフィレンツェのペロアの複製やヴェネチアのブロケードで、それらはフォルチュニイ氏が、単純なコットンの布地に金糸の輝きを完璧にプリントすることに成功したものである。ペロアの煌めく輝き、光、濃い色彩は、あり得ないような完璧さの次元にある。毛皮で裏を張った生地の中のいくつかは、装いに変化をもたらすことができるものであるという印象を与える。

他には、チュールやモスリンに直にプリントが施されているものがあるが、透けたり薄すぎたりする危険はない。宝石の細かな欠片が散りばめられているかのようだ。陽に照らされた蝶の羽であっても、これ以上の煌めきや多彩さを見せはしない。³⁰⁾

トゥー＝パリによる『ゴーロワ』紙の記事と同様に、ルネッサンス期の織物の、プリントによる複製であることが強調されている。また、蝶の羽との比較は、『囚われの女』において、話者がゲルマント夫人の所有するフォルチュニイのドレスについて尋ねる次の言葉を想起させるだろう。

「それから、このあいだお召しになっていた変な匂いのする部屋着、くすんで、鳥の綿毛のようで、斑紋があって、金色のストライプのある、あの蝶の羽のようなのは？」³¹⁾

事実、フォルチュニイの衣装には、紋様がプリントされたガーゼなどの薄い生地で作られたものが多数あるのである。こうしてフラマンは、フォルチュニイを16世紀の巨匠に比しながら、

素晴らしい布地と、劇場の生気のない背景幕に映る光の戯れ、これらは現代の最も著名な巨匠たちによる空を題材にした全ての絵、全ての海洋画にも勝るとも劣らないのだが、彼はこれらに才能を捧げている。³²⁾

と述べて締めくくる。これは明らかに、フォルチュニイのクーポールを念頭に置いた表現である。筆者は過去に、フラマンに同じく『ルヴュ・ブランシュ』の執筆陣の一人だったカミーユ・モクレール (Camille MAUCLAIR) が1909年、10年、26年にフォルチュニイのクーポールについて論じていること、それと同時にテキスタイル・デザインにも言及していることを指摘した³³⁾。フラマンもまた、フォルチュニイが二つの分野で革新的な仕事を成しとげたことに意識的だったのである。ブルースト周辺の作家たちとフォルチュニイの間に一定の交流があったことは間違いないだろう。

ところで、この「女性の仕事の博覧会」にブルースト

が赴いたのかどうかは不明である。また、新聞や雑誌に掲載されたこの展覧会に関する記事に目を通したのかどうかも不明だ。この展覧会は4月1日から5月31日にかけて開催された³⁴⁾。タディエによると1911年のブルーストは、前年に引き続き『失われた時を求めて』の原型となる『サント・ブーヴに反対する』の加筆に集中していた³⁵⁾。それでも1911年4月から5月のブルーストの書簡に目を通すと、5月21日にはダヌンツィオの『サン・セバスチャンの殉教』の公開稽古を見学するためにシャトレに赴いていることが分かる³⁶⁾。また、23日にアーンに認めた手紙によると、前日にドイツに住むアーンの従兄弟が亡くなっている³⁷⁾。そして、5月の終わりには——ブルーストの人生にとっても、その小説にとっても決定的な事件なのだが——アゴスティネリがブルーストを訪ね、恋人がヴァリエテ座で働けるようにフランシス・ド・クロワッセ (Francis de CROISSET) に働きかけてほしいと頼んでいるようなのである³⁸⁾。また、この頃、兵役免除をめぐる悩みがあり、軍医の訪問を受けたことも分かる³⁹⁾。それから、6月1日にゲテ座で開催され、アーンも参加したガラ・コンサートには睡眠不足が原因で赴いていない⁴⁰⁾。また、モンテスキウが6月1日号の『ジル・プラス』誌上に発表した「サン・セバスチャン」を題材にした絵画に関するテキストや、同じくモンテスキウが『テアトル』誌の6月号に発表した『サン・セバスチャンの殉教』の劇評をブルーストが読んだことも分かる⁴¹⁾。

まだ『囚われの女』構想前で、「フォルチュニのライトモチーフ」については思いもよらないでいたであろうブルーストが、このような状況でこの博覧会に出かけた可能性は低いのかもしれない。ただし、フラマンのこの記事に目を通していた可能性は高いように思われる。なにしろこの1991年5月号の『レ・モード』誌にはモンテスキウも寄稿しているのだから⁴²⁾。

V. アルベール・フラマンによるフォルチュニ (2) —フォルチュニ、セール、バクスト

フラマンが「女性の仕事の博覧会」について執筆したのは『レ・モード』誌だけではない。日刊紙『エクセルシオール (Excelsior)』4月17日号⁴³⁾でも、この博覧会におけるフォルチュニの製品について述べている。これは『レ・モード』誌におけるよりも長くしかも興味深い。フォルチュニ自身に言及しているからだ。

フラマンによれば、この博覧会には刺繍類だけではなく「モダン・スタイル」の布地も出品されているが、

これらは「苛立ちを表すと共に人を苛立たせる場合もある、なぜならば、奇抜さを過剰に追求したものでしかないからだ」と批判する。フラマンにとって「モダン・スタイル」という語が、外国嫌悪に基づく軽蔑的なニュアンスで用いられていることはソフィー・バッシュ (Sophie BASCH) が明らかにしたことだ⁴⁴⁾。だが、フォルチュニのテキスタイルは大胆ではあっても奇抜さを追求したようなものではない。少々長いが引用したい。

しかしながら、会場の奥の薄暗いスペースにルネッサンスの生地が山積みになっているが、これらは金糸を織り込んだペロアで、大きな紋様が調和して上品に繰り広げられ、これ見よがしではあるが理性的な均衡を保ちながら規則正しいリズムで絡まりあって展開される。隣には、北アフリカのチュニック (gandourah) の形をし、ビザンチンのモザイクのようなさまざまな色合いの、極めて繊細な中国の浮模様 (brocatelle) の大きなコート。ありえないほど柔らかいドレスは、玉虫色かあるいはオパール色の反射の混じった、金色のあるいは真珠の光沢のある装飾で彩色されたチュールである。

巡礼コートのような頭巾付きの黒いアルスター・コート (ulster noir à pèlerine) を纏い、短い顔の半分を覆う髭をたくわえ、頑丈 (robuste) そうだが疲れても見え、茶色い目が知的な善良さ、穏やかだが絶えることのない好奇心を表す、これらの染色の創造者、これらのペロアのチェッリーニ (*16世紀フィレンツェの彫刻家で画家)、これらのトワルのヴェロネーゼがここにいる、彼は自分の選択を愛し信頼する名人の穏やかでもある荒々しさでこれらの織物に触る。

遠くからは誤ってペロアに見えたもののコトンの横糸をマリアノ・フォルチュニ氏は見せてくれる、これは丈夫だが、16世紀の豪華な布地の表面に触知されるペロアのような滑らかさはない。驚くべき技法によって、ペロアのような錯覚を与えているのだ、それは、舞台芸術に革命をもたらすであろう光の戯れによって、海と空や、嵐の陰鬱で夢幻的光景や、朝ぼらけから日の出にかけての知覚できないほどに穏やかな大気の動きを彼が生み出すのと同じである。

ヴェネチアで活動する、スペインの著名な画家の息子は、父親が有名になったのと同じ分野で抜きん出た活躍をしたのち、自らの想像力を羽ばたかせることにした。多くの者たちが画架にかけるための小さな絵画を制作することに悲しくも疲れ果てるものだが、そのようなことは彼には起こらないだろう、そうではなくて、彼は光を操り、麻のごわごわした織物を染色桶に浸し、蜘蛛の巣のように軽く薄いモスリンに宝石の反射を描き出すのだ…そして、全てが衰退する時代、流行の「スタイル」が、馬鹿げた横暴さで空白と白い色とを推奨する時代に、我々の国民的天才たちは何一つ主張することができないにもかかわらず——なんということか！——フォルチュニイは、[スペイン人の] ジョゼ＝マリア・セールや、[ロシア人の] バクストと同じように、色彩と装飾の形態、そして、陽の光には生き生きと反射し、日陰では、まるでコンサートでチェロやコントラバスが弱音を奏するような陰影、小さな声で歌っているかのような陰影、これらへの好みを我々にもたらすのだ。⁴⁵⁾

まずフラマンは、フォルチュニイのルネッサンスを思わせるテキスタイルを描写する。それは、唐草模様のように同じ紋様が布地一杯に繰り返されるプリント、ビザンチン様式のモザイクを思わせる色彩、多彩な光沢を特徴とするのだ。フラマンは流行の「モダン・スタイル」を批判することも忘れない。続いてフォルチュニイの風采を描写する(レニエも『アルタナ、ヴェネチアでの日々』で、フォルチュニイの頑丈な(robuste)身体と顎髭、司祭のような服装(simarre)に言及していた⁴⁶⁾)。次に、16世紀イタリアの画家との比較が続く。重要なのは次からであろう。フォルチュニイの織物はペロアに見えても綿や麻なのだ。特殊な技術によってペロアのような「錯覚」を与えているのである。それは、フォルチュニイの革命的舞台照明装置と同じである。フラマンはいう。フォルチュニイは、父親と同じ絵画の道は諦めた。しかし、テキスタイルと照明の分野で創造的な仕事を成し遂げている。つまり、彼のテキスタイルと照明は芸術作品だと主張しているに等しい。プルーストがフォルチュニイの衣装をモードではなく芸術作品と見做していたことは過去の拙稿で筆者が明らかにしたことでもある⁴⁷⁾。だから

こそエルスチールも、「ヴェネチアの芸術家」と述べているのである。

そしてセールとバクストの名である。フラマンの主張は、パリで活躍する外国人芸術家こそが、流行りの美しくもない外国由来の「モダン・スタイル」に抗っている、ということだろう。同時に筆者の興味を引くのは、バクストのバレエ・リュスでの活躍はこの時すでに周知であり、セールもまた、1914年の『ヨゼフ伝説』ではバクストと共に美術を担当することになることなのだ。ここでプルーストの読者の耳に響くのは次の一節にちがいない。

それらの[フォルチュニイの]ドレスはむしろセール、バクスト、ブノワの舞台装置風であった、これらの人たちは、そのころ、バレエ・リュスにおいて、人々にもっとも愛された芸術的な諸時期を喚起するためにそれらの時期の精神に色濃く染め上げられながらしかも独創的である芸術作品の上演をめざしていた[…。]⁴⁸⁾

プルーストはまた、次のようにも書いている。

[カルパッチョの『悪魔に憑かれた男を治療するグラドの総司教』で描かれる人物たちの衣装は]セール、シュトラウス、ケスラーによるあのまぶしいばかりの『ヨゼフ伝説』でカルパッチョを如実に喚起した人物に似ていること、まるで目をうたがうばかりだった。⁴⁹⁾

フラマンのテキストを読んだ後でこの二つの文を再読すると、プルーストが引用する芸術家は——当然といえど当然だが——どれも外国人であることに気がつく。バレエ・リュスがフランス人の眼に「エキゾチック」なものとして映ったことは間違いない⁵⁰⁾。やや本稿の論旨から逸脱するが、プルーストも草稿の中で次のように述べていることに注意したい。

[ベルゴットは]大新聞に戦争に関する記事を毎日書いていた。[中略]彼は[戦争]から哲学をひきだしてほしいと頼まれた。彼はそうした、苦勞して。もしフランスがロシアと交戦中であつたなら、ベルゴットの使命はもっと容易だっただろう。ベルゴットがラテン人には理解不能の黒人趣味^{ネーグール}の氣晴らしと呼んだバレエ・

リュスにおける退廃と野蛮な趣味、トルストイの反軍国主義、ドストエフスキーの登場人物の[中略]支離滅裂さ、これらは、われわれの貯蓄から何百万フランにもわたる額がロシアに流失していた時期に、ぞっとするような文句で大っぴらにいわれていたし、ベルゴットの洗練された趣味にも合う考え方だった。だから報復的な記事に確固たるテーマで生気を与えたかもしれない⁵¹⁾

これは第一次世界大戦をめぐるテキストであり、おそらくはロシア革命よりも前に位置するものだったのだろう。だから、「ロシアと交戦中であれば」と記されているのだろう(ロシア革命後であれば、ベルゴットもおおぴらにロシアを批判するだろうから)。ロシアが同盟国であるにもかかわらず、フランスからロシアに流失する金額を思っロシアの芸術を批判する者もいたというのである。ベルゴットはどうかというと、そもそもフランス的洗練を愛するためにロシアの芸術に批判的であり、バレエ・リュスを退廃的で野蛮だと断じていたのである。プルートがバレエ・リュスに向けられた排外主義的な批判に意識的だったのは間違いない。

遠回りしたが、このフラマンのテキストをプルートが読んだことは大いにありうるのではないだろうか？ バレエ・リュスとフォルチュニをプルートがしばしば併置するのは、フォルチュニが、プルート自身がバレエ・リュスの特徴であると考えた舞台照明装置の改革者であることを知っており、また、『ヨゼフ伝説』がヴェネチアを舞台にする、アルベルチヌのように愛されすぎた者の悲劇とその復活を描いているからだだろう。バレエ・リュスのスタッフによって製作されたダヌンツィオの『サン・セバスチアンの殉教』にフォルチュニの痕跡のあること、そしてこの音楽劇が同性愛を暗示することも理由だろう。このようにして、フォルチュニとバレエ・リュスの主題を通してアルベルチヌをヴェネチアに結びつけ、「フォルチュニのライトモチーフ」をアルベルチヌのための音楽として完成するためだろう⁵²⁾。だが、もしかしたら、フラマンがフォルチュニに関連づけて記したセールとバクストの名の記憶が、1914年5月の『ヨゼフ伝説』とその上演に続いた大戦の勃発によって蘇ったのかもしれないのだ。

VI. マリー・ド・レニエによるフォルチュニ

マリー・ド・レニエもまた、5月1日の『フィガロ』紙に「女性の仕事の博覧会」に出品されたフォルチュニのドレスに関する記事を寄稿している。タイトルは「魔術師(Un Magicien)」である⁵³⁾。これは、『囚われの女』におけるフォルチュニのドレスの描写を想起させるものでもある。所々和訳しながら、全体を読んでいきたい。まず、次のように始まる。

私は日中の空の透明なブルーを、水の紺碧の煌めきを見ていた、そして私の眩んだ視線の前を大きな黄色い蝶たちが、野生の花々の芳しい雌しべを燃やし尽くすために太陽からやってきた小さな炎が過ぎていった。[前略] これらの蝶たちが、美しい金色の菜種が、自らの使命として光の糸と絹を繰り、晴天の空のブルーによってそれらをぴんと張り、眩いほど煌めかせながら、不動の横糸に織り込んでいるところを私は思い描く。

すると突然、似たような見事な布地を[中略]見たことがあることを思い出した。事実、わずか数日前、魔術師マリアノ・フォルチュニの、どんな妖精の魔力を使っただろうと思わせるような[中略]ドレスとテキスタイルが集められた装飾美術展覧会で、それを見たのだ。⁵⁴⁾

「黄色の蝶たち」が、フォルチュニのドレスを導くためのレトリックにすぎないことは明らかだろう。つまり、空や海のブルーの地に黄色の蝶が舞っているようなドレスを見たのである。これは、先ほど引用したゲルマント夫人の部屋着の「^{ローブ・ド・シャンブル}金色のストライプのある」⁵⁵⁾「蝶の羽」を思わせるのはもちろん、アルベルチヌの「金と青のフォルチュニの^{ローブ・ド・シャンブル}部屋着」を想起させる。しかもこのドレスは「青と金色の地にばら色のうらがついた」ドレスであるとも書かれ、次のように描写される。

あたかもヴェネチアの町が、[中略]、服地の鏡のような煌きのなかに、深い青で映っているかのようであり、その青は私が視線を近づけるにつれて、やわらかくのびる金に変わり、その変質してゆくさまは、進んでゆくゴンドラの手前で大運河の紺碧が火炎の色をなす金属に変質してゆくものと同じだった。ドレスの

袖にはさくらんぼのピンクのうらがあたっていたが、それはティエポロ・ピンクと呼ばれるほどヴェネチアに独特の色なのだ⁵⁶⁾

つまり、両者とも、青い地の色に輝く黄色や金色の模様が輝いて見えるさま、光の加減で光沢が変化するさまを描写しているのだ。また、アルベルチヌス^{ローブ・ド・シャンブル}の部屋着の場合は、青の地に裏地のピンクが映えているのである。

マリーは続いて、博覧会の話に移る。マリーは、新品のドレスというものは「常に未完成」なのだという。新品のドレスには着る者の「無意思的な空想や個性」が欠けているからだという。だから、すでに誰かが身につけたことのあるドレス（つまりヴィンテージ・ドレス）には独特の魅力がある⁵⁷⁾。執政官時代や帝政期の服飾、あるいはインドやベルシャのエキゾチックなショールや中国や日本の古い衣類には、「距離も時間も離れた場所の仕草の反映」がある。「だから、自宅でトルコや中国の羽織^{マントー}を身につけたことのないおしゃれな女性はいないのだ」。これらの衣服には「夢」があるから。「喚起力」があるから。

マリーによれば、フォルチュニイの製品にもまた、夢や喚起力があるのである。

あの青髭の小部屋の扉を不意に開けてしまったかのようにあり、若くして死んだ女たちのドレスをまだ生き生きとした華麗さの中で見せられたかのようにあり、あるいはまた、年老いたトルコの将軍(émir)の若い妻の宝物や、スルタンの妻が旅に出立するにあたり乱雑に残していった豪華で魅惑的な装飾品なのである。⁵⁸⁾

続いてマリーは、フラマンに同じく北アフリカのチュニック(gandoura)風^{マントー}羽織について説明しながら、フォルチュニイが金銀のプリント技術を発明したと述べる。また、「この青い羽織^{マントー}」は「ピンクと金で装飾されている」という。またもやアルベルチヌスのドレスを想起させる。

マリーはドレフォス・シリーズと考えられる、ギリシャのフルート吹き^{フルート}のチュニックのような、直線的ラインのブリーツ・ドレスにも言及しながらフォルチュニイの製品の描写を続け、次のように述べる。

〔前略〕これらの布地の全ては〔中略〕、王家の

墓やミイラの石棺や水が引いた後のプルターニュの伝説の町イスのようなところで発見されたものの様相を備えている。⁵⁹⁾

マリーは先ほども、「若くして死んだ女たちのドレス」という表現を用いていたが、ここでは死の影がいつそう深まるのだ。マリーはさらに続けて、昔々、官能的な王女たちが、悲しそうな高級娼婦たちが、スルタンの殺された妻たちが、古代の貴族の美しくて大胆な女性たちがこれらのドレスを纏ったことを想像する。そして輪廻転生（と筆者には思われるのだが）をも暗示しながら、次のように述べる。

ドレスとは、普通、誰かが身につける前には未来しかないものだ… フォルチュニイのドレスは、纏われる前からすでに過去を持っている、それが、明日纏うであろう女の美しさにメランコリックな優美さを与えるのだ。

これらは死んだ女たちのドレスなのだ… 私たちが多分かつてそうであった(des robes[…]
des mortes que nous fûmes peut-être)、そして必ずそうなるであろう死んだ女たち…⁶⁰⁾

続いてマリーは、クノッソスと思われるショールをブシケやクレオパトラの比喻を用いて描写する。マリーにとっては、過去に生きた女たち、死んだ女たち、そして私たちもいつか死んだ女になることを思わせる何かこそが、フォルチュニイのドレスの魅力なのである。

次にマリーは、フォルチュニイが昔の織物の色彩を再現するために研究を重ねてきたことを説明する。そして、フラマンに同じく、フォルチュニイが画家の息子であり、フォルチュニイ自身も画家であることに言及しながら、「彼の特異な発明の才能が自然と人を驚ろかせる巧妙さと、特別な芸術的センスに結びついて、“命ある”芸術(art « vivant », 公衆を前にした芸術表現)を試してみるよう促したのだ」と述べて、フォルチュニイの活動が芸術と呼ぶべきものであるとほのめかす。

マリーはまた、フラマンに同じくフォルチュニイの照明に注目し、「光」と「色彩」は「姉妹」であると述べる。続いて、ベアルン夫人のビザンチン・ホールの柿落として演じられたバレエに言及し、このバレエの照明の美しさを描くのだ。そしてフォルチュニイの照明は、一日の光の変化を表すことができると説明し、フォルチュニイ

の布地についても「朝の光の陰影、太陽、夜、朝ぼらけ、そして月光が、青いガーゼや絹が鏡のように煌めくラグーンの水面であるかのように反射する」と述べるのである。フォルチュニのドレスもまた光の芸術なのだ。これは、先ほど引用した『囚われの女』において、フォルチュニの布地が「鏡のような煌めき」や「金」や「金属」や「炎」⁶¹⁾という言葉で表現されていることに付合するだろう。

マリーは続いて、フォルチュニが水の街、モザイクの街、光の街ヴェネチアの人であることを強調する。最後には「海の上の黄色い蝶たち」に戻り、芸術家フォルチュニに「非物質的で命ある(vivant) 一日の美しさを前にして、人間の手が作り上げた作品を想起するという、芸術家に贈りうる中で最も真摯で最も美しい褒め言葉を捧げるのである。つまり、再現としての芸術作品が現実の自然の美を想起させるのではなく、なまの自然の美の方がフォルチュニの作品を想起させるのだ。

フォルチュニのドレスは死んだ女たちのドレスなのだが、同時にそれは自然が生み出す命の美しさに違わぬものなのだ。果たしてこのテキストが、販売促進に役立つものと問われれば少々疑問である。それにしても、ブルーストを想起させずにはいないテキストだ。何しろアルベルチヌが纏った「金と青の部屋着」は、「死と生」を意味する二羽の鳥がモチーフの「不吉な」⁶²⁾ドレスなのだから。アルベルチヌは文字通り「若くして死んだ女」になってしまうのだから。しかし、この二羽の鳥が意味するものは「生と復活」⁶³⁾でもあるのだ。

また、マリー・ド・レニエとブルーストの関係も考慮しなければならない。このテキストをブルーストが知らなかったことはありえないのではないだろうか？ 若きブルーストは、レニエやピエール・ルイやモクレール、そしてモンテスキウに同じく、マリーの父親ジョゼ＝マリア・ド・エレディアの土曜日のサロンの常連だったのであり⁶⁴⁾、1894年にエレディアがアカデミー・フランセーズの会員に選ばれたのに際し、マリーがお遊びで自ら女王となり結成した「アカデミー・カナック(Académie canaque)」の常任秘書(!)を務めていた⁶⁵⁾。また、ブルーストは、1911年の4月8日頃にロベール・ド・ビリーに宛てた書簡の中で、レニエ夫妻の「悲しい家庭不和」に言及しているが⁶⁶⁾、実際、この手紙からわずか一週間後の4月16日、マリーは当時の愛人でブルーストの友人でもあった作家のアンリ・ベルンシュタイン(Henry

BERNSTEIN) とコート・ダズールに旅立ち、レニエも23日には一人でヴェネチアに向かったのである⁶⁷⁾(マリーの「魔術師」はすでに執筆されていたのだろうか？ それとも「海の上の黄色い蝶たち」の「海」とはコート・ダズールの海なのだろうか？) プルーストはレニエ夫妻の私生活に詳しく、また興味もあったのだろう。そして、この二人とプルーストの間には生涯にわたって交流が続いたのである。

VII. 終わりに—1908年のレニエによる光に戯れる織物

ところで、ジャン・ミイ(Jean MILLY)は、レニエがフォルチュニに関するテキストを公に発表したのは、1928年の『アルタナ』が初めてであると述べている。だが同時に、発見されていない記事などが存在する可能性に言及している⁶⁸⁾。一方、前述のポリレは、レニエが執筆し1908年8月31日号の『デバ紙(Le Journal des Débats)』に掲載された、パリの劇場における技術革新に関する記事を紹介している⁶⁹⁾。ここでレニエは、フォルチュニの舞台照明装置について詳細に説明しているが、同時に、ヴェネチアのパラッツォでフォルチュニの(正確にはその母の)「古いテキスタイルの素晴らしいコレクション」を見学したことに言及している。

私は今でもある日の午後を彼の家で過ごしたことを覚えている。古いテキスタイルを閉じ込めた大きな長櫃がいくつかあって、そこから注意深い手が貴重な織物を取り出すのだった。それらは15世紀から16世紀の古いペロアで、壮麗で重々しく、くすんだ色もあれば色鮮やかなものもあり、大きな葉叢模様もあれば繊細なアラバスクもあり、ヴェネチアの総督かトルコのカリフが纏ったのであろう、ヴェネチアのペロアもあればオリエントのペロアもある。それらはまた、あらゆる色の、あらゆる陰影の、さまざまな時代のブロードやシルクで、教会の装飾や女性のドレスであり、バラ窓模様や小花模様で、神秘の長櫃から尽きることなく取り出され、広い部屋の石を張った床に次々と山積みになるのだ、そしてこれらの織物の魔法のような反映のあいだを、ヴェネチアの光が戯れていたのだ。⁷⁰⁾

『アルタナ』に含まれるフォルチュニの母親の織物コレクションをめぐるテキストは、『未発表カイエ』⁷¹⁾

に書かれた文章（日付は1908年1月1日）を基にしている。この『デバ』紙におけるテキストがその縮約版であるのは疑いようがない⁷²⁾。『未発表カイエ』には11月にフォルチュニ夫人のコレクションを見たとき書かれているが、『アルタナ』に記された日付からも分かるように、1906年夏に、妻マリーを伴いベアルン夫人のニルヴァナ号で地中海クルージングを楽しんだ際に、マリーと一緒に見学したものである。

レニエは次のように続ける。

これらの古い布地の魔法が、ヴェネチアの空の魔法が、マリアノ・フォルチュニ氏を自分自身も魔術師になるよう駆りたてたのではないだろうか？ そして電気がその秘密を教えた妖精なのではないだろうか？ とにかく、フォルチュニ氏は、この時代の最も巧みな電気技師の一人なのだ…そして、彼はその巧みさを劇場に応用し、現在使用されている型にはまった照明の代わりに、垂れ幕や舞台天井から吊るす照明や、俳優たちを普通に照らすフットライトの排除を可能にする、いわば自然な光を劇場に導入したのである。⁷³⁾

1908年、フラマンやマリー・ド・レニエに先立って、レニエこそがフォルチュニの芸術の本質は光の戯れにあると述べていたのである。ブルーストにとってもフォルチュニは光の芸術家である。バレエ・リュスの魅力が照明の魔力にあるように、フォルチュニのテキスタイルもまた、光の戯れに輝きを変えることにこそ、その魅力があるのである。陽の光によって、空のブルーが反射し煌めくヴェネチアの運河のように。

注

『失われた時を求めて』はブレイヤード版（1987年～1989年出版、全4巻、略記号はRTP）を使用した。日本語訳は井上究一郎訳（筑摩書房）を用いたが、若干の変更を加えさせていただいた箇所がある。書簡集はPlon社のPhilip KOLB編集（1970年～1993年出版、全21巻、略記号はCorr.）を参照した。なお、書簡の翻訳は筆者による。

- 1) *L'Altana, ou la vie vénitienne*, tomes I et II, Paris, Mercure de France, 1928. 拙稿「水の街、記憶の街ーブルーストとアンリ・ド・レニエのヴェネチアをめぐるー」（文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要 第53集 2022年、pp.

57-69）を参照していただきたい。

- 2) « *Italie retrouvée*, II (1), lettre de Venise », in *Revue des Deux Mondes : littérature, histoire, arts et sciences*, N° 12, le 15 juin 1949, pp. 660-678, pp. 663-664. このテキストはフォルチュニに捧げられているともいえる。というのも、ヴェネチアにはフォルチュニが照明を設置した教会が二つあるのだが、その両者、ティントレットで有名なサン・ロッコ教会とカルパッチョで有名なサン・ジョルジョ・デリ・スキアヴォーニ教会とに多くのページを割いているからである。そして、サン・セバスチャン教会のヴェロネーゼによる天井画や、サン・パンタロン教会のアントニオ・フミアーニによる天井画にもフォルチュニの照明が必要なのだ、と述べているのである（ヴォドワイエはZanantonio Fumianiと書いているが、Antonio Fumianiで間違いないだろう）（*ibid.*, pp. 675-677）。ちなみにフォルチュニは、このテキストの発表に先立つ5月3日に亡くなっている。

なお、上記二つの教会におけるフォルチュニの照明については次の論稿を参照のこと。Maria-Àngels ROQUE, « Mariano Fortuny Madrazo : The Luminous and Cosmopolitan Mediterranean », in *Quaderns de la Mediterrània* 15, European Institute of the Mediterranean (IEMed), 2011, pp. 117-125.

<https://www.iemed.org/wp-content/uploads/2011/09/Mariano-Fortuny-Madrazo.pdf>

- 3) この点については、拙稿「ブルーストとフォルチュニの交差点ー“ビザンチン・ホール”とフォルチュニの舞台照明ー」（文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要 第49集 2018年、pp. 119-132）、「“花咲く乙女たち”の群舞ーフォルチュニの舞台照明とバレエ・リュス、そしてブルーストー」（文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要 第50集 2019年、pp. 85-99）を参照していただきたい。
- 4) Robert FLEURY, *Marie de Régner*, préface de Geneviève DORMANN, texto le goût de l'histoire, collection dirigée par Jean-Claude ZYLBERSTEIN, première édition, 1990, Paris, Éditions Tallandier, 2008, pp. 167-168.
- 5) *Martine de Béhague. Comtesse de Béarn 1870-1939. Le Mécène oublié*, Suresnes, Emilewen Éditions, 2021, pp. 74-75. Cf. Jean-Paul GOUJON, *Dossier secret Pierre Louÿs-Marie de Régner*, Paris, Christian Bourgois, 2002. また、『不実な女と官能詩人』なる邦題で日本でも公開されたLou JEUNET監督の*Curiosa*（2018年）はこれらの資料に基づく。
- 6) « *Le muet langage des robes* ». *Mode et société dans l'œuvre de Marcel Proust*, thèse soutenue à l'Université Ca'Forscari Venezia, en 2016.
- 7) このコレクションについては、図書館のサイトを参照のこと。フォルチュニの妻アンリエットの友人だったマリウッティ（Angela MARIUTTI de ÁNCHEZ RIVERO）氏による寄贈に基づくようである。寄贈は1971年。
<https://bibliotecanazionalemarciana.cultura.gov.it/la-biblioteca/il-patrimonio/patrimonio-librario/fondi/fondo-mariutti-fortuny>
- 8) *Fondo Mariutti-Fortuny*, Rassegna stampa 2, n° 154, cité in « *Le muet langage des robes* ». *Mode et société dans l'œuvre de Marcel Proust*, op. cit., pp. 119-120. ボリレは、この記事がどの新聞に掲載されたのかは不明だと述べている。また、日付は鉛筆書きで正確なものかどうかは分からないという。新聞記事の切り抜きだからだろう。また、1908年7月4日の『*Comœdia*』

紙からは、フォルチュニがプリモリ伯爵のパーティーに招待されていたことが分かるという。

なお、ビザンチン・ホールについては拙稿「ブルーストとフォルチュニの交差点―“ビザンチン・ホール”とフォルチュニの舞台照明―」(前掲書)を参照していただきたい。この柿落としにブルーストが参加していなかったことは確かであると筆者は考える。また、スタジは、4月4日の『フィガロ』紙を引用し、3日間続いた柿落としから数日後に開催された「二回目のオープンニング・コンサート」にはグレフュール夫人の姿もあったことを指摘している。この記事には、プールタレ夫人の名前も見えることをつけ加えたい(Martine de Béhague, *Comtesse de Béarn 1870-1939. Le Mécène oublié*, op. cit., pp. 345-346 et *Passe-Partout*, « LA VIE DE PARIS – une Fête de la Lumière », in *Le Figaro*, le 4 avril 1906)。後者は「光の祭典」というタイトルが示すように、フォルチュニによる照明の効果に焦点を当てている。

また、スタジは、ブルーストがベアルン夫人について時に皮肉な調子で言及しているのは、ロベール・ド・モンテスキウが夫人を毛嫌いしていたことが原因だろうと推測している。モンテスキウが夫人に辛辣に当たった理由についてスタジは、①巨万の富への嫉妬、②夫人自身はカトリック教徒だったが先祖はユダヤ教徒だったこと(つまりモンテスキウの反ユダヤ主義)の二点をあげている(*ibid.*, pp. 53-58)。なお、バレエ・リュスの初公演に尽力したメセナは、グレフュール伯爵夫人、ミシア・エドワード(後のミシア・セール)、シュヴィニエ伯爵夫人、そしてベアルン夫人の四名だったことが、このスタジの著作によって明らかになった(*ibid.*, p. 169)。

9) オズマの著作は次。Guillermo de OSMA, *Mariano Fortuny. His Life and Work*, translated in English by Sander BERG, Victoria & Albert Museum Publishing, 2015。

10) *Corr.*, t. IX, p. 94, la lettre 47. なお、1906年のアーン宛の書簡からは、この頃にはフォルチュニ一家と面識のあったことが窺える(*Corr.*, t. VI, p. 197, la lettre 111)。

なお、スペインのテラッサにある Centre de Documentació i Museu Tèxtilが、ブルーストが所有していたらしいフォルチュニの室内着(英語でgownとある)を所蔵していることが判明した。博物館のサイトには、関連する固有名としてブルーストの名が記されており、カタルーニャ語と思われる言語で「Aba, dissenyada per Marià Fortuny, que va ser propietat de Marcel Proust i Reynaldo Hahn」と説明されている。ブルーストだけではなくアーンにも関連する衣服であることは間違いないだろう。見たところ、日本の羽織のような形状で、茶色がかったオレンジ色の薄い絹で製作されている。

http://imatex.cdm.t.cat/fitxa_fitxa.aspx?m=n&num_id=23084&t=156

11) 筆者が調査した中で最も詳細な記事は、『*Art et décoration*』誌に掲載されたMaurice GUILLEMOTによる「L'Exposition des arts de la femme au Musée des arts décoratifs」(janvier – juin 1911, pp. 138-156)である。出品された刺繍の写真が多数掲載されている。またこの記事は、フォルチュニを紹介して終わるが(「マリアノ・フォルチュニ氏は美の協力者なのだ」、和訳は筆者)、ここにはベアルン夫人邸の劇場に設置されたクーボールへの直接の言及が見られる(*ibid.*, p. 156)。

12) « Bloc-Notes Parisiens », cité in « *Le muet langage des robes* ». *Mode et société dans l'œuvre de Marcel Proust*, op. cit., p. 121. 以下この記事の和訳は筆者による。この1911年4月8日号の『ゴーロワ』紙で特筆すべきは、ブルーストの幼馴染

染でフェリックス・フォール大統領の娘である Lucie FÉLIX-FAURE GOYAU による連載記事「L'Évolution Féminine」が掲載されていることだろう(副題は「Les Deux Féminismes」)(Feuilleton du « *Gaulois du dimanche littéraire* », *le Gaulois*, op. cit., p. 4)。ボリレは、同じくFÉLIX-FAURE GOYAUが5月20日号の同連載において「Art Féminin」という副題のもとフォルチュニに言及していることに注目している。ここでFÉLIX-FAURE GOYAUは、「女性の仕事の博覧会」と、マリー・ド・レニエがこの展覧会に出品されたフォルチュニのドレスについて執筆し『フィガロ』紙上で発表した「Un Magicien」に言及しているのである(このマリーのテキストについては後述する)。

なお、ボリレは、ブルーストがしばしば「Tout-Paris」という筆名でサロン評を執筆していたことを強調する。例えば、同じく『ゴーロワ』紙(1894年5月31日号)に掲載された« Une fête littéraire à Versailles »である。

13) 次の論考によって、デルフォスのプリーツ技術を発明したのが、実は、のちにフォルチュニの妻となるアンリエット・ニグラン(Henriette NIGRIN)であることが明らかになった。Alba SANZ ÀLVAREZ « Mariano and Henriette Fortuny : Notes on Co-Creating the Delphos Gown », in *The Fashion Studies Journal*, 2022. 筆者は次のサイトから閲覧した。

<https://www.fashionstudiesjournal.org/partnership-content-a/2022/4/22/mariano-and-henriette-fortuny-notes-on-co-creating-the-delphos-gown>

14) 「ブルーストとフォルチュニの交差点―“ビザンチン・ホール”とフォルチュニの舞台照明―」(前掲書)、及び「“まだ見ぬヴェネチアの心惑わす幻影”マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』におけるフォルチュニとバレエ・リュス」(文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要 第51集 2020年、pp. 95-109)を参照していただきたい。

15) ガネー夫人の息子でベアルン夫人の甥であるユベール・ド・ガネーはブルーストの友人として知られる。また、2017年にパリ市立パレ・ガリエラ服飾美術館で開催されたフォルチュニ展のカタログによれば、ベアルン夫人も実行委員会のメンバーだったという(Mariano Fortuny, *Un Espagnol à Venise*, le catalogue de l'exposition, Paris, Paris Musées, Les musées de la ville de Paris, 2017, p. 28)。

16) トゥー＝パリは、「しかし、私たちがすぐにも駆けつけて見たいと思うのはフォルチュニのトワルやコットンやシルクやチュールのプリント・テキスタイルなのだ」と述べている(« Bloc-Notes Parisiens. Dentelles et dentellières », in *le Gaulois*, op. cit.)。また、ボリレが引用する*Le Paris-Journal*紙の1911年4月9日号の記事も、フォルチュニの製品が「千夜一夜」を思わせるプリント・テキスタイルで、「古い服飾品の復元」であることを強調しつつ、「この博覧会の最大の魅力の一つはフォルチュニのイタリア製テキスタイルだろう」と述べている(Fondo Mariutti-Fortuny, *Rassegna stampa* 3, n° 208, cité in « *Le muet langage des robes* ». *Mode et société dans l'œuvre de Marcel Proust*, op. cit., p. 121、和訳は筆者による)。フォルチュニの製品がこの博覧会の目玉として出品されていたのは間違いないだろう。

17) *RTP*, II, p. 252.

18) 2011年に東京江戸博物館で開催されたヴェネチア展でも紹介されたこの作品については、コッレール美術館の公式サイトで確認できる。

<http://www.archiviodellacomunicazione.it/sicap/>

- ラスキンが1884年に「世界で一番美しい絵」と述べた作品である（ジャンドメニコ・ロマネッリ「二人の貴婦人」松原知生訳、「魅惑の芸術－千年の都 世界遺産ヴェネチア展」《二人の貴婦人》別冊、東京都東京江戸博物館、2011年、p. 9）。なお、『囚われの女』にはこの作品への言及が見られる（*RTP*, III, p. 879）。ただし、プルーストは当時の通説に倣い、この作品の主題を「二人の高級娼婦」としている。
- 19) *RTP*, II, pp. 252-253.
- 20) エルスチールと同様に話者もフォルチュニのドレスを時代錯誤であると考えている。おそらくプルースト自身の見解なのだろう。この点については、拙稿「“まだ見ぬヴェネチアの心惑わす幻影”マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』におけるフォルチュニとバレエ・リュス」（前掲書）を参照していただきたい。
- 21) « *Le muet langage des robes* », *Mode et société dans l'œuvre de Marcel Proust*, *op. cit.*, p. 121.
- 22) *Marcel Proust*, Paris, Éditions Gallimard, 1996, p. 396, la note 1.
- 23) *Corr.*, t. VI, pp. 92-95, la lettre écrite à Gaston Calmette vers le 1^{er} janvier en 1906. この書簡の注6によると、フラマンがプルーストの翻訳に言及したのは、二度とも『レコー・ド・パリ』紙の連載「Le Trottoir roulant」においてである（フラマンは「Sparklet」という筆名を用いている）。つけ加えれば、プルーストは、1905年にモンテスキウを主賓に自宅で催した夕食会にフラマンを招待している。また、1913年にフラマンに再会した際には好印象を持ったことをリュシアン・ドーデへの書簡の中で明かしている（*Corr.*, t. XII, p. 255, la lettre écrite vers la fin d'août）。
- 24) この点については、拙稿「失われた視線のコレクター－プルーストとカミーユ・グルー」（文化学園大学紀要 人文・社会学研究 第23 集、2015年、pp. 69-88）を参照していただきたい。
- 25) パリ16区のマラコフ大通り122番地。
- 26) « Notes sur ce temps-ci », in *Les Modes*, n° 125, mai 1911, pp. 2-3, p. 3. 以下、この記事の和訳は筆者による。また、この雑誌に掲載された多くの挿絵からは、1911年には、ディレクトワール様式のドレスと大きな帽子が流行していたことが分かる。『スワン家の方へ』の終盤で話者が述べているとおりである（*RTP*, I, p. 417）。
- 27) 前述の1911年5月の『*Art et décoration*』誌には、ヴォドワイエによる「Léon Bakst」も掲載されている（*op. cit.*, pp. 33-46）。ヴォドワイエはバレエ・リュスの舞台装置に注目し、「ここには現在明らかになりつつある重要な運動が認められる。ロンドンのゴードン・グレイグ氏や、ベルリンの劇場やミュンヘンの Künstler Théâtre やモスクワの芸術劇場のマリアノ・フォルチュニ氏がこの運動の中心人物であり、最も優れた証拠でもある」と述べている（*ibid.*, p. 36、和訳は筆者）。後述のモクレールに同じく、フォルチュニの照明装置がドイツやロシアの劇場に設置されていることをヴォドワイエも知っており、フォルチュニの舞台照明とバレエ・リュスのそれには関連性のあることに気がついていたのである。
- 28) 筆者は過去に、『花咲く乙女たちのかげに』で見られる少女たちの登場が、①古代ギリシャの、女性をかたどった彫刻やフリーズに描かれる女性たち、②舞台上で照明を浴びて踊るダンサー、③バレエ・リュスの『レ・シルフィード』の妖精、この3つへの暗示によって描かれていることを指摘した（『花咲く乙女たち』の群舞－フォルチュニの舞台照明とバレエ・リュ

- ス、そしてプルースト」前掲書）。例えば、小説の話者は少女たちを「とある行列をあらわす古代のフリーズか壁画（quelque frise antique ou quelque fresque figurant un cortège）」に見られる「行列の神仕えの処女たち」（*RTP*, II, p. 153）に喩えている。この比喩には、ここで引用したフラマンの言葉との類似が認められるのかもしれない。そうであれば、先ほどの「①古代ギリシャの、女性をかたどった彫刻やフリーズに描かれる女性たち」は、フォルチュニのデルフォス・ドレスへ暗示でもありうるのかもしれない。
- 29) ジェノバの織物といえば、次のシャルリュスの言葉を想起させる。「しかし、私が思うのは、あの人〔アルベルチヌス〕の美しさは、もう本物の、どっしりとした美しさで、女の子のかわいらしい服飾品などですまされるものではないということですよ。トック帽があのようにたっぷりとした髪に似合うものですか、それこそロシア式宝冠髪かざりではなくてはひきたたないでしょう？ 昔のドレスが似合う婦人方はめったにいません、そんなものを着て出たら芝居のコスチュームのように見えてしまう。しかしもうすっかりご婦人になられたあの娘さんの美しさは例外で、ジェノヴァのペロア製の昔のドレスなどを着ればぐっとひきたつでしょう（私はすぐにエルスチールのことを、そしてフォルチュニのドレスのことを考えた）〔後略〕」（*RTP*, III, pp. 714-715）。エルスチールも話者も、フォルチュニの服飾を芝居じみていると考えていることをも想起させる台詞だ。
- 30) « Notes sur ce temps-ci », in *Les Modes*, *op. cit.*, p. 3.
- 31) *RTP*, III, p. 552.
- 32) « Notes sur ce temps-ci », in *Les Modes*, *op. cit.*, p. 3.
- 33) 拙稿「“花咲く乙女たち”の群舞－フォルチュニの舞台照明とバレエ・リュス、そしてプルースト」（前掲書）を参照していただきたい。なお、モクレールがフォルチュニの舞台照明について述べたのは次。*La Beauté des formes*, Paris, Librairie Universelle, 1909, nouvelle édition, Paris, Hermann, 1990 ; « L'Enseignement de la saison russe », in *La Revue*, n° 15, 1er août 1910, pp. 350-360 ; *Le Théâtre, le cirque, la musique et les peintures du XVIIIe siècle à nos jours*, Paris, Éditions Flammarion, 1926. モクレールは常にバレエ・リュスの美術をフォルチュニの舞台照明に結びつけ、フォルチュニの舞台照明の普及を許さないフランス演劇界の旧態依然とした体質を文字通り断罪する。また、1926年の著作では、フォルチュニが今では「15世紀ヴェネチアの見事な生地（les merveilleuses étoffes）の復元に取り組んでいる」と述べている（pp. 354-355）。
- 34) *Mariano Fortuny. Un Espagnol à Venise*, le catalogue de l'exposition, *op. cit.*, p. 28. このカタログの年表によると、開催期間中の4月21日には「Fortuny」の商標がセーヌ県で登録されている。
- 35) *Marcel Proust*, *op. cit.*, pp. 658-663.
- 36) *Corr.*, t. X, la lettre adressée à Reynaldo Hahn, pp. 288-290.
- 37) *Ibid.*
- 38) *Corr.*, t. X, les lettres adressées à Francis de Croisset, p. 294 et pp. 298-299.
- 39) *Corr.*, t. X, la lettre adressée à Madame Straus, pp. 290-291.
- 40) *Corr.*, t. X, la lettre adressée à Reynaldo Hahn, p. 297.
- 41) *Corr.*, t. X, les lettres adressées à Robert de Montesquiou, pp. 299-302.

- 42) « La "Petite Mademoiselle" vit encore. Réponse de l'auteur », in *Les Modes*, n° 125, mai 1911, *op. cit.*, pp. 5-6.
- 43) « Le Trottoir roulant », in *Excelsior*, le 17 avril 1911, p. 2. 以下、このテキストの和訳は筆者による。
- 44) *Rastaquarium : Marcel Proust et le « modern style », arts décoratifs et politique dans À la recherche du temps perdu*, Turnhout, Belgium, Brepols Publishers nv. 2014.
- 45) « Le Trottoir roulant », in *Excelsior*, le 17 avril 1911, *op. cit.*
- 46) *L'Altana, ou la vie vénitienne*, *op. cit.*, tomes I, pp. 167-168.
- 47) 「まだ見ぬヴェネチアの心惑わす幻影”マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』におけるフォルチュニとパレエ・リュス」(前掲書)。
- 48) *RTP*, III, p. 871.
- 49) *RTP*, IV, p. 225.
- 50) この点については、阿部宏慈「プルーストとロシア：ロシア・パレエのフランスにおける受容とロシア・イメージの問題」(山形大学大学院社会文化システム研究科紀要、2006 年、pp. 1-22) という秀逸な論稿がある。ウクライナ戦争の先行きの見えない今こそ読むべき論文だろう。
- 51) *Esquisse XVIII*, *RTP*, IV, pp. 785-786. 和訳は筆者による。『囚われの女』では次のように書かれている。「ところで観客というものの好みは、ベルゴット流の理性的でフランス的な芸術からそれてゆき、もっぱらエキゾチックな音楽に傾倒するようになって以来、ヴェルデュラン夫人は、あらゆる外国芸術家たちのパリにおける正式連絡員ともいった存在になり、やがては蠱惑的なユーベルティエフ大公夫人とならんで、パレエ・リュスのダンサーたちにとっての老仙女キャラボス、いや全能的な権力をもった老仙女の役割を果たそうとしていた」(*RTP*, III, p. 741)。「失われた時を求めて」で描かれる大戦中のパリでは、モダン・スタイルとパレエ・リュス(特にバクスト)が排外主義者の嫌悪の対象となっていることについては、次の拙稿を参照していただきたい。「プルースト、バクスト、フォルチュニ－レオン・バクストによるパレエ・リュスの衣装と舞台照明装置のデザインを巡って－」日本情報ディレトリ学会誌、日本情報ディレトリ学会編、2015年、pp. 102-112、「ヴェルデュランのサロンの同一性－プルーストの作品における室内装飾」文化学園大学紀要、第47集、2016年、pp. 97-112、「社交界の怪物あるいは“新”音楽の庇護者、ヴェルデュラン夫人－『失われた時を求めて』における音楽と社交界」文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要、第48集、2017年、pp. 101-114。
- 52) 詳細については、拙稿「まだ見ぬヴェネチアの心惑わす幻影”マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』におけるフォルチュニとパレエ・リュス」(前掲書)を参照していただきたい。
- 53) Gérard d'Houville, « Un Magicien », in *Le Figaro*, le 1er mai 1911. 以下、このテキストの和訳は筆者による。1926年にマリーが発表した短編集『*Chez le magicien*』に収められた「Au pays des mille et une nuits」(Paris, Le Divan, pp. 64-71)は次のように始まる。「装飾美術館にテキスタイルとペルシャの写本画の展覧会を見に出かけるには、陰鬱な季節の寒さと霧とを忘れることが望ましい」(和訳は筆者)。おそらく1911年に装飾美術館で見たフォルチュニの織物と衣装の記憶から執筆されたものなのだろう。
- 54) Gérard d'Houville, « Un Magicien », in *Le Figaro*, *op. cit.*
- 55) *RTP*, III, p. 895.
- 56) *RTP*, III, p. 896.
- 57) 古いデルフォスが、今でもイブニング・ドレスとして着用されることがあることを思うと、マリーの言葉は暗示的である。
- 58) Gérard d'Houville, « Un Magicien », in *Le Figaro*, *op. cit.*
- 59) *Ibid.*
- 60) *Ibid.*
- 61) *RTP*, III, p. 896. 900ページにおいても同様の表現が繰り返される。
- 62) *RTP*, III, p. 900.
- 63) *RTP*, III, p. 871 et p. 900.
- 64) *Marie de Régner. Muse et poète de la Belle Époque*, sous la direction de Marie de LAUBIER, Paris, Bibliothèque nationale de France, 2004, p. 47.
- 65) Robert FLEURY, *Marie de Régner*, *op. cit.*, p. 13.
- 66) *Corr.*, t. X, pp. 278-280.
- 67) *Les Cahiers inédits, 1887-1936*, édité par David J. NIEDERAUER et François BROCHE, Paris, Pygmalion / Gérard Walter, 2002, p. 44, chronologie (1864-1936) établie par François Broche.
- 68) « Proust et Henri de Régner : modes proustiens de l'intertextualité » in *Revue d'Histoire littéraire de la France*, n° 1, 2000, pp. 27-44.
- 69) « *Le muet langage des robes* ». *Mode et société dans l'œuvre de Marcel Proust*, *op. cit.*, pp. 125-126.
- 70) *La Semaine dramatique. L'Ordonnance de M. Lépine - La Science au Théâtre*, « Feuilleton du Journal des Débats du 31 août 1908 », in *Le Journal des Débats*, le 31 août, 1908. 以下、このテキストの和訳は筆者による。
- 71) *Les Cahiers inédits, 1887-1936*, *op. cit.*, p. 593.
- 72) この二つのレニエのテキストについては、「水の街、記憶の街－プルーストとアンリ・ド・レニエのヴェネチアをめぐる－」(前掲書)を参照していただきたい。
- 73) *La Semaine dramatique. L'Ordonnance de M. Lépine - La Science au Théâtre*, « Feuilleton du Journal des Débats du 31 août 1908 », in *Le Journal des Débats*, *op. cit.* 「電気 Électricité」および「妖精 Fée」は大文字で書かれている。マリー・ド・レニエがフォルチュニを「Magicien」と呼ぶのは、このレニエによるテキストの影響かもしれない。

参考文献

- Alba SANZ ÀLVAREZ « Mariano and Henriette Fortuny : Notes on Co-Creating the Delphos Gown », in *The Fashion Studies Journal*, 2022.
<https://www.fashionstudiesjournal.org/partnership-content-a/2022/4/22/mariano-and-henriette-fortuny-notes-on-co-creating-the-delphos-gown>
- Sophie BASCH, *Rastaquarium : Marcel Proust et le « modern style », arts décoratifs et politique dans À la recherche du temps perdu*, Turnhout, Belgium, Brepols Publishers nv. 2014.
- Chiara BORILE, « *Le muet langage des robes* ». *Mode et société dans l'œuvre de Marcel Proust*, thèse soutenue à l'Università Ca'Forscari Venezia, en 2016.
- Lucie FÉLIX-FAURE GOYAU, « L'Évolution Féminine. Les Deux Féminismes », Feuilleton du « Gaulois du dimanche littéraire », in *le Gaulois*, le 8 avril 1911, p. 4.
- « L'Évolution Féminine. Art Féminin », Feuilleton du « Gaulois

du dimanche littéraire », in *Le Gaulois*, le 20 mai 1911.

Albert FLAMENT, « Le Trottoir roulant », in *Excelsior*, le 17 avril 1911.

— « Notes sur ce temps-ci », in *Les Modes*, n° 125, mai 1911, pp. 2-3.

Robert FLEURY, *Marie de Régnier*, préface de Geneviève DORMANN, texto le goût de l'histoire, collection dirigée par Jean-Claude ZYLBERSTEIN, première édition, 1990, Paris, Éditions Tallandier, 2008.

Maurice GUILLEMOT, « L'Exposition des arts de la femme au Musée des arts décoratifs », in *Art et décoration*, janvier – juin 1911, pp. 138-156.

Jean-Paul GOUJON, *Dossier secret Pierre Louÿs-Marie de Régnier*, Paris, Christian Bourgois, 2002.

Gérard d'HOVILLE (Marie de RÉGNIER), « Un Magicien », in *Le Figaro*, le 1^{er} mai 1911.

— *Chez le magicien*, Paris, Le Divan, 1926.

Camille MAUCLAIR, *La Beauté des formes*, Paris, Librairie Universelle, 1909, nouvelle édition, Paris, Hermann, 1990.

— « L'Enseignement de la saison russe », in *La Revue*, n° 15, 1^{er} août 1910, pp. 350-360.

— *Le Théâtre, le cirque, la musique et les peintures du XVIII^e siècle à nos jours*, Paris, Éditions Flammarion, 1926.

Jean MILLY, « Proust et Henri de Régnier : modes proustiens de l'intertextualité » in *Revue d'Histoire littéraire de la France*, n° 1, 2000, pp. 27-44.

Robert de MONTESQUIOU, « La "Petite Mademoiselle" vit encore. Réponse de l'auteur », in *Les Modes*, n° 125, mai 1911, pp. 5-6.

Guillermo de OSMA, *Mariano Fortuny. His Life and Work*, translated in English by Sander BERG, Victoria & Albert Museum Publishing, 2015.

Henri de RÉGNIER, *La Semaine dramatique. L'Ordonnance de M. Lépine – La Science au Théâtre*, « Feuilleton du Journal des Débats du 31 août 1908 », in *Le Journal des Débats*, le 31 août, 1908.

— *L'Altana, ou la vie vénitienne*, tomes I et II, Paris, Mercure de France, 1928.

— *Les Cahiers inédits, 1887-1936*, édité par David J. NIEDERAUER et François BROCHE, Paris, Pygmalion / Gérard Walter, 2002.

Maria-Àngels ROQUE, « Mariano Fortuny Madrazo : The Luminous and Cosmopolitan Mediterranean », in *Quaderns de la Mediterrània* 15, European Institute of the Mediterranean (IEMed), 2011, pp. 117-125.

Laure STASI, *Martine de Béthune. Comtesse de Béarn 1870-1939. Le Mécène oublié*, Suresnes, Emilewen Éditions, 2021.

Jean-Yves TADIÉ, *Marcel Proust*, Paris, Éditions Gallimard, 1996.

Jean-Louis VAUDOYER, « Léon Bakst », in *Art et décoration*, n° 125, mai 1911, pp. 33-46.

— « Italie retrouvée, II (1), lettre de Venise », in *Revue des Deux Mondes : littérature, histoire, arts et sciences*, N° 12, le 15 juin 1949, pp. 660-678.

Comœdia, le 4 juillet 1908.

Passe-Partout, « LA VIE DE PARIS – une Fête de la Lumière », in *Le Figaro*, le 4 avril 1906.

TOUT-PARIS, « Bloc-Notes Parisiens. Dentelles et dentellières », in *Le Gaulois*, le 8 avril 1911.

Le Paris-Journal, le 9 avril 1911.

Mariano Fortuny. *Un Espagnol à Venise*, le catalogue de l'exposition, Paris, Paris Musées, Les musées de la ville de Paris, 2017.

Marie de Régnier. *Muse et poète de la Belle Époque*, sous la direction de Marie de LAUBIER, Paris, Bibliothèque nationale de France, 2004.

Fondo Mariutti-Fortuny, in la Biblioteca Nazionale Marciana. <https://bibliotecanazionalemarciana.cultura.gov.it/la-biblioteca/il-patrimonio/patrimonio-librario/fondi/fondo-mariutti-fortuny>

Centre de Documentació i Museu Tèxtil. http://imatex.cdm.t.cat/fitxa_fitxa.aspx?m=n&num_id=23084&t=156

阿部宏慈「ブルーストとロシア：ロシア・バレエのフランスにおける受容とロシア・イメージの問題」山形大学大学院社会文化システム研究科紀要、2006年、pp. 1-22。

勝山祐子「失われた視線のコレクター－ブルーストとカミーユ・グルー－」文化学園大学紀要 人文・社会学研究 第23集、2015年、pp. 69-88。

—「ブルースト、バクスト、フォルチュニ－レオン・バクストによるバレエ・リュスの衣装と舞台照明装置のデザインを巡って－」日本情報ディレクトリ学会誌、日本情報ディレクトリ学会編、2015年、pp. 102-112。

—「ヴェルデュランのサロンの同一性－ブルーストの作品における室内装飾」文化学園大学紀要、第47集、2016年、pp. 97-112。

—「社交界の怪物あるいは“新”音楽の庇護者、ヴェルデュラン夫人－『失われた時を求めて』における音楽と社交界」文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要、第48集、2017年、pp. 101-114。

—「ブルーストとフォルチュニの交差点－“ビザンチン・ホール”とフォルチュニの舞台照明－」文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要 第49集 2018年、pp. 119-132。

—「“花咲く乙女たち”の群舞－フォルチュニの舞台照明とバレエ・リュス、そしてブルースト－」文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要 第50集 2019年、pp. 85-99。

—「“まだ見ぬヴェネチアの心惑わす幻影”マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』におけるフォルチュニとバレエ・リュス」文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要 第51集 2020年、pp. 95-109。

—「水の街、記憶の街－ブルーストとアンリ・ド・レニエのヴェネチアをめぐる－」文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要 第53集 2022年、pp. 57-69。

ジャンドメニコ・ロマネッリ「二人の貴婦人」松原知生訳、「魅惑の芸術－千年の都 世界遺産ヴェネチア展」《二人の貴婦人》別冊、東京都東京江戸博物館、2011年。

第二言語としての日本語習得におけるコグトレのケーススタディー —支援を必要とする生徒への取り組み—

A Case Study of Cognitive Enhancement Training in Japanese as a Second Language

—A Trial on a Student with Special Needs—

梶原 朱里

KAJIHARA Akari

要旨

本稿では、立命館大学宮口幸治教授により開発された認知機能トレーニング（コグトレ）の概要をまとめ、そのコグトレの有用性について、対象者が特別支援を必要とする外国にルーツを持つ生徒に着目し実践したケーススタディーの成果を考察する。先行研究として、1. コグトレの概要とこれまでの実践報告の特筆すべき点をまとめる。2. 日本における特別支援を必要とする外国にルーツを持つ児童・生徒についての現状調査とその支援について考察する。3. 特別支援を必要とし、かつ日本語を母国語としない外国にルーツを持つ児童・生徒の第二言語習得（日本語学習）についての知見を整理する。

以上の先行研究を元に、特別支援を必要とする外国にルーツを持つ生徒に対して実施した認知機能の向上と第二言語習得（日本語学習）のためのコグトレケーススタディーを計画・実行した数か月間の途中経過を概観し、その検証結果をもとに今後の研究計画について再考する。

The purposes of this paper are to present an overview of Cognitive Training (Cog-Tr) and to evaluate an ongoing Cog-Tr case study focusing on a student with special needs who is a Japanese national, first language (L1) English, second language (L2) Japanese. This study is based on the prior research: 1. A summary of Cog-Tr features and findings of current reports on Cog-Tr, 2. A survey regarding foreign students with special needs in Japan, 3. A research paper on L2 acquisition for students with special needs. Utilizing findings of previous research, assessments, and interviews, this study devises an original plan for a trial case study on a foreign student with special needs who speaks Japanese as a second language and reports the results of the sessions. Implications of this trial case study and proposals for future research will be discussed.

●キーワード：コグトレ (Cog-Tr)／英語 (English)／ケーススタディー (case study)

I. Defining Cognitive Training

Cognitive Training (Cog-Tr) is a social, academic, and physical support program that enables students to acquire the thinking skills necessary for active participation in school and society. Cog-Tr offers three dimensions of training: “Cognitive Social Training (COGST),” “Cognitive Enhancement Training (COGET),” and “Cognitive Occupational Training (COGOT).” Cog-Tr was developed by child psychiatrist Koji Miyaguchi through his work with juvenile delinquents. Miyaguchi found the following common features among students who have difficulties in the classroom; poor emotional control, lack of flexibility, low self-esteem, poor

interpersonal skills, low cognitive function, and low motor skills (Miyaguchi, 2017a). He pointed out that students’ lower cognitive skills often interfere with their social skill development because cognitive skills are the foundation of broader life skills. For students to perform successfully at school and in society, they need to establish a solid foundation of cognitive acuity. Miyaguchi invented Cog-Tr to strengthen those cognitive skills; COGST focuses on social skills, and COGET focuses on improving cognitive skills such as memory, language comprehension, attention, perception, and inference/ judgment. Whereas COGOT seeks to improve the motor skills necessary to overcome

awkwardness and clumsiness. All three protocols are designed to work interactively.

Cog-Tr can be broadly viewed as two distinct types of training. COGET and COGST are worksheet-based methods, where students are given written tasks for five minutes every day. Whereas COGOT, students are engaged in exercises that enhance their proprioception and muscle coordination as well as cerebral functions to improve their physical strength (Miyaguchi & Miyaguchi, 2014, p.6). Cog-Tr allows students to work in groups (G-type Sessions) or individually (I-type Sessions) depending on their relative needs. The suggested duration of each type calls for daily sessions of five to ten minutes in the classroom.

COGET offers 27 kinds of worksheets targeting the cognitive skills: 1. memory 2. language comprehension 3. attention 4. perception 5. inference/ judgment, corresponding with their appropriate task categories, see Figure 1 (Miyaguchi, 2015, p.7). Based on those Cog-Tr worksheets, there are Cog-Tr workbooks integrated with basic arithmetic (Miyaguchi, 2017), Japanese characters (Miyaguchi, 2019) and English (Miyaguchi & Shoto, 2020). These comprise the Cog-Tr tasks available for teachers to utilize as curriculum in their classes.

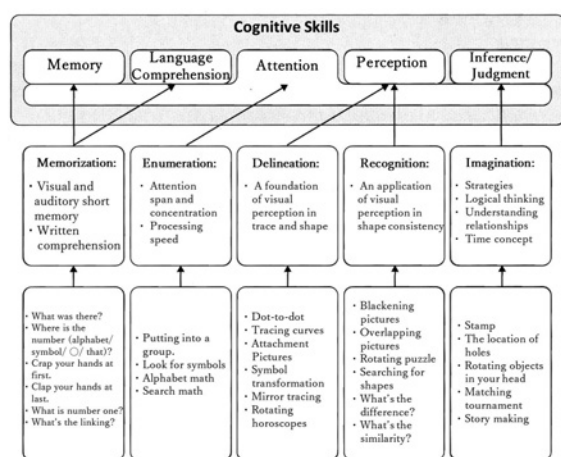


Figure 1: the construction of Cog-Tr (See appendix for original source)

Method of Cog-Tr Implementation

Professionals in education, medical care, psychology, and social welfare have all integrated

aspects of Cog-Tr to support children who struggle in their classroom and in society. Moreover, Cog-Tr can be implemented in the classroom and home environments. Typically, instructors provide students with an assessment of several carefully chosen COGET worksheets and predetermined COGOT exercises. Likewise, Cog-Tr is applicable for student observations and student interviews, with the involvement of both parents, and teachers. Teachers can use their results to assist with the documentation of a student's strengths, deficiencies, and progress. Based on these assessments, instructors can select the optimum COGET worksheets and COGOT exercises.

Instructors can reference four or eight months of sample modules suggested to correspond academic semesters or adjust the length of the module depending on the students progress (Miyaguchi, 2015, pp.42-45). According to Miyaguchi, the benefits of implementing COGET are;

- improvement of cognition such as; visual observation, listening, memory formation, attention, and awareness
- development of the cognitive skills essential to learning
- enhancement of self-esteem
- low cost and easy deployment (Miyaguchi, 2019a)

Teachers and parents may desire to provide more practice to students in an attempt to overcome weaknesses, such as improving their ability to write Japanese or solve basic arithmetic problems. However, if the student has significantly lower cognitive skills, they may not be capable of sufficiently interacting with such subjects. Implementing standard teaching techniques to resolve these issues is only temporarily beneficial, since students tend to have the same issues repeatedly, unless there is a centered effort to focus on enhancing their cognitive skills.

Yoshibumi Aoyama, former Ritsumeikan University professor of College of Social Sciences and comptroller of the Japanese Association of Cog-Tr, mentioned during an online Cog-Tr seminar on July 24, 2022, the

following features of Cog-Tr in the field of education:

- Cog-Tr is the well-structured program covering all aspects of visual, auditory, kinesthetic/tactile, and social development for people who need support.
- Cog-Tr has a Universal Design so that teachers can readily implement the program in their classrooms effortlessly.
- Cog-Tr focuses on improving students' weak cognitive skills.

Miyaguchi conducted research to validate Cog-Tr using the following methodology. A random mixture of 24 middle school and high school students with an intelligence quotient (IQ) lower than 85 were divided evenly into a control group (n=12) and an experimental group (n=12). In the study, the experimental group received a Cog-Tr session for 80 minutes (group and individual) twice a week for four months. Das-Naglieri Cognitive Assessment System (DN-CAS)¹⁾, Raven's Colored Progressive Matrices²⁾, and Working Memory tests were done three times. The study included preliminary Cog-Tr trials, post Cog-Tr trials, and three-month post Cog-Tr follow-up to evaluate their effects. Research showed that of those who remained in the program (n=10), the experimental group had a significant increase in scores of the following categories: planning, attention, simultaneous and Raven's Colored Progressive Matrices. This held through in subsequent testing, even after the three-month follow-up (Miyaguchi, 2015).

Other Cog-Tr Research in Japan

Since the Japanese Association of Cog-Tr was established in 2020, a variety of research has been conducted at local schools, special needs facilities, counseling centers, juvenile institutions, and Cog-Tr Preparatory Schools in Osaka and Tokyo (Miyaguchi et al., 2021). Numerous books on the topic have been published. Moreover, due to the demand for online materials, the Cog-Tr basic arithmetic application has been made available in the Apple Store, and Cog-Tr Prep Schools now offer online and face-to-face sessions

as well. Additionally, a COGOT report from the Republic of Kenya at a special education school for those with intellectual disabilities (ID) indicates improvements in physical strength through COGOT exercises. This result supports the research hypothesis that Cog-Tr is effective among students with special needs regardless of their nationality (Yagishita, 2022).

II. Features of Japanese Special Education

Students with special needs in Japan receive education depending on their needs and course of study. There are special needs schools for the deaf, blind, and other physical disabilities. Special education classes and *Tsu-kyu*³⁾ programs are offered in regular public and private schools. According to a 2019 survey from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, the number of students enrolled in *Tsu-kyu* programs was 108,946. Disabilities in the survey were differentiated by language disorder, autism, attention deficit hyperactivity disorder (ADHD), learning disability (LD), and emotional disorders.

A new regulation called "Promoting the Elimination of Discrimination Against Disabled Persons Law" went into effect in 2016 with the stated goal of providing reasonable accommodations for students with special needs. The legislation stipulates that students with special needs, placed in regular classrooms, must be provided the appropriate accommodations for learning. Furthermore, teachers are required to have additional professional training in special education, as well as possess the necessary teaching techniques to meet student needs. Certified teaching programs in special education are now offered throughout Japanese universities and are designed to collaborate with professionals such as school nurses, school counselors, school social workers, language therapists, and occupational therapists (MEXT, 2019).

Current Special Education in Japan

According to a 2021 survey, there are at present 47,627 foreign students who need Japanese language instruction in public schools. The results show that the

number of students requiring Japanese language assistance has nearly doubled since 2015. The 2021 survey was updated to include the number of students in classes for special needs requiring Japanese language support, which now has 2,704 pupils. Of that total, 2,199 are non-Japanese citizens, and 505 are Japanese nationals (MEXT 2022a). Due to the increased demand for foreign students' consultation and assessment of eligibility for special education programs (Aiso, 2021), more teachers will need to improve their Japanese language abilities. In addition, teachers will have to develop their cognitive skills to support their needs. Current Japanese language support is offered on an individual small group basis, and each school is responsible for its own curriculum and student study plans, with the Japanese government's assistance.

III. The Purpose of this Case Study

The purposes of this case study are to provide a synopsis of the experimental Cog-Tr developments and the improvements found during the session. This research paper will be the first step to elucidate the effectiveness of Cog-Tr for English-speaking or foreign students with special needs, both non-Japanese students and Japanese nationals who are not L1 Japanese speakers.

Ethical Consideration:

Prior to conducting this research, the observer had a meeting with the student and his mother to provide a consent form and to explain the following ethical considerations of the research; the purpose of the research, voluntary participation, the principle of "do no harm," participant confidentiality, anonymity, and assessment of only components relevant to the research. After they understood the intentions above ethical considerations, the student and his mother both signed an informed consent form and kept a copy for a record along with the observer's contact information.

Cog-Tr Case Study: Student A (referred to as "Skyler"), male, 8th grade Family Structure and History

Skyler, age 14, has a father and a mother currently residing in Japan, and an older step-sister, who currently resides in the U.S. He was born in the United States. He never received any formal Japanese language education besides having daily conversations with his family. He moved to Japan when he was in 4th grade. Until then, he had attended a public elementary school in the U.S. His mother recalled that his homeroom teacher in the U.S. discussed his eligibility to enroll in a special education program based on his school performance and behavior.

For about a year and half since Skyler moved to Japan, he attended a special education class, until he transferred to a different public elementary school in a new prefecture. His current public middle school does not offer special education classes, so he was advised to attend some Japanese language support classes. However, his participation was very minimal. In addition to these issues, he has also been under the supervision of the local Child Guidance Office. Although his mother technically maintains custody, she and Skyler live separately. He currently resides with his father, who works at night, so Skyler tends to spend most of his time unsupervised. He usually spends his nights alone playing video games and watching YouTube. Insufficient parental supervision has most likely had a negative effect on his school attendance.

Assessment and Interview

Results from a prior Wechsler Intelligence Scale for Children (WISC-IV)⁴⁾ test, are unknown due to federal protocols restricting the disclosure of such personal information. However, he receives welfare benefits as a result of being diagnosed with an ID. It was estimated that his IQ is between 50 to 75.

In his first interview, Skyler seemed shy, albeit sincere, and his behavior was slightly immature for his age. He speaks in a fusion of interlanguage (IL), simultaneously English and Japanese. Within a single sentence he tends to use a mixture of pronouns, both

English and Japanese. He appears more comfortable speaking in English rather than in Japanese. His Japanese comprehension consists of general conversations with limited vocabulary. He showed some moderate symptoms of ADHD, such as restlessness (a difficulty remaining still for a long period of time), inattentiveness (constant topic change and exhibits difficulty concentrating), persistence, and a strong obsession with detached interests, especially with foods and Korean language. Skyler has indications of low self-esteem. Although he claimed that he didn't have any difficulty working on school assignments, he mentioned that he doesn't enjoy spending time at school due to his negative impression of his teachers. Furthermore, because of his negative experiences at school and unsupervised parenting situations, he tends to skip school quite frequently. Skyler's mother is concerned about his short attention span, lack of emotional control, and minimal school participation.

From the assessment, he was given several worksheets (Miyaguchi, 2015), which instantly confirmed the following issues. 1. He exhibits a low ability to do calculations; he calculates using his hands for simple addition problems. 2. His observation skills, however, are marginally better. He showed clear signs that he was pleased to find differences among eight similar pictures on COGET worksheet. 3. His working memory, perception, and comprehension appeared challenged when instructions became complicated (in Japanese and English). He needed to work on the assessment worksheets step by step with the observer, yet he frequently missed some answers. 4. His handwriting was poor both in Japanese and in English.

After the assessment and interviews with both Skyler and his mother, the main goal of the initial trial was to have Skyler cultivate more successful experiences. In the hope that was showing him, changing "things he cannot do" into "things he can do" would increase his self-esteem. Another goal was to encourage more input/output in Japanese through this Cog-Tr, so it could be determined whether his Japanese improved. Therefore, he agreed to conduct Cog-Tr

instruction mainly in Japanese.

Based on Skyler's assessment done in January 2022 with several COGET worksheets to determine his level of Japanese characters for elementary 5th-grade level (Miyaguchi, 2019) and basic arithmetic (Miyaguchi, 2019) were selected for his case study. The original plan started in April 2022 was for him to try each COGET worksheet five days a week at home. This was to include a face-to-face session once a week for feedback. Though his mother checked up on his progress, it was hard for her to supervise his work daily because of their living situation. The Japanese character COGET worksheets proved to be too challenging for him due to the fact that he had no discipline to study at home, limited parental supervision and learning support. Skyler barely finished any COGET worksheets after a few weeks.

During the face-to-face sessions, he got distracted easily and doodled on his COGET worksheets. He could understand simple instructions, but it became hard for him to understand as instructions increased with complexity, especially in Japanese. When new instructions were provided, he needed to be told repeatedly step by step to proceed. His reading skill was low both in English and Japanese, he could read *kanji* (Japanese characters) with the assistance of *Furigana*⁵⁾. Writing *kanji* for him was similar to the experience of drawing geometric art, rather than the natural calligraphic stroke order familiar to native Japanese.

Since he mentioned he was not able to concentrate at home, the original plan needed to be adjusted. First, the location of the sessions was changed to a weekly classroom environment. Second, he indicated that he would rather work with someone, so his mother agreed to join the Cog-Tr sessions. In June of 2022, Skyler started COGOT sessions with his mother as a team. Third, the level of the textbook was not appropriate for him; therefore, new textbooks were selected, COGOT exercises (Miyaguchi & Miyaguchi, 2014) and Cog-Tr

Japan Puzzles (Miyaguchi, 2021). By using these textbooks, it was hoped that he could better interact with Cog-Tr instructions, in addition to learning about Japanese prefectures and geography. Finally, the length of the sessions was scheduled for 90 minutes.

Once the adjusted sessions began, several sessions were used to establish an environment in which he would take the initiative to explain his answers to his mother in Japanese. This was designed to build his self-esteem and provide more opportunities for his Japanese L2 output. This seemed to work well because his behavior changed when he was put in charge of checking his mother's answers and explaining his reasons. Also, he often seemed eager to complete more COGET worksheets than initially planned for a given day.

IV. Results/ Consideration

After revised plan, Skyler attended ten sessions in a three-month period, approximately once a week. Although he had attempted to complete 160 COGET worksheets during the initial plan. Many of the sheets were incomplete and filled with erroneous doodling. After the revised plan, he greatly showed initiative by fully completing 60 COGET worksheets on his own accord, without continuous instruction and erroneous doodling. Moreover, his strengths in observation and drawing skills, and weaknesses in basic calculation and perception, have shown some significant improvement. Both positive changes and new future challenges were found throughout these ten sessions.

Attention Span and Working Memory:

There was a significant improvement in his attention span. During his initial sessions, his concentration span was very short and the sessions usually lasted less than an hour consisting of two to three COGET worksheets without COGOT exercises. Figure 2 is a COGET worksheet for drawing lines from dot-to-dot by imitating examples (The Japanese Association of Cog-Tr, 2022). These types of COGET worksheets consist of spatial recognition and awareness of geometric shapes.

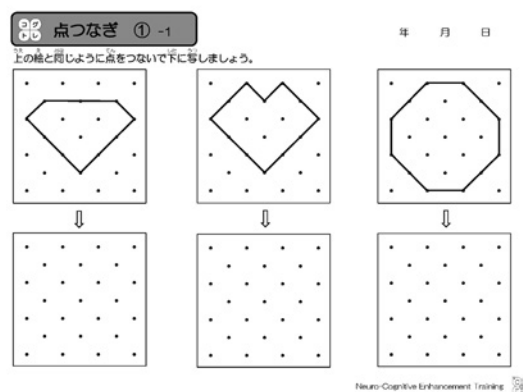


Figure 2: Sample dot to dot COGET worksheet adapted from the website of the Japanese Association of Cog Tr

Figure 3 is dot-to-dot COGET worksheet that Skyler completed in March 2022. The angle of examples and answer pictures are slightly different, and this required him to utilize his attention span and concentration to trace the realignment of impression sketches and the outlines of images. Two bottom illustrations depict his early inability with spatial awareness. The lines shown are imbalanced and off centered with multiple thin lines.

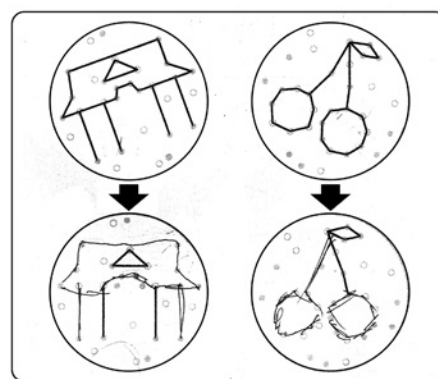


Figure 3: COGET worksheet at the beginning of the session

Figure 4 is the same type of harder COGET worksheet he worked after three months of training. Observably, the lines had changed, becoming straighter, clearer, and thicker. This indicates that he was more confident about which dot to connect. He began drawing each line using working memory and focusing on the worksheet for longer periods of time. Skyler's information processing speed has also improved. He is now able to finish some COGET worksheets, such as drawing lines, connecting from dot-to-dot, or counting

figures in less than a minute without making any mistakes. The amount of doodling he produced on COGET worksheets, when he got distracted or bored, decreased significantly compared to the beginning of the session. The average numbers of COGET worksheets that Skyler actually completed in the latter half of the session increased by more than twofold.

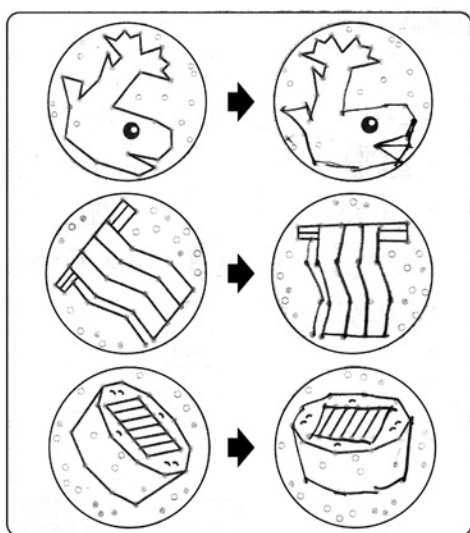


Figure 4: COGET worksheet after three months

Emotional Behavior Changes:

During and after the sessions, he occasionally argued with his mother. However, there was a significant behavioral change after the fourth session, which included approximately half an hour of COGOT exercises, prior to working on COGET worksheets. He was more capable of controlling his emotions and barely quarreled with his mother. He asked to work on more COGET worksheets spontaneously, increasing his session duration up to two hours.

Body Coordination/ Motor Skills:

Through COGOT exercise sessions, Skyler has gained a better understanding of his motor skills. Skyler and his mother worked to gradually increase his motor skill through COGOT exercises. Skyler even showed greater agility than his mother when they took the same motor skill exercises. The motor skill exercises also made him realize the necessity of adjusting pressure depending on the object being manipulated.

Videotaping and taking pictures of Skyler,

passing Cog-Tr sticks and doing core muscle exercises to check his postures, was vital to his motor skill development. This feedback helped Skyler to see his development from different perspectives, increasing his perceptive abilities as well.

Language Acquisition:

During the sessions, Skyler was encouraged to explain his answers to his mother in Japanese in order to increase his Japanese output. Previously, he used English vocabulary in his Japanese sentences and used Japanese pronouns when he didn't know the English equivalent. As his level of his Japanese developed, less fusion of his IL made communication with other Japanese speakers easier.

V. Revised Session Plan for the Future:

Skyler stated that, once he understood the instructions on Cog-Tr, he felt it was easier to work on COGET worksheets and he was surprised to see the difference in some of his work. He finished half of Cog-Tr Japan Puzzles (Miyaguchi, 2021) and plans to continue having group sessions for another three months. Skyler and his mother hope to continue Cog-Tr with the following goals in mind; 1. reduce the tendency to use repetitive pronouns in Japanese and English such as "this... that... you know, you know, you know," 2. reduce his tendency to doodle and improve his attention span, 3. continue to improve his ability to write Japanese and English, 4. draw lines more neatly. Several issues need to be addressed to expect better evidence for future research.

Time Management:

Throughout this case study, it has been a great challenge to maintain a consistent schedule for Cog-Tr sessions. Skyler tends to give his immediate interests priority over his prior commitments, and he struggles to maintain previously scheduled appointments. Therefore, he has inconsistent attendance or tardy arrival almost every week and needs to constantly reschedule. This sort of dysfunction is a typical symptom for individuals with ADHD, as well as those with ID and it means Skyler cannot maintain a schedule

without consistent adult supervision. Some daily tasks, such as setting a timer, using a calendar, and visualizing schedules, are worth trying. A parental reminders and positive reinforcement remain a part of his routine. Skyler continues to have difficulty meeting medium-to-long-term goals, so the next session term will be set for another three months.

Overcoming Weaknesses:

Verbal feedback after each session indicated his deficiency in basic arithmetic and imagination skills. Skyler's ability to think abstractly and compare several images is still underdeveloped. The amount of time spent on these kinds of COGET worksheets was not enough to examine his improvements, so further observation is warranted.

Language Acquisition:

Skyler exhibited limited vocabulary in English and Japanese for his age; as a result, he uses too many pronouns to communicate. Having him explain answers and methods to work on COGET worksheets and COGOT exercises allowed for more opportunities to expand his verbal communication. Skyler's Japanese language improvement needs to be addressed in future studies.

Connection to Subjects Learning:

Skyler's mother discovered tutorial learning support lessons organized by local senior volunteers in the neighborhood. His tutor, who also speaks English, will be able to monitor his school assignments twice a week starting in the fall of 2022. Skyler plans to work on Japanese characters for elementary 1st grade level (Miyaguchi, 2019) and basic arithmetic (Miyaguchi, 2019) at every tutoring session. The goals for these sessions are to work on school assignments and to increase competency in basic skills, so he may continue his education into high school.

VI. Conclusion

After three months of this trial case study, findings indicate that students with special needs, regardless of

their native language, could benefit from Cog-Tr to strengthen their cognitive skills. Detailed results indicate improvements in specific cognitive skills were exhibited in a shorter term. This case study verified significant improvements in observation, attention, as well as associated behavioral and language changes. Providing appropriate COGET worksheets depending on students' targeted abilities motivates them to continue Cog-Tr sessions. When students see how their improvements contribute to cultivating successful experiences, students develop greater self-esteem, which further encourages them to try higher levels of GOGET worksheets.

This case study shows Cog-Tr contributes to a solid foundation for learning, physical exercises, and social skills. Cog-Tr does not perform a bottom-up effect, but rather, by integrating a variety of Cog-Tr in the sessions, it creates a synergistic effect that maximizes students' best abilities. Observation data demonstrates that at least three months is required for students with special needs who speak Japanese as a second language to become familiar with Cog-Tr instructions.

Bilingual verbal and written instruction on Cog-Tr will be a possible accommodation for students with special needs who speak Japanese as a foreign language. Taking videos or photos during COGOT exercises would also help students by providing different perspectives, which do not require much language instruction. On the other hand, having students verbalize their answers in the targeted language organizes their thinking process, helps them better understand instructions and allows them more opportunities for output.

Some students with ADHD symptoms or ID may have difficulties attending sessions regularly, scheduling accommodations, using home assignments, and conducting online sessions are possible alternatives. However, more than two weeks of consistent absence may adversely affect students' improvements in early sessions. Thus, fortitude on behalf of both students and parents is required to promote constant engagement and participation.

Integrating COGOT exercises with COGET

worksheets was effective in Skyler's case. For students with ADHD who have difficulty remaining still, starting with COGOT exercises could give them the control necessary to concentrate on COGET worksheets.

It also appears that surroundings and collaboration between students, parents, family members, teachers and other mentors are another important factor to maximize Cog-Tr effects. Explanation of Cog-Tr in foreign languages for parents who speak Japanese as a second language can be prepared as well.

As the population becomes more diverse, educators will need to adapt their classroom practices with regard to students' needs. Especially in the field of special education, teachers tend to have bigger challenges providing reasonable accommodations to students analogous to Skyler's situation. The necessity of creating an ongoing case study to evaluate long-term efficacy needs to be considered, in order to gauge the usefulness of Cog-Tr for foreign students with special needs. Cog-Tr is fairly new, but there is a great possibility that it is effective not only among Japanese students with special needs but also students with special needs all over the world. To develop a solid learning foundation academically and socially for students with special needs, further research needs to be considered in the field of Cog-Tr.

NOTES

- 1) Das-Naglieri Cognitive Assessment System (DN-CAS) is a psychological test to evaluate a cognitive functions (planning, attention, simultaneous and successive) for children with special needs (Miyaguchi, 2015, p.52).
- 2) Raven's Colored Progressive Matrices is a non-verbal simplified intelligence test used to measure abstract reasoning (Miyaguchi, 2015, p.52).
- 3) *Tsu-kyu* programs as "another program of resource rooms (in regular elementary and secondary schools) where children with disabilities who are enrolled in and studying most of the time in regular classes may visit resource rooms few times a week to receive special instruction." (The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, 2022, Principles Guide Japan's Educational System. Retrieved on October 28, 2022, from <https://www.mext.go.jp/en/policy/education/overview/index.htm>)
- 4) The Wechsler Intelligence Scale for Children (WISC-IV) is the widely known intelligence test that measures total IQ scores and four composite scores: verbal comprehension,

perceptual reasoning, working memory, and processing speed (Miyaguchi, 2015, p.52).

- 5) *Furigana* are "tiny Japanese *kana* characters written above or next to *kanji* characters. The *kana* characters indicate the correct pronunciation of the word written in *kanji*." (*Weblio Dictionary*, 2022, Retrieved November 14, 2022, from <https://ejje.weblio.jp/content/furigana>).

References

- Aiso, Tomoko. (2021). Overview of the Study about "Disability" of Foreign Children in Japan: A Basic Material on Consultation and Assessment for Schooling. *Journal of Uekusa Gakuen Junior College*, 22, 21-32. Retrieved from https://doi.org/10.24683/uekusat.22.0_21
- Aoyama, Yoshihumi. (2022). Cog-Tr's ways of thinking, significance, and focal points to utilize GOG-Tr from points of view in nursery care, education, and intervention. [Webinar]. The Japanese Association of Cog-Tr. <https://us02web.zoom.us/j/88443152679?pwd=ekZBRUdRU EJ4akczOE5QOHdpL2VyQT09>
- The Japanese Association of Cog-Tr. About Gog-Tr (2022). Retrieved August 28, 2022, from <https://cog-tr.net/cogtr/>
- (MEXT 2019) The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. (2019). Report on Special Education in Japan. (September 25, 2019). Retrieved on October 18, 2022 from https://www.mext.go.jp/kaigisiryō/2019/09/_icsFiles/afieldfile/2019/09/24/1421554_3_1.pdf
- (MEXT 2022a) The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. (2022). A Survey Overview of the Status of Acceptance at Schools of Students who Need Japanese Instruction (Quick Report) [.Translated from Japanese.] The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. (March 25, 2022). Retrieved on September 26, 2022, from https://www.mext.go.jp/content/20220324-mxt_kyokoku-000021406_01.pdf
- (MEXT 2022b) The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology.(2022). A Survey Results of the Status of Acceptance at Schools of Students who Need Japanese Instruction (Quick Report) [.Translated from Japanese.] The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. (March 25, 2022). Retrieved on September 26, 2022, from https://www.mext.go.jp/content/20220324-mxt_kyokoku-000021406_02.pdf
- Miyaguchi, Koji and Miyaguchi, Hideki (2014). *Bukiyou na Kodomotachi heno Ninchi Sagyou Training*(Cognitive Occupational Training), Tokyo: Miwa Shoten
- Miyaguchi, Koji (2015). *Cog-Tr Miru Kiku Souzousuru tameno Ninchi Kinou Training* (Cog-Tr: Cognitive Training for Observation, Listening and Imagination), Tokyo: Miwa Shoten
- Miyaguchi, Koji (2016). *1nichi 5 fun! Kyoushitsu de Tsukaeru Cog-Tr Komatteiru Kodomo wo Shien suru Ninchi Training 122* (5 minutes per day! Cog-Tr in the classroom Cognitive Training to support children who struggling 122), Tokyo:

Toyokan Shuppansha

- (Miyaguchi, 2017a) Miyaguchi, Koji (2017). Kyoushitsu de Komatteiru Hattatsu Shougai wo motsu Kodomo no Rikai to Ninchiteki Approach: Hikou Shonen no Sien kara Manabu Gakkou Shien (Understanding and Cognitive Approach for Students with Developmental Disabilities who Struggle in the Classroom -School supports inspired by Juvenile Delinquents-), Tokyo: Akashi Shoten
- (Miyaguchi, 2017b) Miyaguchi, Koji (2017). Sagashi Zan (Basic Arithmetic), Tokyo: Toyokan Shuppansha
- (Miyaguchi, 2019a) Miyaguchi, Koji (2019). Ke-ki no Kirenai Hikoushonentachi (Juvenile Delinquents who Cannot Cut a Whole Cake), Tokyo: Shinchosha
- (Miyaguchi, 2019b) Miyaguchi, Koji (2019). *Kanji Cog-Tr* 5 Nensei (*Kanji Cog-Tr* for 5th graders), Tokyo: Toyokan Shuppansha
- (Miyaguchi, 2019c) Miyaguchi, Koji (2019). *Kanji Cog-Tr* 1 Nensei (*Kanji Cog-Tr* for 1st graders), Tokyo: Toyokan Shuppansha
- Miyaguchi, Koji and Kazumasa Shoto (2020). 1 Nichi 5 Fun! Kyoushitsu de Dekiru English Cog-Tr Shougakkou (Five minutes a day! English Cog-Tr in the Classroom), Tokyo: Toyokan Shuppansha
- Miyaguchi, Koji (2021). Todoufuku ga Suisui Waku! Rurubu Nihon Isshu Cog-Tr Puzzle (Understanding Japanese prefectures! Cog-Tr Japan puzzle by Rurubu), Tokyo: JTB Publishing
- Miyaguchi, Koji, Takamura, Kiho, Isaka, Yukie, Kanki, Mifumi. (Eds.) (2021). *Cog-Tr Jissen Shu Kodomo no Tokusei ni Awasete Dounyu Jirei* (Cog-Tr Practices: Examples of Implementations according to students' characteristics), Tokyo: Miwa Shoten
- Yagishita, Emiko (2022). Kenya kara Gog-Tr (Cog-Tr from the Republic of Kenya). *Journal of Gog-Tr*, (2), 60.

Appendix

Figure 1: Translated from (Miyaguchi, 2015, p7)

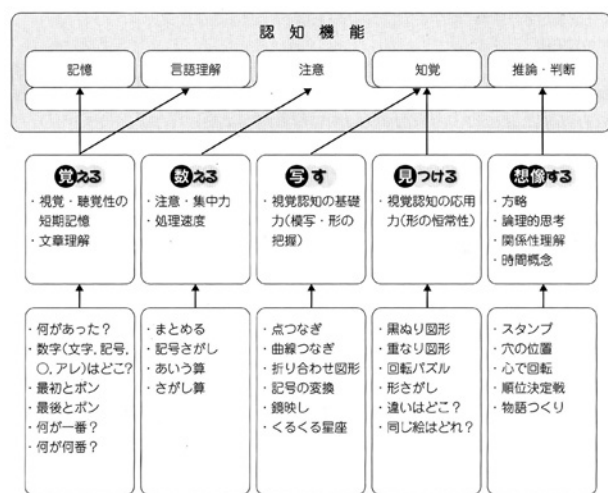


図5 コグトレの構成

5つの分野(覚える, 数える, 写す, 見つける, 想像する)は, 最下段のトレーニングから構成される。注意機能は他のすべての認知機能の土台ともなっている

今、北京を語ることの意義

—劉一達著、李濱声イラスト、日中翻訳学院本書翻訳チーム訳『悠久の都 北京——中国文化の真髄を知る』—

In-depth Descriptive Analysis of Modern-day Beijing

— Liu Yida, *Dao Beijing (On Beijing)* —

米井 由美

YONEI Yumi

要旨

今回、劉一達著、李濱声イラスト、日中翻訳学院本書翻訳チーム訳『悠久の都 北京——中国文化の真髄を知る』（日本橋報社、2022年9月28日出版）に共訳者の一人として参加した。新聞記者である劉氏は生粋の北京っ子であり、北京の文化や風俗、方言を題材とした小説やエッセイを数多く出版し、その中にはドラマ化や舞台化されたものもある。また、いくつかの作品には邦訳がある。イラストを担当した李氏は中国における諷刺漫画の先駆けであり、中国アニメ・漫画業界で最も栄誉のある「金猿賞」を受賞した人物である。両氏とも長く北京に居住し、それぞれ文章やイラストで街の変化や人々の姿を読者へ伝えてきたように、現代の北京を描くにはこの上ない人選であると言えよう。その二人がタッグを組んで誕生したのが本書である。なぜ今この時期にそのような書籍が出版されたのか、今北京を語ることにどのような意義があるのかを本書に関わった者として考えてみたい。

●キーワード：北京（Beijing）／劉一達（Liu Yida）／李濱声（Li Binsheng）

2022年8月25日、韓国にて開催された第13回文化疎通フォーラム（CCF）にテレビ会議で参加したあるフランス人学者は、「都市の風景が高層ビルを中心に変わっていくのは、世界的に起きる災難的現象だ」として、北京を例に挙げて以下のように述べた。「北京は過去を壊し、中国文化といかなる関係もない外国建築家を呼んで都市に高いオブジェを建てた」。¹⁾

私はこれまで二回、2006年冬と2014年夏に北京を訪れたことがある。当時からすでに中国は経済発展が目覚ましく、特に首都である北京に対しては、胡同（横丁や路地）などの古い街並みと北京商務中心区（Beijing Central Business District）周辺の高層ビル群に象徴されるような新旧の顔を持つ街という印象を抱いていた。しかし、今回ご縁があり、劉一達著、李濱声イラスト、日中翻訳学院本書翻訳チーム（参加者 米井由美、福田櫻）訳『悠久の都 北京——中国文化の真髄を知る』（日本橋報社、2022年9月28日出版。原題は『道北京』、北京：人民出版社、2018年）を共訳者の一人として翻訳させていただく機会に恵まれ、北京の街の移り変わりやそれにとともなう人々の心情に触れたことで、先に紹介したフランス人学者の指摘に首肯せざるを得なかった。

著者の劉一達氏は1954年に北京で生まれた生粋の北京っ子である。新聞記者として北京の文化や風俗、方言を題材とした小説やエッセイを数多く出版し、その中にはドラマ化や舞台化されたものもある。邦訳された著書に『北京の子 人虫児』（近藤昌三訳、朱鳥社、2008年）、『乾隆帝の幻玉 老北京骨董異聞』（多田麻美訳、中央公論新社、2010年）がある。

イラストを担当した李濱声氏は1925年にハルピンで生まれた。1949年、天安門広場に掲げられているかの有名な毛沢東の肖像画を描いた人物である。その後『人民日報』の人気コラム『風刺とユーモア』にて長年作品を発表し、中国における諷刺漫画の先駆けとして、これまでの功績を称えられて中国アニメ・漫画業界で最も栄誉のある「金猿賞」を受賞した。

そのように劉氏と李氏を紹介すると、文字とイラストで現代の北京を描くにはこのうえない人選であることがわかりいただけるだろう。なお、両氏は原書の『道北京』のほか、『北京老規矩』（北京：中華書局、2015年）、そして『北京話』（北京：中華書局、2016年）でもタッグを組んでいる。

『悠久の都 北京——中国文化の真髄を知る』は、全三章で構成されている。

第一章「知られざる北京の真髄」は、「北京城の城門」、「北京における「城」と「区」の概念」、「胡同の趣」、「大雑院での人生模様」、「花市のルーツを尋ねる」、「広外地区を顧みる」、「白塔を静観する」、「北京の橋」、「北京市の樹・槐の古木」、「会館と会所」という10篇から成る。

第二章「変わりゆく老北京の姿」は、「商業の命脈である老舗」、「廟会の今と昔を探る」、「花会風雲録」、「味わい深い商品が並ぶ合作社」、「公衆トイレに出入りする」、「花屋から歴史を振り返る」、「当時の護城河に思いを馳せる」、「皇都の柳」、「紫竹院の印象」、「秋色の香山で紅葉狩りをする」、「オタマジャクシを飲む」、「懐かしき「小人書」、「映画に夢中だった少年時代」という13篇から成る。

第三章「文化の源は北京にあり」は、「胡同特有の雰囲気」、「「玩」の意味を再考する」、「北京の古いしきたり」、「元宵節のルーツを探る」、「北京人と春龍節」、「中秋節に月を愛でる」、「大晦日の過ごし方」、「年夜饭（年越し料理）の流儀」、「祖先を祭り、祖先を想う」という9篇から成る。

そして随所に李濱声氏によるイラストが散りばめられている。第一章「胡同の趣」(33頁)では、四合院の中庭でおいじさんが孫たちと一緒に金魚鉢の中を覗く姿が描かれている。その上部には日除け棚とザクロの木もある。これらはまさに北京っ子が理想だと考える生活風景である。

第二章「廟会の今と昔を探る」(147頁)では、春節の風物詩、「廟会」(縁日)の様子が描かれている。見物客のほか、唐独楽、風車、凧、金魚鉢、生花、糖葫芦(飴掛けしたサンザシなどの果物の串刺し)も確認できる。廟会の盛況ぶりが伝わってくる。

第三章「中秋節に月を愛でる」(301頁)では、中秋節の縁起物、「兎児爺」(兎頭人身の蠟人形)を売る店主とそれを買い求める子どもたちの姿が描かれている。医療環境が悪かった時代、「兎児爺」を飾ることで家族の健康と安全を願った。

ここで挙げたものはほんの一部に過ぎないが、どのイラストも暖かく柔らかな筆致で描かれており、読者をほっこりした気持ちにさせるだろう。

本書では、万里の長城、天安門広場、王府井(北京で有名な大通り)など、“北京”と聞いて連想されるような観光名所を紹介するというよりも、様々な角度から古き良き北京を捉えるのが劉氏の狙いだと言える。

その上で、北京へ行ったことがない人、行ったことがあってもゆっくりと観光できなかった人、さらには北京で生まれ育ったが古き良き北京を知らない人に対し、劉氏は本書を読めば「北京に行って理解したのと同じようにその歴史や今日の姿を知ることができる」(6頁)、「私が皆さん連れて街を巡るので、北京についてさらに理解が深まるはずである」(同)、「私が時空を越え、百年余り前の北京へお連れして、ゆったりと散策することができる」(同)と断言し、読者をその世界へと誘っている。

第一章「知られざる北京の真髄」の「広外地区を顧みる」では、劉氏と友人らとのエピソードから街の大きな変化が感じられる。以前広外地区は小紅廟とも呼ばれ、その最寄り駅の近くには悪臭のする川があった。劉氏曰く「夏、この辺りはハエと蚊の天下で、川の悪臭はひっくり返るほどである」(86-87頁)。1980年代の初め、劉氏はその地にある職業学校で副校長をしていた。学校の隣にある宿舎には誰も住もうとはしなかったが、「将来この一帯が取り壊され改造されると思った」(88頁)劉氏は住む所に困っていた新婚の教師へそこに住むようにすすめた。1995年頃、劉氏はその教師にばったり会った。彼はあの時のおかげで現在は立派なマンションに移り住むことができたことと謝意を述べた。劉氏の予感は的中したのだ。

劉氏は職業学校へ勤めていた当時、社会人大学で学んでいた。楊君というクラスメイトと親しくなったが、卒業後に彼はカナダへ向かい、やがては家族を呼び寄せ、カナダ国籍を取得した。

時は流れて2003年、中国でSARSが流行していた頃、劉氏はある友人宅へ招かれた。その車中、目に映ったのは「広い道路の両側には高いビルがそびえ立ち、大型スーパー、高級レストラン、ネオンサインの明滅」(90頁)だった。その地こそ、誰も住みたがらなかったあの「広外」なのである。友人は投資目的で一軒買うようにすすめてきたが、劉氏は断った。

2010年、広外地区はさらに発展し賑やかな商業地区になっていて、友人は以前のマンションをすべて売り払い、もっと高級な居住区へ引っ越していた。友人にご馳走になった帰り道、劉氏は突然楊君を思い出した。不動産転売で財を築いた友人のような才覚が楊君にあったのだろうか。「しかしどう考えても彼はそうならなかった気がする。(中略)もし彼にその才覚があれば、決して早々に広外を離れたりしなかっただろう」(94頁)と劉氏は結んでいる。

街の大きな変化という視点で見ると、「大雑院での人生模様」や「花市のルーツを尋ねる」でも哀感が漂っている。「大雑院」とは中国の伝統的な建築様式である四合院の中庭に雑居している状態の住まいのことを指す。「砕けたレンガとボロボロの瓦、割れたアスファルト。高さの揃わない小さな家と重なって足の踏み場もない場所。雨に出くわすと雨漏りをして、大雑院の中は川となる」(57頁)と劉氏は述べている。一見すると違法建築のようだが、それももう長くは持たないのかもしれない。なぜなら、「首都は発展し、高層ビルが一棟一棟切り立つにつれ、大雑院は歴史の中の古い記憶となりつつある」(67頁)からだ。

花市の「花」は、清の時代、北京の女性たちが好んだ簪の花もしくは絹製の造花のことを指す。当時、火神廟の縁日で絹製の造花がよく売られていたことから、花市と呼ばれるようになり、後にそれが地名として定着した。造花を扱う店が千店舗以上集まり、華やかな通りであったことが「旧都文物略」という書籍にも記されている。その後、1960年代から1970年代になると、花市は主要な商業街の一つとなった。

しかし、それも今や大きく変わってしまった。「花市は北京でも住民が密集している地区の一つである。現在大規模な建て直しが行われ、花市の住民たちはマンションに引っ越して、昔の雑然としてボロボロだった大雑院に別れを告げた」(79頁)とある。劉氏は再び花市へ訪れたものの、「全てが時代の隔たりを感じさせ、一切が見知らぬものになっていた」(80頁)。

先に登場した楊君のように、北京を離れた友人に対しても劉氏は思いを馳せている。第二章「変わりゆく老北京の姿」の「紫竹院の印象」(218-227頁)では、画家である友人との思い出が語られている。その友人は四川省出身で、竹を描くことに長けていた。劉氏は彼とともに紫竹院公園へ向かったものの、竹を見つけることはできなかった。本来竹は江南地方のものであり、北方に位置する北京では大変珍しい存在で栽培が難しかったが、園芸師たちの尽力により、園内に竹が生い茂るようになり、現在では名実ともに華北第一の竹園となった。久しぶりにそこを訪れた劉氏はその友人を思い出し、携帯電話を手に取り写真を何枚も撮ったが、友人はすでにカナダへ移住し、もう何年も会っていないことから、どうやって写真を送ろうかと思い巡らせたのだった。

北京という街が急速に発展していく中で、人々がその変化にどのような感情を抱き、それにどのようにして適

応していったのかを知ることができるという点では本書はとても貴重である。私はちょうど劉氏の子世代であり、李氏の孫世代でもある“85后”(1985-1989年生まれ)にあたるため、彼らが残した作品を享受できる立場にいられることをうれしく思うが、その時間も限りがあることを思うと物寂しさを感じずにはいられない。そして、冒頭で引用したフランス人学者の言葉の通り、北京の「過去」が少しでも多く残されることを願っている。

そこに今、北京を語ることの意義があるのではないだろうか。

注

- 1)「仏学者「高層ビルで台無しにされる北京…ソウルは半分ぐらい」」(中央日報日本語版、2022年8月26日配信、<https://japanese.joins.com/JArticle/294823?sectcode=400&servcode=400>、最終アクセス日：2022年11月14日)

文化学園所蔵「着物図案」およびその関連資料群について

Kimono Design Resources Accessible at Bunka Gakuen

近藤 尚子* 田中 直人** 関口 光子*** 中村 弥生****

KONDO Takako, TANAKA Naoto, SEKIGUCHI Mitsuko and NAKAMURA Yayoi

要旨

「BFRI研究・教育資源アーカイブ」は、2020年度に文化ファッション研究機構和装文化研究所が中心となり立ち上げた学内限定サイトである。文化学園が所蔵する膨大な服飾関連資料をWeb上で共有することでその所在を明確にし、研究・教育の場における共同利用を促進しようとするものである。現在はその活性化を図るべく、資料の蓄積とサイト認知度の向上を意図した学内向けの取り組みに努めている。本稿では、新たにアーカイブ化を進めている「着物図案」およびその関連資料群について、これまでに完了している調査内容（構成、寸法、彩色、材質、レイアウト）並びに、デジタルアーカイブ化に向けた画像化の手法とサイト掲載情報の検討内容について報告する。

尚、本稿の表3では図案の鮮明な画像を可能な限り掲載しようと試みた。これは、1,306点に及ぶ本資料群のバリエーションに富んだデザインが、あらゆる着想のツールとして幅広く活用できることを示すためであり、それを周知することで「BFRI研究・教育資源アーカイブ」の利用者増加につなげたいと考えるためである。

●キーワード：着物図案（Kimono design）／研究資源（research resources）／アーカイブ（archives）

I. はじめに

文化ファッション研究機構（以下、BFRI）¹⁾ 和装文化研究所²⁾ では、文化学園が所蔵する膨大な服飾関連資料の所在を明確にし、研究・教育の場における共同利用を促進すべく、資料情報をWeb上で共有する学内限定サイト「BFRI研究・教育資源アーカイブ」³⁾ を2020年度に立ち上げた。現在までにサイト掲載を行った資料（作業途中の資料を含む）は、以下の通りである。

・「雑誌『装苑』掲載資料」⁴⁾

所蔵：文化学園ファッションリソースセンター

・「被服構成学実習教材」⁵⁾

所蔵：文化学園大学短期大学部

（現・文化学園大学服装設計研究室）

・「ピエール・カルダン関連資料群」⁶⁾

所蔵：文化学園図書館、文化学園服飾博物館、文化学園ファッションリソースセンター、文化学園大学短期大学部（現・文化学園大学服装設計研究室）、秘書室・総務課

・「形柄帳およびその関連資料群」⁷⁾

所蔵：文化・ファッションテキスタイル研究所

しかし、上記コンテンツの活用が十分になされているとは言い難い状況であるため、現在はその活性化を図るべく資料の蓄積とサイト認知度の向上を意図した学内向けの取り組み（学内研究発表会における報告、本学紀要への投稿など）に努めている。

以下に紹介する資料は、新たにアーカイブ化を進めている「着物図案」⁸⁾ およびその関連資料群である。本稿では、これまでに調査が完了している5項目（①構成、②寸法、③彩色、④材質、⑤レイアウト）並びに、デジタルアーカイブ化に向けた画像化の手法とサイト掲載情報の検討内容について報告する。

II. 文化学園所蔵「着物図案」およびその関連資料群の基礎調査について

本資料群は、2009年頃に文化学園ファッションリソースセンター⁹⁾ が外部より寄贈を受け、この管理を2017年頃に和装文化研究所が引き継いだものである。それ以前の来歴に関しては、資料に残されていたメモなどから辿れる情報が少なく、現時点では推定できていない。

総資料数は1,306点。16個の透明なケース（930mm×

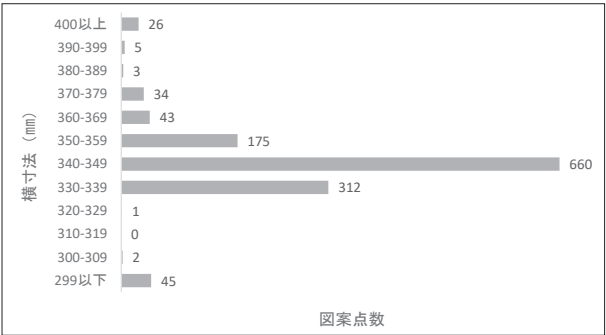
395mm×60mm)に保管されている。尚、ケースごとに図案点数が異なり、また一つのケースに様々な図案が混在していることから、分類方法に規則性は感じられない。

表1は縦寸法別の点数を図案の構成(台紙とフィルムの有無)ごとに分類したものである。横寸法別の点数は図1に示す。

表1 台紙とフィルムの有無による縦寸法別の点数

縦寸法 (mm)	台紙あり		台紙なし		合計
	フィルムあり	フィルムなし	フィルムあり	フィルムなし	
700以上	249	113	23	139	524
600~699	19	110	8	22	159
500~599	220	79	27	67	393
400~499	16	27	0	6	49
300~399	12	58	1	24	95
299以下	14	64	0	8	86
合計	530	451	59	266	1,306

※最小値93mm、最大値796mm



※最小値91mm、最大値1,528mm

図1 横寸法別の点数

①構成

- ・フィルムで覆われた図案を台紙に貼り付けたものが530点と最も多いことから、この形態が本資料群における代表的な構成と言える。(表1)(画像1)



画像1 代表的な着物図案の構成

②寸法

- ・図案の縦寸法における最小値は93mm、最大値は796mm。長さ別の枚数では700mm以上が最も多く524点、次いで500~599mmが393点。(表1)
- ・横寸法における最小値は91mm、最大値は1,528mm。330~359mmの合計点数は1,147点で、全体の88%を占める。(図1)

③彩色

- ・彩色パターンは、「彩色あり」「彩色途中」「彩色無し」の3種類。
- ・彩色ありが1,053点(81%)と最も多く、次いで彩色無しが173点(13%)、彩色途中は80点(6%)。

④材質

- ・画用紙に描かれたものが905点(69%)、次いで和紙が218点(17%)。
- ・その他には、薄紙・フィルム・布などに描かれているものもある。

⑤レイアウト

- ・柄の一部分を描いたものと着物全体を描いたものがあり、柄の一部分を描いたものが1,194点(91%)。

Ⅲ. デジタルアーカイブ化に向けた図案の画像化およびサイト掲載情報の検討

1. 図案の画像化における問題と解決策

大型資料のため一般的なスキャナでは画像を読み取ることが出来ないことから、カメラで図案を撮影することとした。カメラを三脚に設置し床に向けることで、上部から撮影を行った。これにより、図案全体を画角に収めることができた。また、フィルムで覆われているものは照明の反射や機材の映り込みが生じるため、試行を重ねる中で最も影響の少なかった方法(画像2)を採用することとした。詳細は以下の通りである。(表2)

表2 撮影方法

撮影場所	文化学園大学F館4階F48
	条件：天井灯に蛍光灯(FHF 32EX-N-H)を使用、窓が無い
撮影機材	カメラ：SONY RX100VI (DSC-RX100M6)
	三脚：Velbon Mark-7, PH-270
セッティングなど	・三脚を使用し上部から撮影する
	・反射等防止のため図案に対して三方を黒い布で覆う(画像2)
	・撮影はオートフォーカスで行う



画像2 撮影機材のセッティング

2. サイト掲載情報の検討

本取り組み^{4) -7)}にて調査、公開する情報は、検索利便性を意識して選定した数件の項目のみであり、追加調査の余地を大きく残したもの、といえる。これは、自ら調査することを研究の第一歩と捉える多くの利用者には、「きっかけとなる情報」が「数多く」公開されることこそ有効である、と考えるためである。本取り組みでは継続して、詳報ではなく概報を、なるべく多く掲出することを目指している。

尚、本サイトでは図案ごとに割り当てられた番号と図案サイズを表記する予定である。また、検索に必要なキーワードとして、「柄の種類」と「柄の向き」の掲載も検討している。

①検索キーワード：柄の種類

「着物図案」と言うと和様や懐古趣味的なデザインをイメージされることが多いと思うが、実際には古典から現代、具象から抽象まで、バリエーションに富んだデザインが含まれている。着物の枠にとらわれないあらゆるデザインの着想ツールに成り得る資料であるため、多くの人に幅広く活用してもらえよう、誰にとっても分かりやすいキーワードとして「柄の種類」が適していると考ええる。

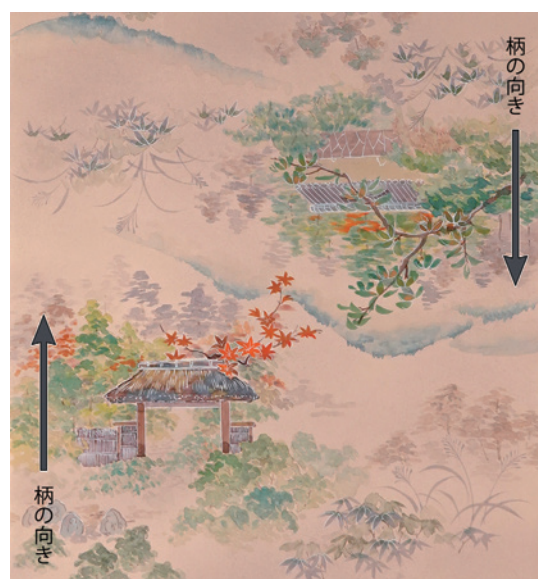
②検索キーワード：柄の向き

図案には、柄に上下の向きがあるもの（画像3）とないもの（画像4）とがあり、それが着物の種類（訪問着、小紋など）を決める一指標となる。柄の向きを示すことで、用途に合った図案を容易に検索できることから、実際に着物図案を作成しようとする人にとって便利なツールになると考える。

「柄の種類」と「柄の向き」による分類を、着物図案の画像と共に表3に示す。



画像3 柄に上下の向きがある着物図案（植物模様）



画像4 柄に上下の向きがない着物図案（風景模様）

Ⅳ. おわりに

本稿では、「着物図案」およびその関連資料群の鮮明な画像を、可能な限り掲載しようと試みた。これは、本資料の魅力を一人でも多くの人に知ってもらいたいとの思いによるものであり、それが結果として「BFRI研究・教育資源アーカイブ」の利用者増加につながると考えるためである。尚、本資料のサイト公開については来年度を予定している。

最後に、本取り組みを通して問題点も見えてきた。それは、資料の未整理状態が長期化することによって生じる情報の喪失である。2023年に創立100周年を迎える本学園では、他の教育機関と同様に、研究・教育に関する資料が日々蓄積されている。しかし、多くの職員にとって資料整理は主たる業務でないことなどから、その整理は滞り情報が失われつつある。歴史ある貴重な資料情報を後世に引き継ぐためには、研究室に所蔵される資料の整理を業務として捉え、継続的に進めることが必要ではないだろうか。本稿を、所蔵資料の整理の必要性和向き合うためのきっかけとして頂けたらと思う。






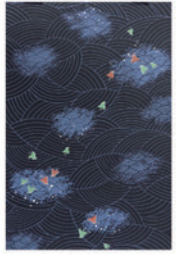




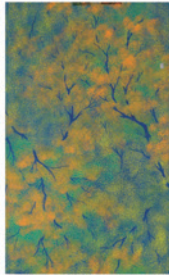



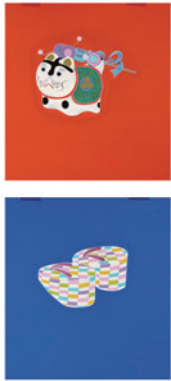
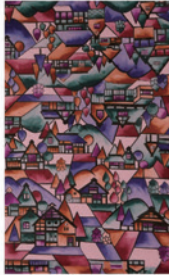


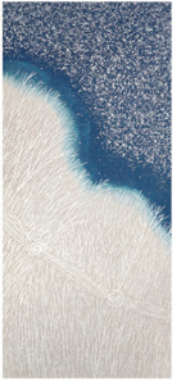


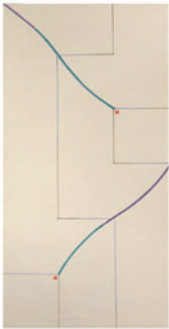

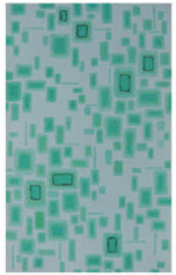
謝辞 調査にご協力いただきました瀬藤貴史氏、文化学園ファッションリソースセンターに御礼申し上げます。

注

- 1) 文化ファッション研究機構（BFRI）は、2008年度に文部科学省より「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」に採択され、「服飾文化共同研究拠点」として設立された研究拠点である。
- 2) 和装文化研究所は、2013年度に発足した和装文化ときものに関する研究などを行う機関である。
- 3) 「BFRI研究・教育資源アーカイブ」は、2020年に和装文化研究所が中心となり、学園内の研究・教育資源に関する情報をネットワーク上で公開・共有するために立ち上げた学内限定サイト。公開、共有に向けた準備作業に誰もが容易に携われるよう「既存の施設、設備、道具を利用し、既存の人材で可能な方法」を用いることを方針としている。
- 4) 近藤尚子，田中直人，中村弥生，関口光子：学園内所蔵資料の研究利用促進に向けた初歩的検討と試行—デジタルアーカイブ化を意識した未整理資料調査と概報作成—，文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要，50，pp.119-124（2019）
- 5) 近藤尚子，田中直人，中村弥生，小出恵，関口光子：文化学園大学短期大学部所蔵被服構成学実習教材について，文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要，51，pp.136-139（2020）
- 6) 近藤尚子，田中直人，中村弥生，小出恵，関口光子：文化学園所蔵のピエール・カルダン関連資料群の紹介，文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要，52，pp.111-116（2021）
- 7) 近藤尚子，田中直人，中村弥生，関口光子：文化学園所蔵「形柄帳」およびその関連資料群のアーカイブ化，文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要，53，pp.83-87（2022）
- 8) 着物図案とは、着物の下絵として描かれ彩色された模様であり、着物全体をイメージするためのデザイン画を指す。

9) 文化学園ファッションリソースセンターは、文化学園大学と文化服装学院の附属機関として1999年7月に開設された。テキスタイル資料室、映像資料室、コスチューム資料室、企画室で構成されている。

表3 「柄の種類」と「柄の向き」による分類

	柄に上下の向きがある			柄に上下の向きがない		
動物						
植物						
建物、器物、風景						
幾何学、その他						

文化学園大学紀要 投稿規程

第1条 紀要への投稿は、原則として文化学園大学教員とする。

(投稿原稿)

第2条 投稿原稿は他の出版物に発表されていない原著とする。

- 2 原則として一人1編とする。ただし、共著論文の第2執筆者以降の場合はこの限りではない。
- 3 投稿原稿は図表等を含め、刷り上がり15ページ以内を原則とする。
- 4 原稿執筆の詳細は、執筆要項を別に定める。

(投稿手続)

第3条 投稿原稿は原則として登録を経て、研究委員会の定める期日までに同委員会に提出する。

(原稿の審査)

第4条 投稿原稿の掲載の適否に関する最終判断は、研究委員会が行う。

(校正)

第5条 校正は原則として再校までとし、執筆者の責任において行う。

(別刷)

第6条 別刷は、論文1編につき50部までは無料とする。

(著作権及び著作物の電子化と公開許諾)

第7条 紀要に掲載された著作物の著作権は執筆者に帰属するが、次の制約を受ける。

- (1) 掲載された論文は、「電子化及びインターネット公開許諾書」(別紙様式)により許諾を得たうえで電子化し、研究委員会が適当と判断したネットワーク上に公開する。
- (2) 公開許諾後これを撤回する場合は、研究委員会委員長あてに書面でその旨申し入れる。
- (3) 紀要に掲載された個々の著作物について、著作権侵害等の紛争が生じた場合は、当該著作物の著作権者の責任において処理する。

(事務)

第8条 紀要編集に関する事務は、事務局研究協力室が行う。

(規程の改廃)

第9条 この規程の改廃は、教授会の議を経て、学長が定める。

附 則

- 1 この規程は、平成18年4月1日から施行する。
- 2 次に掲げる規程は、廃止する。
 - (1) 文化女子大学紀要 服装学・造形学研究投稿規程
 - (2) 文化女子大学紀要 人文・社会科学研究投稿規程

附 則

この規程は、平成22年4月1日から改定施行する。

附 則

この規程は、平成23年4月1日から改定施行する。

(文化女子大学・文化女子大学短期大学部から文化学園大学・文化学園大学短期大学部へ校名変更)

附 則

この規程は、平成28年4月1日から改定施行する。

附 則

この規程は、平成30年4月1日から改定施行する。

附 則

この規程は、2022年4月1日から改定施行する。

紀要の変遷

- 1 昭和43（1968）年11月 『研究紀要』創刊

『研究紀要』創刊 1集（1968.11）—23集（1992.1）

- 2 平成4（1992）年度 標題を 『研究紀要』から
『文化女子大学紀要 服装学・生活造形学研究』と
『文化女子大学紀要 人文・社会科学研究』とに改題する。

『文化女子大学紀要 服装学・生活造形学研究』24集（1993.1）—31集（2000.1）
『文化女子大学紀要 人文・社会科学研究』創刊 [1]号（1993.1）—19集（2011.1）

- 3 平成12（2000）年度 標題を 『文化女子大学紀要 服装学・生活造形学研究』から
『文化女子大学紀要 服装学・造形学研究』に改題する。

『文化女子大学紀要 服装学・造形学研究』32集（2001.1）—42集（2011.1）

- 4 平成23（2011）年度 標題を 『文化女子大学紀要 服装学・造形学研究』と
『文化女子大学紀要 人文・社会科学研究』から
『文化学園大学紀要 服装学・造形学研究』と
『文化学園大学紀要 人文・社会科学研究』とに改題する。

『文化学園大学紀要 服装学・造形学研究』43集（2012.1）—46集（2015.1）
『文化学園大学紀要 人文・社会科学研究』20集（2012.1）—23集（2015.1）

- 5 平成27（2015）年度 『文化学園大学紀要 服装学・造形学研究』と
『文化学園大学紀要 人文・社会科学研究』を合冊して、
『文化学園大学紀要』（服装学・造形学研究 人文・社会科学研究）を発行する。

『文化学園大学紀要』（文化学園大学 [編]）47集（2016.1）

- 6 平成28（2016）年度より標題を『文化学園大学紀要』から
『文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要』に改題する。

『文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要』48集（2017.1）—

- 7 令和4（2022）年度より標題を『文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要』から
『文化学園大学紀要』に改題する。

『文化学園大学紀要』54集（2023.3）—

文化学園大学紀要

研究委員会

委員長	高村 是州
副委員長	安永 明智
*副委員長	曾根 里子
書記	井口 彰子
書記	熊谷 望
書記	三品 和之
*委員	中沢 志保
委員	昼間 行雄
*委員	白井 菜穂子
*委員	砂長谷 由香
委員	嘉松 聡
*委員	渡邊 裕子
*委員	工藤 雅人
委員	二茅 みゆき
委員	藤澤 千晶

(*は、紀要編集担当)

文化学園大学紀要 第54集

発行日	2023年3月31日
発行	文化学園大学 〒151-8523 東京都渋谷区代々木3-22-1 電話 03(3299)2304
印刷所	株式会社文化カラー印刷 〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町3-4-9 水道橋MSビル4階 電話 03(3264)7575
